日本で学ぶ留学生のための
中級日本語教科書

出会い

実践のヒント集

東京外国語大学留学生日本語教育センター編著

BY NC ND
東京外国語大学留学生日本語教育センター

目　次

はしがき ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

■第１章　『出会い』のコンセプトについて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
1-1　『出会い』の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
1-2　『出会い』のコンセプト ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

■第２章　本書を用いた授業シラバスの例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
2-1　総合型日本語科目のシラバス例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
2-2　技能別日本語科目のシラバス例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

■第３章　本冊の使い方のポイントと実践例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
3-1　トピック１（読解活動） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
3-2　トピック２（聴解活動） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
3-3　タスク ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

■第４章　話し合いの進め方のポイントと実践例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
4-1　ブレーンストーミングをする ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
4-2　調べたことを報告し合う ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
4-3　自分の考えを１文で表現する ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58

■第５章　別冊の使い方のポイントと実践例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
5-1　文型練習 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
5-2　表現練習 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64

■第６章　本書を用いた発展的活動の事例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
6-1　体験型学習・フィールドワーク・フィールドトリップ ・・・・・・・・・・・・ 67
6-2　レポート集作成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

■第７章　私のくふう ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81

お知らせ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
参考文献 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91

cc BY NC ND

はしがき

2015 年に『日本で学ぶ留学生のための中級日本語教科書 出会い』の本冊を刊行して以来、ワークショップや「ユーザー教員ネットワーク」のメーリングリストなどを通じて、本書を使ってくださっている先生がたとの教育実践交流を重ねてきました。授業を見学させていただいたり、教員同士の交流の場を設けていただいたりしたこともあります。また、2018 年 12 月には、本書の採用校の先生がたをお招きして『出会い』の教育実践報告会を開催し、それぞれの教育現場での取り組みや日頃の教育実践における工夫について報告し合い、より良い実践のあり方について共に考える機会にも恵まれました。こうした教育実践交流を通して、異なる教育現場だからこそ、互いに学ぶこと、気づくことが多いということを実感しています。

この「実践のヒント集」（以下「ヒント集」）は、これまでの教育実践交流の集大成として、本書を使ってくださっている様々な教育機関の先生がたと共同で作り上げたものです。ヒント集では、教科書を用いた実践事例をできるだけ詳細に記述することによって、教科書のコンセプトや本書を用いた教室活動の具体的なイメージを伝えたいと考えています。このヒント集をお読みいただいて、「こんな使い方もあるのか」とか「自分の授業でも試してみたい」などと思っていただけたら幸いです。このヒント集がそれぞれの現場における教育実践の「ヒント」となり、『出会い』を用いた教育実践の可能性を広げる一助となることを願っています。

最後に、「実践のヒント集」の作成にあたって、第 2 章「本書を用いた授業シラバスの例」、第 6 章「本書を用いた発展的活動の事例」、第 7 章「私のくふう」をご執筆くださった先生がた、ヒント集の試作版の校正にご協力いただいた先生がたにお礼申し上げます。また、これまで、授業見学や交流会等の機会を与えてくださった機関の先生がた、実践に関する情報をメーリングリストにお寄せいただいた先生がたにも、心から感謝しております。そして、『出会い』の採用校の先生がたとのネットワーク作りにご協力いただいた、ひつじ書房の皆さまにも感謝申し上げます。今後も、本書を通じた教育実践の輪が広がっていくことを願っています。

2019 年 3 月吉日

東京外国語大学 大学院国際日本学研究院
工藤 嘉名子・大津 友美

東京外国語大学留学生日本語教育センター

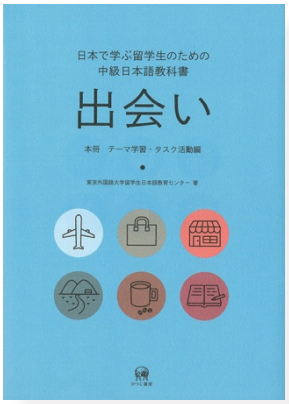
■第１章　『出会い』のコンセプトについて

本章では、『出会い』がどのような教科書なのかを知っていただくために、教科書の概要とコンセプトについてご説明したいと思います。

1.『出会い』の概要

ここでは、『出会い』の概要について、①タイトル、②対象、③目的、④テーマ、⑤タスク、⑥各課の構成、⑦所要学習時間の順にご説明します。教科書の「はしがき」と「本書の使い方」も併せてお読みください。

●タイトル



本書のタイトルは『日本で学ぶ留学生のための中級日本語教科書 出会い』です。本冊と別冊の２分冊構成になっています。本冊の「テーマ学習・タスク活動編」は、日本社会・文化に関するテーマ学習とタスク活動を組み合わせた内容重視の教科書で、別冊の「文型・表現練習編」は、本冊でのテーマ学習とタスク活動を言語的側面から補完し、学習をより円滑に進めるための教科書です。

『出会い』というタイトルには、異文化との出会い、新しい知識との出会い、地域の人々との出会い、素晴らしい友人たちとの出会い、そして、留学するまで意識することのなかった自文化や自分自身との新たな出会いなど、様々な出会いを通して留学生活を豊かで有意義なものにしてほしいという思いが込められています。インターネット等のメディアを通して、世界中どこにいても日本に関する情報が手に入る今日だからこそ、日本に留学することでしか得られない「出会い」や学びを実現してほしいと思っています。また、本書を作成するにあたって、私たち筆者も、取材や校閲、資料提供などを通して実に多くの方々と出会い、自分自身の世界が広がる喜びを味わうことができました。留学生たちにもそうした喜びを味わってもらいたいと願っています。

BY NC ND

●対象

本書は、主に日本国内で日本語を学ぶ留学生のための教科書です。交換留学生のための日本語プログラムや、夏期コースやショートステイといった短期留学プログラム、学部・大学院進学のための予備教育課程など、多様な日本語プログラムでお使いいただけます。また、日本事情や多文化理解教育といった、日本社会・文化をコンテンツとして扱う科目でも、主教材としてお使いになれるでしょう。

学習者のレベルは、中級後半を想定しています。中級レベルの日本語をある程度学んだ経験が必要です。ちなみに、別冊の文型練習の学習項目は、日本語能力試験 N3 相当のものが約 7 割、N2 相当のものが約 3 割となっています。また、N3（旧 2 級）以上の漢字語彙にはルビが振ってあります。

●目的

本書の主な目的は、①日本社会・文化に関する生きた知識を獲得すること、②自分の考えを日本語で互いに伝え合う力を養うこと、③クラスメートや地域の人々など身近な他者と積極的に関わっていく力を養うこと、の 3 つです。教科書で学んだ知識を教室の外の世界と結びつけ、日本社会や身近な他者との関係性の中で捉え直してほしいと考えています。

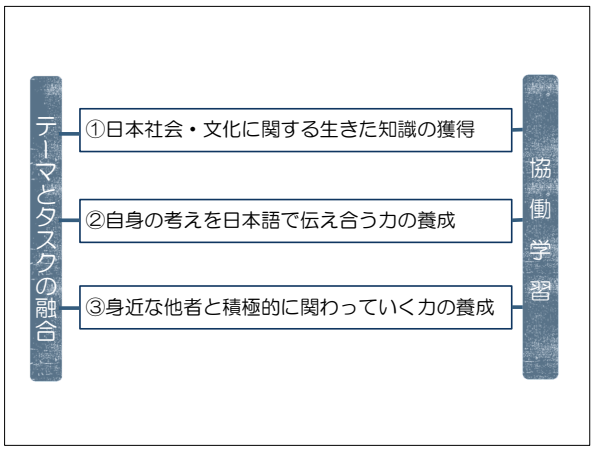


図１　本書の目的

また、本書には、これらの目的を達成するために、①テーマとタスクの融合、②協働学習という 2 つの「しかけ」があります（図 1）。本書の両輪となるこれら 2 つのしかけについては、第 2 節「『出会い』のコンセプト」で説明します。

●テーマ

本書には 6 つのテーマがあります。「異文化との出会い（第 1 課）」「人生とキャリア（第 2 課）」「地域と共に生きる（第 3 課）」「自然との共生（第 4 課）」「『食』にみる世界（第 5 課）」「子どもと教育（第 6 課）」の 6 つです。いずれも日本社会や日本文化と関わりの深いテーマで、日本社会の中で留学生に一度は考えてほしいテーマです。

BY NC ND

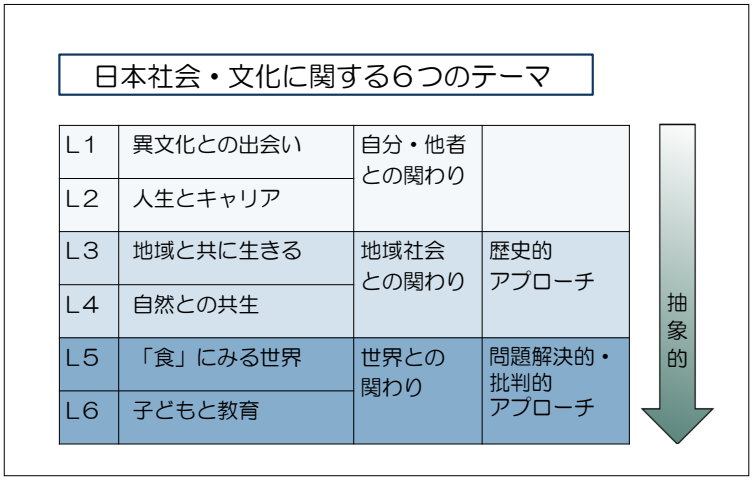


図２　本書の６つのテーマ

各課には、トピック１（読解教材）とトピック２（聴解教材）の２つのトピックがあり、読む・聞くという活動を通して、その課のテーマについて多面的に学べるようになっています。例えば、第３課「地域と共に生きる」では、トピック１で「商店街」、トピック２で「老舗の豆腐屋」を具体的事例として取り上げ、それらの歴史や地域との関わりについて学ぶことができるようになっています。

また、６つのテーマは、図２に見るように、自分や身近な他者との関わりを考えるもの（第１課・第２課）から、身近な地域社会との関わりを考えるもの（第３課・第４課）、日本に軸足を置いて日本と世界との関わりを考えるもの（第５課・第６課）へと、自己との関わりの文脈が広がるように配列してあります。同時に、第３課・第４課では過去から現在に至る歴史的経緯や社会変化といった観点からテーマについて考える「歴史的アプローチ」が取られ、第５課・第６課では、特定の社会問題について現状・要因・解決策という切り口で考える「問題解決アプローチ」と、物事を多面的・客観的に捉え直す視点を提示する「批判的アプローチ」とが取られています。さらに、課が進むにつれて、本文の内容や表現の抽象度・難易度も高くなるように構成されています。２課毎に階段を上っていくようなイメージです。なお、これらのテーマは、アカデミックな日本語力を養う上でどのようなテーマを扱えばよいのか、という観点から国立総合大学の全学教養科目のシラバスを分析し、その結果に基づき選定・配列したものです[1]。

[1] テーマ選定については、参考文献の大津・工藤（2012）をご参照ください。

東京外国語大学留学生日本語教育センター

●タスク

本書には、それぞれのテーマについて学んだことをもとに、地域社会や地域の人々と積極的に関わっていくための４つのタスク（発表とインタビュー）があります。社会観察やインタビューの手法を用いた実地体験型・社会調査型のタスクで、そのテーマについて学習者自身が調べたことや考えたことを日本語で発信していくためのものであると同時に、地域社会や地域の人々との関わりの中でテーマについての理解を深めたり、相対的に捉え直したりするためのものです。本書のタスクは、「日本社会・文化に関する知識を深め、地域社会や身近な他者と積極的に関わっていくことを目指した総合的な言語活動」で、「知識」「言語」「思考」「社会」「他者」を有機的に結びつける知的言語活動だと考えています（図 3）。

テーマとタスクの対応は図４の通りです。それぞれのテーマとタスクが実際にどう結びついているのかについては、第２節「『出会い』のコンセプト」でご説明します。

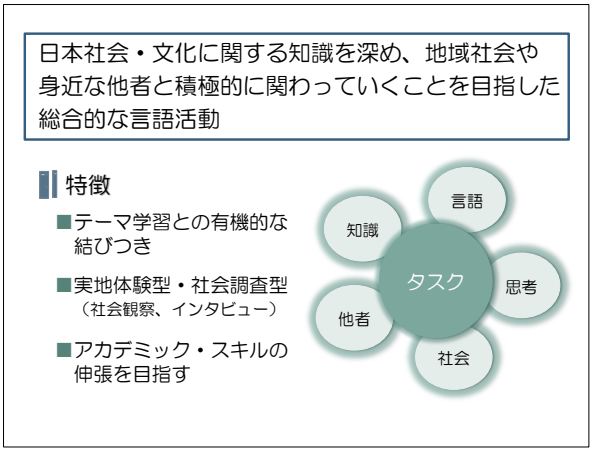
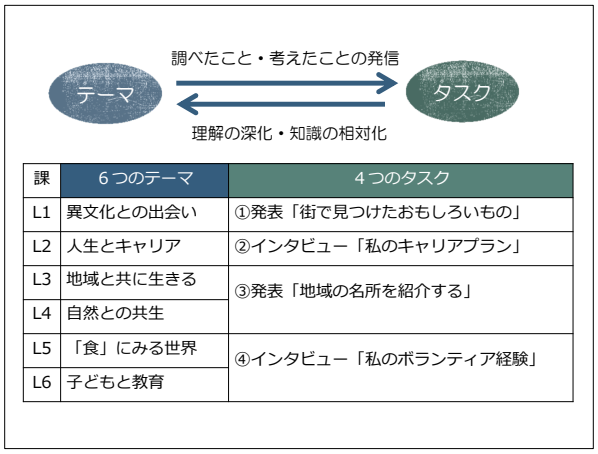


図３　本書のタスク



課	６つのテーマ	４つのタスク
L1	異文化との出会い	①発表「街で見つけたおもしろいもの」
L2	人生とキャリア	②インタビュー「私のキャリアプラン」
L3	地域と共に生きる	③発表「地域の名所を紹介する」
L4	自然との共生	
L5	「食」にみる世界	④インタビュー「私のボランティア経験」
L6	子どもと教育	

図４　テーマとタスクの対応

●各課の構成

本冊の各課の構成は、次ページの図５の通りです。「考えてみよう」から「話し合ってみよう」、そして「タスク」へと進むにしたがって、テーマへの理解も深まるように設計してあります。「考えてみよう」と「話し合ってみよう」はグループディスカッションを主とした協働学習のための活動です。また、トピック１の「読んでみよう」、トピック２の「聞いてみよう」もペアやグループでの読解・聴解活動を念頭においています。それぞれの進め方については、第３章「本冊の使い方のポイントと実践例」をご参照ください。

BY NC ND
東京外国語大学留学生日本語教育センター

トピック１（読解・文章体）	トピック２（聴解・口語体）
①考えてみよう	①考えてみよう
②予習シート	②場面・解説
③読解に必要なことば	③聴解に必要なことば
④読んでみよう	④聞いてみよう
⑤資料（写真・図表）	⑤資料（写真・図表）
⑥内容確認のための質問	⑥話し合ってみよう
⑦話し合ってみよう	⑦スクリプト
⑧タスク　＊L1、L2、L4、L6の後	

理解の深まり

※網掛けは協働学習を想定

図５　本冊における各課の構成

●所要学習時間

本冊と別冊の両方をお使いになる場合の所要学習時間の目安について、交換留学生のための日本語プログラムでご使用になる場合と、夏期コースなどの短期集中プログラムでご使用になる場合の 2 つのケースを例にご説明します（図 6）。交換留学生のための日本語プログラムの場合、週 5 コマ×13 週で 65 コマあれば、多少駆け足になる部分もありますが、全ての課とタスクをカバーすることができます。短期集中プログラムの場合、週 10 コマ×4 週で 40 コマだとすると、第 1 課～第 4 課のテーマ学習と地域のフィールドワークを組み合わせる形で、タスク 1 とタスク 3 を行うとよいでしょう。

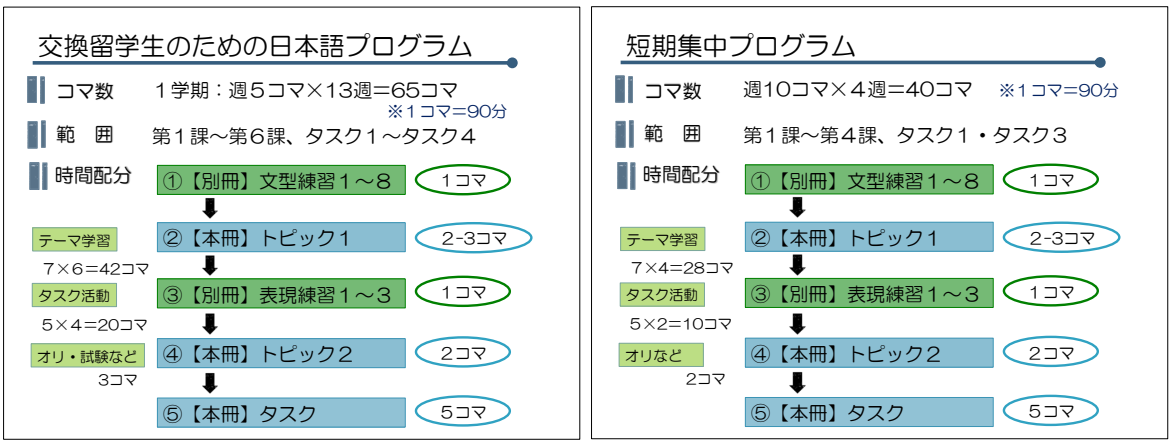


図６　所要学習時間の目安（交換留学生のための日本語プログラムと短期集中プログラムを例に）

東京外国語大学留学生日本語教育センター

2.『出会い』のコンセプト

ここでは、本書の根底にある、①テーマとタスクの融合、②協働学習、③アカデミックな日本語力の養成、という３つのコンセプトについて、それぞれご説明します。

●テーマとタスクの融合

テーマとタスクの対応関係については前にも述べましたが、本書では、読解・聴解活動によるテーマ学習とタスク活動とが切り離せない関係にあります。テーマへの理解をさらに深めるためにタスクの遂行は不可欠であるとともに、タスクの遂行にはテーマに関する内容的知識と言語的知識が不可欠です。また、次ページの図７に示す通り、テーマとタスクは、ある共通の切り口によって有機的に結びついています。「テーマとタスクの融合」という表現は、このような意味合いで用いています。

例えば、第１課「異文化との出会い」では、「日本留学で出会う異文化」をテーマとしたトピック１「留学することの意義」とトピック２「街で見つけたおもしろいもの」の学習を行った後、タスク１で、学習者自身が街で見つけた「おもしろいもの」の写真を撮り、日本文化について不思議に思ったことや考察したことを発表します。ここでは、「自分というフィルターを通して見た日本」という共通の切り口で、テーマとタスクが結びついています。同時に、トピック２は、タスク１の発表のモデルとしての役割も持っています。

第５課「『食』にみる世界」では、トピック１で「フェアトレード」、トピック２で「フードマイレージ」を事例として取り上げ、「食」に関わるグローバルな問題の解決に向けた取り組みの事例について学びます。第６課「子どもと教育」では、トピック１で外国人児童生徒の問題、トピック２でNPO法人「ラオスのこども」の活動に焦点を当て、子どもの教育に関する問題とそれに対する支援について学びます。そして、タスク４で、社会問題解決のために活動している地域のボランティアの人にインタビューし、ボランティア活動の内容や体験談について報告します。ここでは、「身近な社会問題とその解決に向けた具体的な取り組み」という共通の切り口で、テーマとタスクが結びついています。また、第５課、第６課のトピック２は、いずれも目上の人へのインタビューを題材としており、タスク４でのインタビューに役立つ表現やストラテジーが盛り込まれています。

本書のテーマとタスクの間にはこのような密接な関係がありますので、トピック１・トピック２のテーマ学習とタスク活動を切り離さずにお使いいただくことで、テーマへの理解も深まり、日本語の運用力も着実に身につくのではないかと思います。

CC BY NC ND

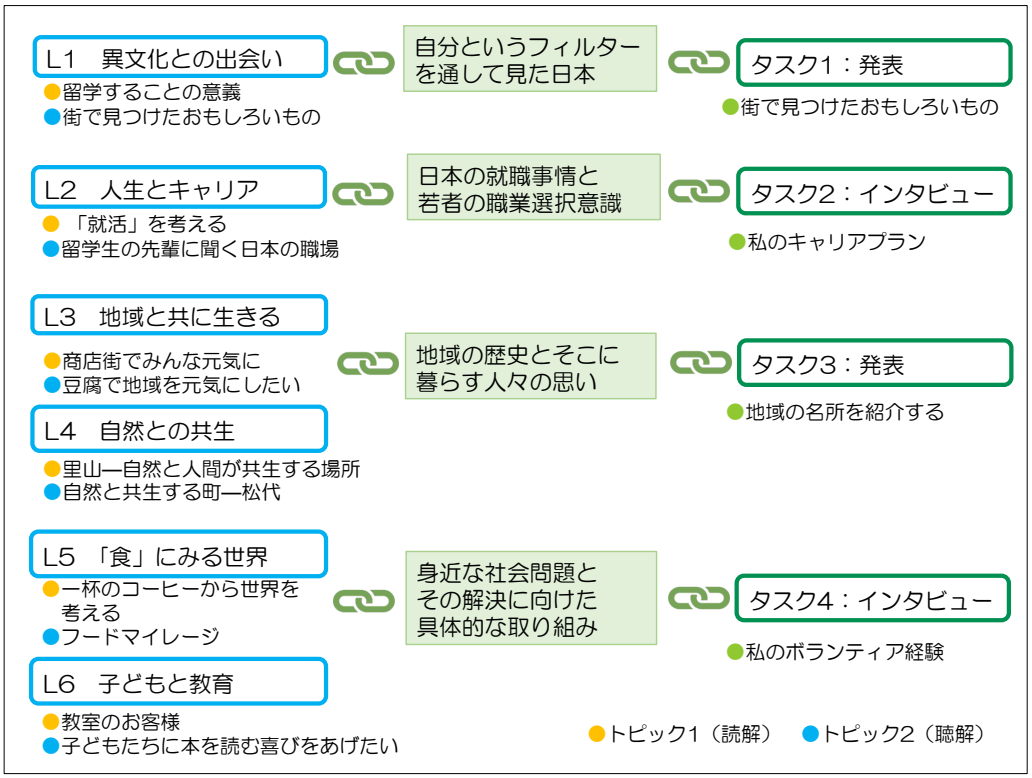


図７　テーマとタスクを結びつける共通の切り口

●協働学習

本書の目的である「自分の考えを日本語で互いに伝え合う力の養成」と「クラスメートや地域の人々など身近な他者と積極的に関わっていく力の養成」を達成する上で、協働学習は欠かせません。「協働学習」の考え方は、分野によって実に多様ですが、本書では、「協働学習」を「多様な学習者が共に課題に取り組むことで、一人または同質の学習者同士では達成が難しい課題の遂行が可能になり、新たな発見や発想が生み出される学びのプロセス」だと考えています。メディアリテラシー教育を専門とする坂本(2014)は、「協働学習」によって、「多様で異質な学習者が、お互いの能力やスキル、地域や文化的な資源を共有し、対等なパートナーシップと信頼関係を構築することで、同質的な組織内学習ではとうてい不可能な高い学習目標や課題の達成が可能になり、新たな『学びの共同体』と『学びの文化』が作られる（p. 133）[2]」と述べていますが、本書で考える「協働学習」は、このような考え方と相通ずるものがあります。多様な文化背景・教育背景を持つ留学生のクラスだからこそ、「互いの個性を認め合い、違いを乗り越えて、新たな価値を創造していく」ことが可能だと考えています。

[2] 坂本旬（2014）『メディア情報教育―異文化対話のリテラシー―』法政大学出版局

BY NC ND

協働学習の進め方や実践例については、第3章「本冊の使い方のポイントと実践例」と第4章「話し合いの進め方のポイントと実践例」をご参照ください。

●アカデミックな日本語力の養成

教科書のどこにも「アカデミック」という言葉は出てきませんが、本書には「アカデミックな日本語力の養成」という、もう一つの大切なコンセプトがあります。本書は、もともとアカデミックな日本語力の養成を目指した教科書として開発を始めました。教材開発の基礎調査として国立総合大学の全学教養科目のシラバスを分析したのも、専門分野を横断するような教養的知識とは何か、大学ではどのような知的言語活動が求められているのかを探り、中級後半レベルの留学生に相応しいテーマとタスクを選定するためでした[3]。

「アカデミックな日本語力」の定義も多様ですが、本書では「大学や企業などで営まれる日本語での知的活動に必要な知識・思考力・表現力」だと考えています。思考力には課題発見・解決能力も含まれますし、表現力には他者とのコミュニケーション能力も含まれます。本書には、こうしたアカデミックな日本語力を伸ばすためのしかけがあちこちに埋め込んであるのですが、ここでは、タスクを例にご説明します。

本書の 4 つのタスクには、いずれもアカデミック・スキルと言語表現の 2 つの観点から、それぞれ学習項目が設定してあります（表 1）。タスクは徐々に複雑かつ高度になっていきますが、前のタスクで学んだことを応用しながら新しい課題がこなせるよう、既習の項目に新たな項目を加える形で学習項目が配列してあります。異なるタスクの中で、同じ項目を繰り返し学習することで、段階的に発表やインタビューに必要なアカデミック・スキルと言語表現を身につけていくことができると考えています。なお、これらの学習項目は、各タスクの Can-do チェック表にも反映させてあります。タスク Can-do チェック表を見ると、そのタスクで何が大切か、何ができるようになるのか、といったことが確認できます。

[3] タスク選定のための基礎調査については、工藤・大津（2011）をご参照ください。

BY NC ND

表１　各タスクの学習項目　　★新出の学習項目

タスク	アカデミック・スキル	言語表現
1.　発表： 街で見つけたおもしろいもの	①テーマ（題材）の選び方★ ②アウトラインの作り方★ ③原稿の書き方★ ④発表のし方★	①定義を説明する表現★ ②疑問を表す表現★ ③意見を述べる表現★
2. インタビュー： 私のキャリアプラン	①インタビューシートの作り方★ ②インタビューのし方★ ③原稿の書き方 ④スライドの作り方★ ⑤発表のし方	①確認・聞き返し表現★ ②あいづちの表現★ ③引用・伝聞の表現★
3. 発表： 地域の名所を紹介する	①テーマ（題材）の選び方 ②情報収集・整理のし方★ ③アウトラインの作り方 ④原稿の書き方 ⑤スライドの作り方 ⑥発表のし方	①引用・伝聞の表現 ②初対面の人に話を聞くときの表現★ ③コメント・感想の表現★
［発展］レポート：地域の名所	①レポートの書き方（構成・体裁）★	①レポートの文体★
4. インタビュー： 私のボランティア経験	①インタビューシートの作り方 ②インタビューのし方 ③報告書の書き方★ ④口頭での報告のし方★	①敬語★ ②確認・聞き返し表現 ③あいづちの表現 ④レポートの文体 ⑤引用・伝聞の表現

また、アカデミック・スキルは、課題達成までの一連のプロセスの中で養われるものですので、本書ではそのプロセスをステップ化し、何をどのような手順で進めればよいか可視化してあります。例えば、タスク１とタスク２を比べてみましょう。タスク１には８つの STEP、タスク２には９つの STEP があり、それぞれその順番でタスクを進めると課題が遂行できるようになっています（図８）。一見、これら２つのタスクの STEP に共通点はあまりないように見えるかもしれません。しかし、実は２つのタスクでは、①情報収集、②構成決定、③原稿作成、④提示資料作成、⑤口頭発表、⑥意見交換、⑦自己評価、という同様の下位タスクを一定の順序で繰り返しているのです[4]。タスク 3、タスク 4 でも同じです。このように、課題達成までのプロセスを繰り返し経験することで、インタビューや口頭発表の基本的な手法と手順を学ぶことができるはずです。そして、本書のタスクを通して養われるアカデミック・スキルや言語運用力は、上級レベルで求められるレポート・論文作成やプレゼンテーションといった、さらに高度な課題を遂行する際の土台となることでしょう。

[4] 本書のタスクの設計については、工藤（2015）をご参照ください。

BY NC ND
東京外国語大学留学生日本語教育センター

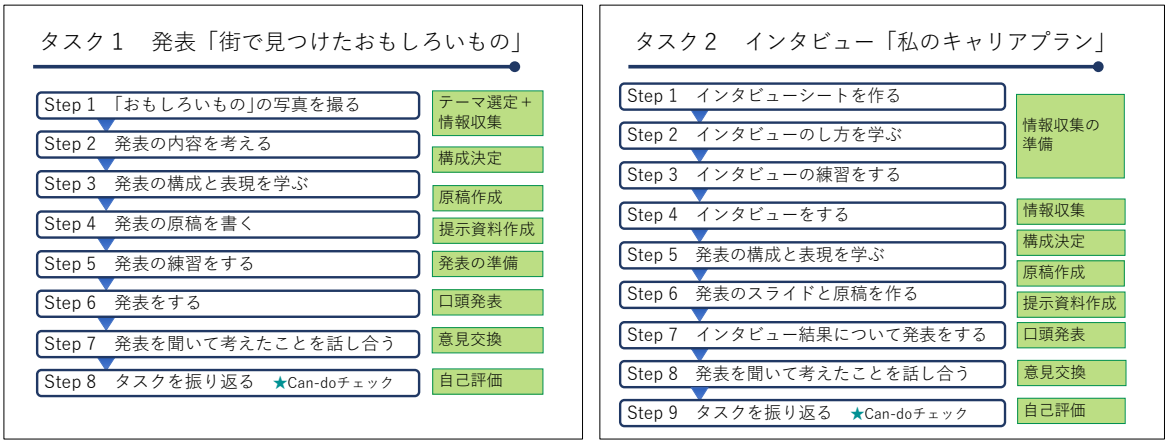


図８　タスク１・タスク２のSTEPと下位タスクの対応

東京外国語大学留学生日本語教育センター

■第２章　本書を用いた授業シラバスの例

本章では、『出会い』を用いてどのような教育実践が可能なのか、本書を実際に使用している機関の授業シラバスの例として、総合型日本語科目（東京外国語大学）と技能別日本語科目（愛知県立大学）の 2 つの事例をご紹介したいと思います。

1．総合型日本語科目のシラバス例

ここでは、4 技能を総合的に扱う科目の例として、東京外国語大学のシラバスおよび進度表の一部をご紹介します。

●科目の概要

東京外国語大学では、「中級 2 総合日本語 401」という、中級後半レベルの学習者を対象とした総合型日本語科目で『出会い』を使用しています。この科目は、本学の正規・非正規留学生のための日本語科目です。協定校からの交換留学生が最も多いのですが、学部正規生や研究生、日本語・日本文化研修留学生（「日研生」）、教員研修留学生（「教研生」）など、様々なカテゴリーの留学生を対象としています。1 クラスに在籍する学生の国籍も 10 数カ国と多岐にわたっています。

授業は毎日 1 コマ（90 分）ずつ週 5 日間あり、1 学期は 13 週あるので、計 65 コマです。この科目は人数が多いため 2 クラス編成になっていますが、1 クラスは 15～20 名という規模です。担当教員は 4 名で、ティーム・ティーチングで授業を進めています。科目の概要は表 2 の通りです。

表２　科目の概要（東京外国語大学）　2017 年度秋学期

■科目名	中級 2 総合日本語 401a/b　　＊2 クラス編成
■授業コマ数	1 日 1 コマ（90 分）×週 5 コマ×13 週＝計 65 コマ
■対象	東京外国語大学で学ぶ正規・非正規留学生 （学部生・交換留学生・研究生・日研生・教研生など）
■受講生数	15～20 名
■担当教員	専任 2 名、非常勤講師 2 名の 4 名によるティーム・ティーチング

東京外国語大学留学生日本語教育センター

●目標

このクラスの目標は下記の通りで、履修登録用のシラバスにもそのように記載してあります。大きく 2 つの目標を掲げていますが、それぞれ下位の目標も示してあります。クラス初日のオリエンテーションでは、目標①の下位目標にある「抽象的な内容の文章」や「少し難しい内容の会話やスピーチ」がどのようなものか理解してもらえるよう、教科書の第 6 課トピック 1 の本文を一部読ませたり、第 4 課トピック 2 の CD を少し聞かせたりして、目標とする日本語のレベルの目安を示しています。

目標

①日本社会や日本文化に関するテーマの学習を通して、中級後半レベルの日本語の運用力をつける。
- 少し抽象的な内容の文章を読んだり書いたりできる。
- 少し難しい内容の会話やスピーチを聞いて理解できる。
- 自分が考えたり調べたりしたことについて、わかりやすく話せる。
- 初級～中級レベルの漢字を読んだり書いたりできる。

②日本社会や日本文化についての知識を深め、自分の周りの人（クラスメートや日本人学生、地域の人など）と日本語で積極的にコミュニケーションできる力をつける。
- 日本社会や日本文化に関するテーマについて、クラスメートや日本人学生とディスカッションできる。
- 日本社会や日本文化に関するテーマについて、日本人学生や地域の人にイン

●成績評価

成績は、下記の①～⑤の観点から総合的に評価しています。試験や漢字クイズも評価の対象としていますが、タスクに最も評価の比重を置いています。なお、成績は、S（90 点以上）から F（59 点以下）までの 11 段階で評価しています。

成績評価

①タスク　・・・・・・・・・・・・・	40%	＊タスク 1～4 の 4 回
②中間・期末試験　・・・・・・	30%	＊3 課ごと
③漢字クイズ　・・・・・・・・・・	10%	＊課ごと全 6 回
④宿題（提出）　・・・・・・・・	10%	＊漢字シート、文型シート、タスクの提出物
⑤平常点　・・・・・・・・・・・・・	10%	＊予習・参加度・協力度など

東京外国語大学留学生日本語教育センター

●進度表

図９はクラスで実際に配布している進度表（予定表）です。クラスでは４週分ずつ配布していますが、ここでは、２週分を例に、普段どのように進度を組んでいるのか注釈を入れました。授業の流れや所要学習時間の目安は p. 6 の図 6（左）をご参照ください。

なお、このクラスでは、各課のトピック１から抽出した漢字 25 字（第５課のみ 30 字）を１日５字ずつ、教科書で用いられる漢字語彙と一緒に導入しています。授業で使っている漢字導入用スライド、漢字プリント、漢字クイズなどの漢字教材はモニター利用が可能です。漢字教材のイメージおよびモニター利用のお申し込みについては、巻末の「お知らせ」をご覧ください。

2017 年度秋学期　「中級２総合401」　予定表

★401ａ … 月・水・金１限、火・木２限　★401b … 月・水・金２限、火・木１限

第１週（10月２日～10月６日）

担当	A	B	B	C	D
曜日	月	火	水	木	金
日付	10月２日	10月３日	10月４日	10月５日	10月６日
授業内容	①オリエンテーション ②自己紹介 ③アンケート	①L1文型１～５ 【練習１】 ②L1 トピック１ 〈考えてみよう〉 〈ことば〉	①L1文型６～８ 【練習１】 ②L1 トピック１ 〈予習シート〉 〈読んでみよう〉	①L1 トピック１ 〈読んでみよう〉 〈話し合ってみよう〉 ②タスク１説明 〈STEP１〉 ※発表は 10／17・18	①L1文型１～８ 【練習２】Fb ②L1表現１～２
漢字				L1 漢字②	L1 漢字③
宿題	★L1文型１～５ 【練習１】	★L1文型６～８ 【練習１】 ★L1予習シート p.17	★L1 漢字① ★L1文型１～８ 【練習２】 ★L1文型シート →10/6 まで	★L1 漢字② ★L1内容質問 pp.20-21 →10/9 まで	★L1 漢字③ ★タスク１の 写真を撮る →10/11 まで
提出				★L1漢字①	★L1 漢字② ★L1文型シート

第２週（10月９日～10月13日）　★10月９日は授業があります！休まないでください。

担当	A	B	B	C	D
曜日	月	火	水		金
日付	★10月９日	10月10日	10月11日	10月12日	10月13日
授業内容	①L1 トピック１ 〈内容質問〉Fb ②L１表現練習３ ③L1 トピック２ 〈考えてみよう〉	①L1 トピック２ 〈ことば〉 〈聞いてみよう〉	①L1 トピック２ 〈スクリプト〉 〈話し合ってみよう〉 ②タスク１ 〈STEP２〉	①タスク１ 〈STEP３～４〉	①タスク１ 〈STEP５〉 ②L２文型１～４ 【練習１】
漢字	L1 漢字④	L1 漢字⑤			☆L1 漢字クイズ
宿題	★L1 漢字④	★L1 漢字⑤		★L２文型１～４ 【練習１】	★L２文型５～８ 【練習１】 ★タスク１の発表の準備
提出	★L1 漢字③	★L1 漢字④	★L1 漢字⑤		

Fb＝フィードバック（Feedback）

文型は２日に分けて導入
問１のみ
クラスで Fb
文型【練習１】を予習してくる
漢字は１日５字ずつ
週末を利用してタスクの題材探し
予習シートは宿題
文型【練習２】は宿題
漢字・文型シートは回収して添削
クラスで Fb
問１のみ
発音練習
授業中に発表原稿作成
授業の最初に実施
スクリプトを読んで確認

図９　総合型日本語科目の進度表の例（東京外国語大学）　2017 年度秋学期

BY NC ND

2．技能別日本語科目のシラバス例

ここでは、技能別日本語科目のシラバス例として、『出会い』を読解（トピック 1）・聴解（トピック 2）・発表（タスク）に分けて使用している愛知県立大学の例をご紹介します。

●科目の概要

愛知県立大学では、「総合日本語Ⅲ」という科目を①読解、②聴解、③発表にそれぞれ特化した 3 つの講義に分けて授業を行っています。①読解クラスでは『出会い』のトピック 1 を、②聴解クラスではトピック 2 を、③発表クラスではタスクをそれぞれ扱っています。3 つの技能クラスを全て受講することを推奨していますが、必須ではないので、各クラスの受講者は多少異なります。クラスレベルは中上級と設定していますが、実際は中級前半から上級レベルの学生が受講しており、クラス内の日本語能力の差が大きいという特徴があります。受講者は交換留学生と研究生で、東アジア・南米・ヨーロッパが受講者の主な出身国です。クラス人数は学期によって違いますが、10 数名～20 数名という規模です。

各技能週 1 回 1 コマ（90 分）で、1 学期は 15 週あるので、各技能 15 回×3 技能で計 45 コマです。非常勤講師 3 名が各クラスを担当しています。各技能クラスは独立していますが、シラバスや授業報告でお互いの授業内容や進み具合を確認し、情報を共有しながら進めています。科目の概要は表 3 の通りです。

表３　科目の概要（愛知県立大学）　2017 年度後期

■科目名	総合日本語Ⅲ
■講義題目	①読解の力を身につける（以下「読解」） ②聴解の力を身につける（以下「聴解」） ③発表の技術を学ぶ（以下「発表)）
■開講曜日・時限	①月Ⅱ　　②金Ⅰ　　③水Ⅰ
■授業コマ数	各クラス 1 日 1 コマ（90 分）×週 1 コマ×15 週＝計 15 コマ
■対象	愛知県立大学で学ぶ非正規留学生（交換留学生・研究生）
■受講生数	各クラス 10 数名～20 数名
■担当教員	非常勤講師 3 名が各クラスをそれぞれ担当

東京外国語大学留学生日本語教育センター

●目標●

各クラスの目標は、表 4 の通りで、履修登録用のシラバスにもクラス毎に記載してあります。各クラスの初回授業のガイダンスで、目標、授業内容、スケジュール、評価方法などを説明しています。各授業のガイダンスは担当者がそれぞれ行っていますが、学期初めの授業を行う担当者（多くは月曜の読解）が、「総合日本語Ⅲ」全体の概要について簡単に説明しています。

表４　各クラスの目標（愛知県立大学）　2017 年度後期

①読解	中級～中級後半程度のテキストを読み、日本社会や日本文化に関する知識を増やすこと、グループワークを通して、自分の考えを日本語で互いに伝え合う力を養うことを目標とする。
②聴解	・インタビューCD を聞いて、大まかな内容を理解することができる。 ・聞いた内容をわかりやすくまとめることができる。 ・自分の考えを他者にわかりやすく伝えたり、まとめたりすることができる。 ・日本社会や文化について理解を深めたり、視野や思考の幅を広げたりする。
③発表	「話す」「聞く」能力を伸ばすことを目標とし、具体的には、「発表」と「インタビュー」活動を通して、普段の「会話」とは異なる「話す技術」の習得を目指す。また、「発表」や「インタビュー」の準備の過程で、日本社会や文化について理解を深めることも目標とする。

●成績評価

各クラスの成績評価は、表 5 の通りです。成績は、S（90 点以上）から D（59 点以下）まで、5 段階で評価しています。以下に、各科目の評価対象について補足説明します。

表５　各クラスの成績評価（愛知県立大学）　2017 年度後期

①読解	授業への取り組み（30%）、課題の提出（30%）、中間・期末試験（20%）、小テスト（20%）
②聴解	授業への参加・貢献度（30%）、課題（20%）、中間・期末試験（各 25%）
③発表	授業態度・参加度（20%）、課題（20%）、発表 1（30%）、発表 2（30%）

BY NC ND

①読解の評価対象（補足）

○授業への取り組み　‥‥‥　グループ活動の中での発言、「読んでみよう」のわからない部分の解決、『内容確認のための質問』（教師と全員で確認）の際の積極的な発言と板書（自分の言葉で書く問題）、振り返りシートの提出、第５課の発表準備（スライドと原稿）

○課題提出　‥‥‥　「文型練習」（各課）

○中間試験・小テスト　‥‥‥　「文型練習」より出題

○期末試験　‥‥‥　「トピック 1」（本文、内容確認のための質問）、「文型練習」より出題

②聴解の評価対象（補足）

○課題　‥‥‥　予習シート（各課）の「考えてみよう」の質問と内容に関連する質問）、「話し合ってみよう」で話したことや各課での学び・気づきを書く課題

③発表の評価対象（補足）

○課題　‥‥‥　タスク１の写真案（3 種類）、発表原稿、他の学生の発表に対するコメントシート、自分の発表に対する振り返りシート、タスク２のインタビューシート、発表原稿、スライド、コメントシート、振り返りシート

○発表　‥‥‥　発表以外にも、オーディエンスとしての参加度合・態度も含む。

●授業計画

各クラスの授業計画は表６（p. 19）の通りです。

①読解

各課を 2～3 回の授業で進めています。「予習シート」（第１課だけは初回授業のオリエンテーションの後全員で行う）、「読んでみよう」「内容確認のための質問」「文型練習」は宿題にし、答え合わせや宿題に関連した話し合いを授業で行っています。「話し合ってみよう」は、話し合いに準備が必要と思われる後半の課については、各自考えをまとめてくるように指導しています。各授業の中で漢字５字をそれぞれ取り上げ、漢字の成り立ち、読み、漢字の使い方（熟語）を紹介しています。また第５課の「話し合ってみよう」（フェアトレード商品の紹介）は、発表内容をレポートにして提出することを最後の課題にしています。

BY NC ND

第 1 課から第 6 課までを全部やるのが理想なのですが、履修者のレベルと人数の関係上、第 6 課についてはやらないことが多くなっています。

試験については、中間試験を文型練習の復習の形で行い、期末試験は、内容理解の確認のため、「本文（読んでみよう）」と「内容確認のための質問」から出題しています。

②聴解

聴解は基本的には各課を 2 回で行います。各課 1 回目の授業で「考えてみよう」「聞いてみよう」（メモとレジュメの作成）、2 回目の授業で「聞いてみよう」（語彙・表現の確認）、「話し合ってみよう」を扱います。授業を円滑に進めるため、新しい課に入る前に予習シート（「考えてみよう」の質問と内容に関連する質問）と「聴解に必要なことば」の確認をすることを課題としています。第 1 課だけは、初回の授業でガイダンスを行った後に授業を開始するので、授業時に予習シートに当たるシートを配布し、その場で考え、話し合います。そのため、学生の人数やレベルにより、3 回の授業にわたるときもあります。

このクラスでは、第 1 課から第 6 課まですべて扱いますが、第 2 課と第 3 課は入れ替えています。これは、第 3 課で取り上げられている「おとうふ工房いしかわ」が愛知県にある企業で、豆腐作り体験教室も行っているので、学生に興味があればそれに参加できるようにするためです。豆腐作り体験のフィールドトリップについては、第 6 章「本書を用いた発展的活動の事例」をご参照ください。

③発表

発表では、タスク 1 とタスク 2 のみ取り上げています。①読解と②聴解が先行していないと、発表の授業を進めにくいので、初回授業では、ガイダンス以外にプレタスクとして、発話にはどんな種類があり、それぞれどんな特徴があるか挙げたり、この授業で必要とされる発表・インタビューに求められる技能について話し合ったりします。

馬場 典子・鎌田 美保・田辺 淳子（愛知県立大学）

BY NC ND
東京外国語大学留学生日本語教育センター

表６　各クラスの授業計画（愛知県立大学）　2017 年度後期

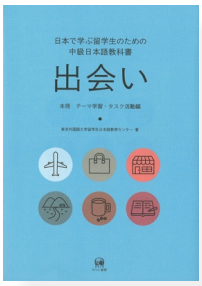
回	①読解（トピック 1）	②聴解（トピック 2）	③発表（タスク）
1	ガイダンス L1-1 考えてみよう	ガイダンス L1-2 考えてみよう 聞いてみよう	ガイダンス 発話の種類とインタビューに求められる技能
2	L1-1 読んでみよう 内容確認のための質問	L1-2 聞いてみよう 話し合ってみよう	タスク 1：導入 発表の内容を考える
3	L1-1 話し合ってみよう L2-1 考えてみよう	豆腐体験教室の説明 L3-2 考えてみよう	タスク 1：発表の構成と表現を学ぶ
4	L2-1 読んでみよう 内容確認のための質問	L3-2 聞いてみよう 話し合ってみよう	タスク 1：発表原稿を検討する
5	L3-1 考えてみよう 読んでみよう	L3-2 豆腐体験教室の準備 （HP での情報収集など）	タスク 1：発表原稿の最終チェックと練習
6	L3-1 内容確認のための質問 L1・L2 文型練習 Fb	L2-2 考えてみよう 聞いてみよう	タスク 1：発表 1
7	L3-1 話し合ってみよう L4-1 考えてみよう	L2-2 聞いてみよう 話し合ってみよう	タスク 1：発表 2 と Fb タスク 2：導入
8	L4-1 読んでみよう 内容確認のための質問	中間試験	タスク 2：インタビューの内容を考える
9	中間試験（L1・L2 文型練習）	L4-2 考えてみよう 聞いてみよう	タスク 2:インタビューシートを作成する
10	L4-1 話し合ってみよう L5-1 考えてみよう	L4-2 聞いてみよう 話し合ってみよう	タスク 2:インタビューシートを検討する･インタビューのし方を学ぶ＋練習
11	L5-1 読んでみよう	L5-2 考えてみよう 聞いてみよう	タスク 2：発表の校正と表現を学ぶ
12	L5-1 内容確認のための質問 L3・L4 文型練習 Fb	L5-2 聞いてみよう 話し合ってみよう	タスク 2：発表原稿と PPT を検討する
13	小テスト（L3・L4 文型練習） L5-1 話し合ってみよう 発表（フェアトレード商品）	L6-2 考えてみよう 聞いてみよう	タスク 2：PPT の最終チェックと発表練習
14	発表レポートのピア・リーディング	L6-2 聞いてみよう 話し合ってみよう	タスク 2：発表 1
15	期末試験・発表・レポート Fb	期末試験・まとめ	タスク 2：発表 2 と Fb・まとめ
備考	・予習シートは宿題（各自「読んでみよう」を読む） ・漢字も 5 字ずつ紹介 ・「内容確認のための質問」は宿題 ・文型練習は宿題 ・宿題として、発表内容をレポートにまとめる。	・「考えてみよう」「聴解に必要なことば」は事前課題 ・宿題として、「話し合ってみよう」で話したことやその課での学びを書く。 ・進度によっては「聞いてみよう」のレジュメ作成は宿題	・「読解」と「聴解」が「発表」に先行する必要がある。 ・原稿や PPT の作成は宿題 ・インタビュー相手を探す、インタビューのアポイントをとるのは宿題 ・インタビューは各自実施

Fb=フィードバック

東京外国語大学留学生日本語教育センター

■第３章　本冊の使い方のポイントと実践例

本章では、『出会い【本冊：テーマ学習・タスク活動編】』を使った授業の進め方のポイントについて、①トピック１(読解活動)、②トピック２（聴解活動)、③タスクの順にご説明します。また、それぞれの実践例についてもご紹介します。



1．トピック１（読解活動）

ここでは、特に協働学習を促すための働きかけを中心に、読解活動の進め方についてご説明します。説明にあたっては、次のような授業の流れを想定しています。また、クラスの人数は、15～20 名を想定しています。なお、「考えてみよう」「話し合ってみよう」など、話し合いの具体的な進め方については、次章で詳しく説明します。

各課の授業の流れ（例）

〈1 日目〉
①考えてみよう
②読解に必要なことばの導入
◆ 宿題：予習シート
〈2～3 日目〉
③予習シートの解答の確認
④読んでみよう
⑤話し合ってみよう
◆ 宿題：内容確認のための質問　→　後日クラスでフィードバック

●考えてみよう

「考えてみよう」は、テーマに関する学習者の既有知識の活性化を図り、テーマへの興味・関心を促すことを主な目的としています。同時に、どのような問いを持って本文を読めばいいのか、といった方向づけをするための活動です。

「考えてみよう」には 3 つの問いがあり、ペアやグループで話し合うことを想定しています。どれも読解活動の入口として大切な問いですが、実際の授業では、全ての問いに十分時間をかけて話し合う余裕がないことも多いかもしれません。限られた時間の中で効率的かつ有意義に話し合いを進めるためには、グループで時間をかけて話し合うのに相応しい問いを 1 つ選び、残りの問いはペアで話し合ったり、クラス全体で個々人の

BY NC ND

考えを出し合ったりするなど、問いによって時間配分や話し合いのし方にメリハリをつけるとよいでしょう。どの問いに時間をかけるかは授業の目的や学習者の特性などによって異なると思いますが、ここでは、「考えてみよう」→「読んでみよう」→「話し合ってみよう」という一連のテーマ学習の流れの中でテーマに関する理解を深める、ということを念頭において説明します。

例えば、第 3 課トピック 1 の「商店街でみんな元気に」の場合、次の 3 つの問いのうち、どれに最も時間をかけて話し合わせればよいでしょうか。

①あなたの住んでいる街には商店街がありますか。その商店街には、どんなお店がありますか。
②あなたは商店街で買い物をするのとスーパーで買い物をするのとでは、どちらが好きですか。
　その理由は何ですか。
③商店街の良さはどんなところだと思いますか。　　—第 3 課（p.88）

この場合、問い③がグループで時間をかけて話し合うのに最も適した問いだと言えます。一見すると、商店街で買い物をした経験のない学習者には意見が出しにくい問いのようですが、実はそれこそが狙いです。「考えてみよう」ではあまり意見が出てこないかもしれませんが、だからこそ本文を読む意義があり、また、身近にある商店街に目を向けるきっかけにもなるのです。そして、「話し合ってみよう」では別の問いかけによって「商店街の良さ」について再度考え、自分自身の理解の深まりを確認することにもつながるでしょう。したがって、「考えてみよう」であまり意見が出てこなかったからといって、教師が商店街の良さを解説する必要はありません。教師は、「日本の商店街の特徴や魅力は何か」「地域の人にとって商店街はなぜ大切なのか」といった問いの答えを探しながら本文を読むよう方向づけるだけで十分です。ちなみに、問い③は、3～4 人のグループで画用紙など大きめの紙に「商店街の良さ」をフレーズや文で書きながら話し合います。話し合いの時間は 10 分程度です。

●読解に必要なことば

「読解に必要なことば」には、トピックのタイトルに含まれるキーワードの他、本文読解をスムーズに進める上で最低限知っておいたほうがよいと思われる語を挙げてあります。学習者が「予習シート」を使って本文を読む前に、クラスで導入するとよいでしょう。

導入の際には、教師が語の意味・用法を解説するのではなく、学習者に意味を類推さ

東京外国語大学留学生日本語教育センター

せることが大切です。また、「リクルートスーツ」や「商店街」「里山」などの語は、図 10 のようにイラストや写真を見せてイメージ化させたり、「生産者」「輸入業者」「小売店」「消費者」のような関連語は、図 11 のように、「コーヒー産業」におけるサプライチェーンという概念の中で理解させたりするとよいでしょう。ただし、「読解に必要なことば」の導入では、「里山」や「フェアトレード」など、本文を読んでしっかり理解させたい概念については、教師が予め解説する必要はありません。

図 10　L4 トピック１「ことば」の導入スライド

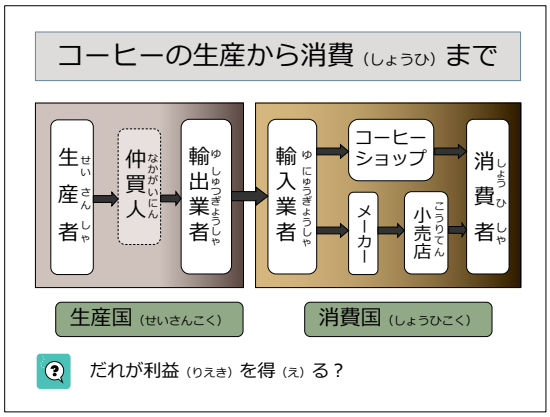


図 11　L5 トピック１「ことば」の導入スライド

●予習シート

「予習シート」は、学習者が自力で本文を読んで要点をつかむためのものです。学習者の自律学習を促し、授業への積極的な参加を促す上でも、クラスでの読解活動の前に「予習シート」をやっておくように働きかける必要があります。経験上、「予習」と言うと、やってこない学習者も多いので、「予習シート」は「宿題」とするとよいでしょう。しかし、アルバイトなどで自宅学習の時間があまり取れない学習者が多いという機関もあるかもしれません。そのような場合には、ペアまたはグループで、授業中に「予習シート」を完成させるというのもよいと思います。

「予習シート」は「○×問題」ですので、本文を読む際には、「○」「×」の根拠を探しながら読むことが大事です。また、本文でよく理解できなかった箇所について授業中に質問できるよう、質問を探しながら読むということも大切です。

授業で「予習シート」の答えを確認させる際には、「○×札」（図 12）など答えが可視化できるものを使って、ペアで答えを判断させるとよいでしょう（図 13）。「○×札」は 100 円ショップでも売られていますが、手製のもので十分です。「○×札」を使うことによって、各ペアの答えが可視化できるだけでなく、札の挙げ方から自信の度合いやペアで意見が割れている様子などもわかります。そして、答えの根拠を説明させるときにも

東京外国語大学留学生日本語教育センター

「○」か「×」か、答えが可視化されているほうが根拠を聞きやすくなります。

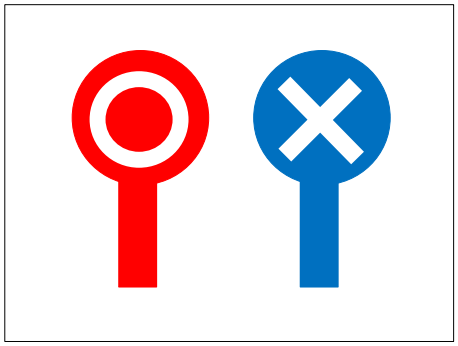


図 12　○×札（裏表）

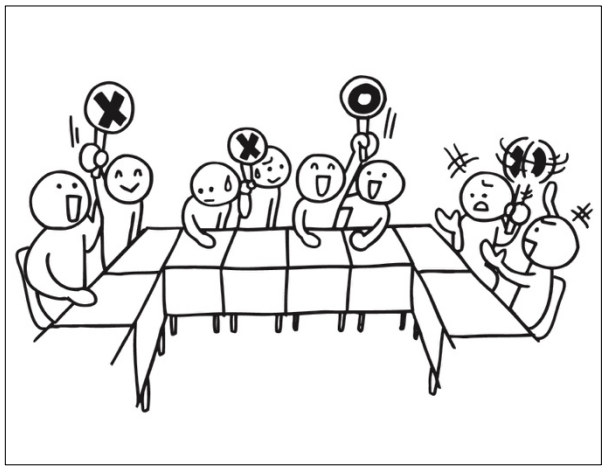


図 13　○×札を活用した「予習シート」の確認のし方

なお、「予習シート」の答えの確認にはあまり時間をかける必要はなく、10 分～15 分で十分です。また、答えが分かれたり根拠がうまく出せなかったりした場合には、正解を保留にし、「読んでみよう」の活動の際にもう一度考えさせるとよいでしょう。

●読んでみよう

「読んでみよう」は、「予習シート」を使って、各自が一度は読んであるという前提で進めます。「読んでみよう」には読解活動のための指示がないので、進め方は授業の目的や学習者の特性によって様々だと思いますが、ここでは、協働で理解を深めていく方法を中心にご説明します。

「読んでみよう」の本文は、中級レベルの留学生にとっては、言語的にも内容的にも少しハードルが高いものになっています。一人で読んだだけでは、解読的な読みや表面的な理解で終わってしまいがちです。また、教師主導の受身的な読みや言語要素の学習に重きをおいた読みでは、学習者個々人の思考力や言語運用力を引き出し、伸ばしていくことは難しいでしょう。しかし、語彙の知識も背景的知識も乏しい学習者たちを一足飛びで深い理解に導いていくのは至難の業ですので、以下でご説明するように、大きく 2 段階に分けて、段階的に理解を深めていくのがよいでしょう。

東京外国語大学留学生日本語教育センター

第１段階：日本語の意味がだいたいわかる

読解活動の第１段階は、本文が音読できて日本語の意味がだいたいわかるといった、ごく表面的な理解のレベルです。この段階では、漢字語彙の読み方や語句の意味・用法の確認が中心になります。ここでは、例として、ペアで音読する「ペア読み」の方法をご紹介します。

◆段落毎にペアで音読し、「わからないこと」を探す
①段落（意味段落）で区切り、ペアになって１文ずつ交替で音読する。
②音読が終わったら、ペアで意味がよくわからない箇所を探す。
③クラス全体で質問を出し合い、一緒に考える。

①のペアでの音読の際には、漢字の読み方や発音、語の区切り方などを確認し合いながら読ませます（図 14）。どこを読めばいいかわかるように、実物投影機で本文を投影するなどして、読む段落を示すとよいでしょう。家で一度読んできてあるので、わからないところや自信がないところを互いに補いながら、音読できるはずです。また、一文ずつ交替なので、集中力も維持できます。実際、ペア読みの音声を録音して聞いてみると、学習者同士で発音を確認したり意味を説明し合ったりして、自分達で問題を解決しようとしている様子がよくわかります。

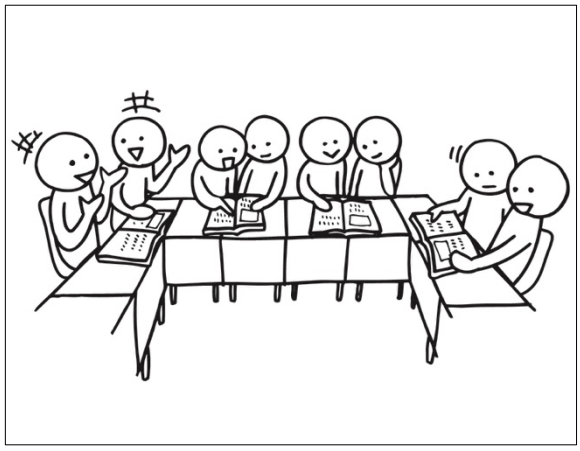


図 14　ペア読み

音読が終わったペアは、②の質問探しを始めます。質問を探す途中で、既に自分達で意味を確認しているのですが、クラス全体で共有できるよう、「質問を探す」ということを課題とします。ペア読みの最中、教師は机間巡視をして、適宜サポートします。

最後に、③の質問の共有をします。その段落でわからなかった箇所を出し合います。その際、質問の答えは、説明できる人に説明させるとよいでしょう。質問が出てこない場合にはもちろん教師から質問してかまいませんが、クラスメートへの質問を考えさせることもあります。例えば、第１課の第１段落では、図 15 のような質問が出てくるで

CC BY NC ND

しょう。教師が質問して意味を確認するより、学習者から質問を引き出すほうが、能動的な読みを促し、授業の活性化につながるはずです。この作業にかける時間は、段落の長さにもよりますが、1 段落あたり 5〜7 分です。

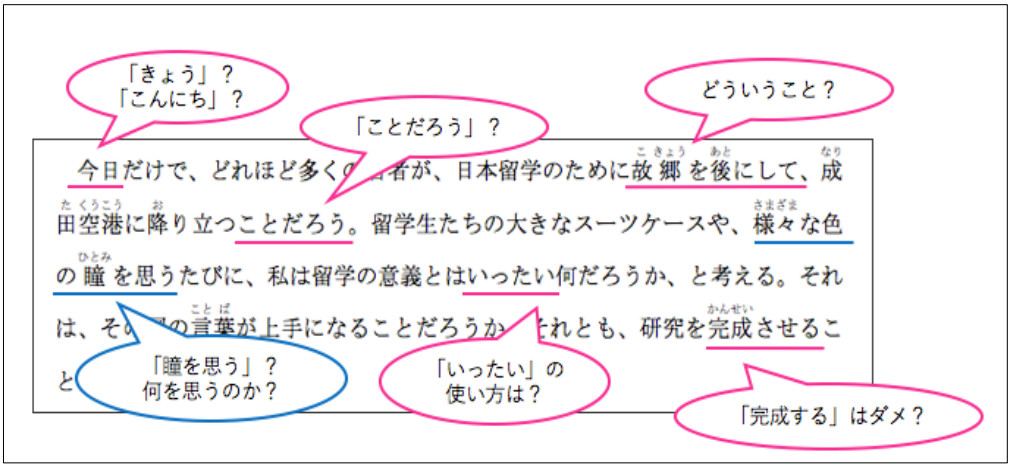


図 15　学習者から出てきた質問（例）：第１課トピック１ 第１段落

第２段階：理解したことをアウトプットできる

読解活動の第 1 段階では、学習者はまだまだ本文の内容をしっかり理解できているとは言えません。しかし、学習者自身は、「だいたいわかった」と思っているはずです。そこで、次の段階では、学習者に「実はまだよくわかっていない」ということに気づかせ、理解したことをアウトプットさせるための問いかけが必要です。ここでは、もう一段階、理解を深めていくための働きかけをいくつか紹介します。

◆図を使って情報を整理する

トピック 1 の本文の中には、「分類」や「因果関係」「対比」など、論理的思考に関わる概念が多く含まれています。中級レベルの学習者の場合、こうした概念に沿って本文の内容を理解するのにも意外に時間がかかります。そこで、ある程度、思考の枠組みを与えてから情報を整理させるといった働きかけが必要になります。

例えば、第 3 課トピック 1（「商店街でみんな元気に」）の第 3 段落（p. 91：11−15）は、商店街の 3 つの種類（門前商店街・闇市から発展した商店街・駅前商店街）とそれぞれの例が分類できるかどうかが理解の鍵となります。上述の第 1 段階での読解活動（ペアでの音読と質問探し）が終わった後、「商店街にはどんな種類がありますか」という質問をしてみてください。学習者の多くは、「種類（分類）」という概念で本文を読んでい

東京外国語大学留学生日本語教育センター

なかったはずですので、「浅草の仲見世商店街に代表されるような江戸時代からにぎわっている門前商店街もあれば、･･･」と、本文をそのまま抜き出して答えることでしょう。そこで、改めて、「商店街はどんなグループ（カテゴリー）に分けられますか。ペアで考えてください」という指示を与えると、ようやく「門前商店街と闇市から発展した商店街と駅前商店街」という上位概念が出てきます（図 16 左）。その後、それぞれの具体例を挙げさせ、分類図を完成させます（図 16 右）。実際の授業では、下図のようなスライドを使ったり板書したりしながら情報を整理していけばよいでしょう。もちろん、学習者自身もノートなどに分類図を書きます。この作業をペアで行うことによって、学習者一人ひとりの能動的な読みを促すことができると思います。ちなみに、この段落では、他にどんな例があるか聞かれることが多いので、他の例も紹介すると、身近な商店街への興味が増すかもしれません。

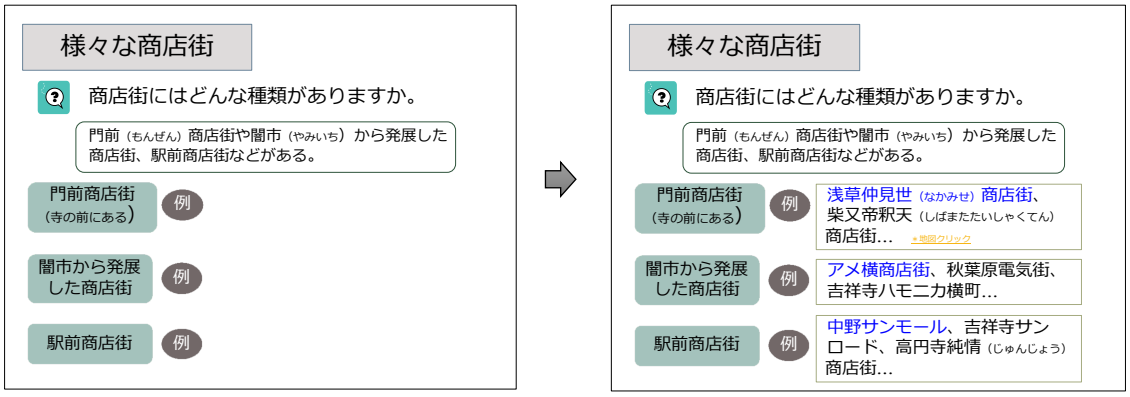


図 16　情報整理のためのスライド例（分類）：L3 トピック１ 第３段落

◆発展的活動：図を解説する

時間的な余裕があれば、図に情報を整理した後、その図の解説をさせてもよいでしょう。例えば、第 4 課トピック 1（「里山」）の第 3 段落（pp. 112-113：10-14）を読み、次ページの図 17 のような関係図をペアで完成させた後、「人間と里山の雑木林の関係」について自分の言葉で説明させます。その際、①人間と里山の「ギブ・アンド・テイク」の関係がわかるように説明する、②「一方で」「それに対して」などの対比の表現や「～によって」「～ことで」などの手段の表現を使う、といった条件を与えます。ただし、すぐにクラスの前で説明することは難しいと思いますので、まずはペアで説明の練習をする時間を設け、それから発表させるとよいでしょう。もちろん、発表の代わりに文章を書かせるというアウトプットも効果的だと思います。

BY NC ND

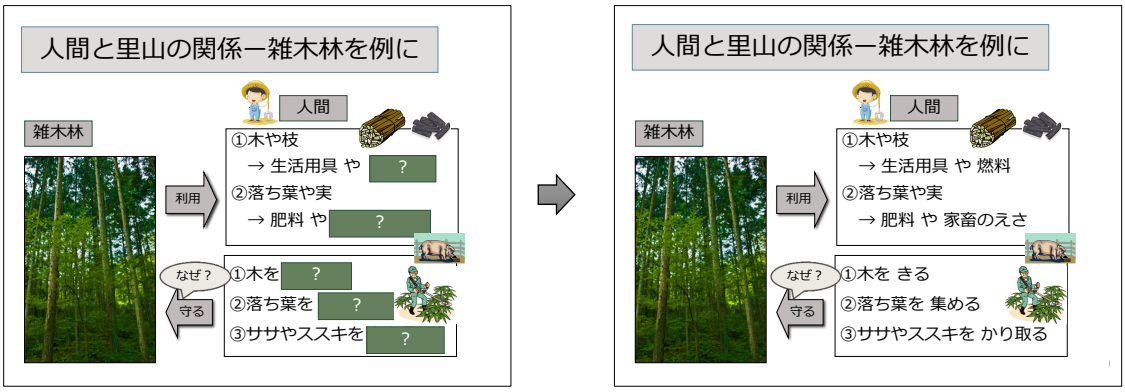


図 17　情報整理から発表へ（スライド例）： L4 トピック１ 第３段落

◆自分の言葉で説明する

トピック１の本文の中には、抽象的で何を言っているのか具体的にイメージするのが難しい文が多々あります。そのような場合には、その文の意味を自分の言葉で他の人にもわかるように説明させる必要があります。こうした理解の確認はごく普通に行われていると思いますが、単に「自分の言葉で説明してみてください」という指示を与えただけでは、逐語訳になってしまうなど、教師が期待するような説明はなかなか返ってこないことが多いのではないでしょうか。そこで、第３課トピック１の第４段落（p. 91:16-19）の冒頭の１文を例に、どのような指示を与えるとよいか考えてみましょう。

このように様々な顔を持つ商店街ではあるが、その多くに共通しているのは、地元に根づき、地元の生活基盤や経済基盤として人々の生活を支えているという点である。

この場合、まず、「商店街の共通点は何ですか」という、この文を読む際の方向づけの質問をし、ペアで考えさせます。すると、「地元に根づき、地元の生活基盤や経済基盤として人々の生活を支えているという点です。」という予想通りの答えが返ってくることでしょう。そこで初めて、抽象的な文を自分の言葉で説明するという活動に入っていきます。その際、いくつか条件を与えるとよいでしょう。

ここでは、①「根づく」「基盤」という言葉は使わずに説明する、②具体例を挙げる、③1 分程度で説明する、といった条件を与え、ペアで説明を考え、互いに説明し合う時間をとります（図 18 参照）。この間、教師は机間巡視をして、適宜サポートします。

東京外国語大学留学生日本語教育センター

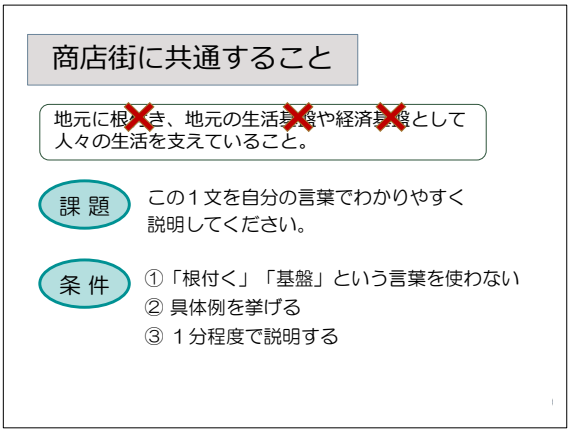


図 18　スライド例：L3 トピック１ 第４段落

その後、クラスで数名に説明をさせますが、わかりにくいところを別の人に説明し直させたり、具体的な例を引き出したりしながら共有していきます。最終的には、「商店街は、ずっと昔からその地域にあって、地元の人の生活やその地域の経済にとって大切なものだという意味です。例えば、地元の人はその商店街で生活に必要な物を買うことができるし、その商店街で働くこともできます。また、大売り出しやお祭りなどもすれば、地域の経済も活性化すると思います。」といった説明に到達することができます。教師が「意味」を与えるのではなく、学習者が協働で「意味」を構築し、理解を深めていく過程が大切です。

また、このようにペアで説明し合うことで、学習者一人ひとりがあまり緊張せずに、頭の中の理解を日本語でアウトプットするという活動に取り組むことができるでしょう。こうした「小さいアウトプット」を積み重ねることで、日本語の運用力も徐々に身についていくはずです。

◆教科書に書かれていない具体例が挙げられる

抽象的な言葉や文の意味が理解できているかどうかを確認するための方法として、もう一つ、教科書に書かれていない具体例を考えるという活動について説明します。ここでは、第１課トピック１（「留学することの意義」）の第３段落（p. 18:9-12）を例に取り上げます。

> その一つはもちろん、日本文化だ。日本の歴史は長く、多様な文化が混在している。新幹線が通り過ぎる線路のすぐそばに、のどかな田園風景が広がっている。東京スカイツリー観光から帰ってきた一家が、焼き魚に味噌汁といった昔ながらの家庭の味を楽しむ。

この文章では、「日本の歴史は長く、多様な文化が混在している。」という文の指し示す意味を具体的なイメージを伴って理解できるかどうかが鍵です。学習者からもこの一文の意味がわからないと質問が出ることが多いのですが、「多様な文化が混在している」を「いろいろな文化が混ざっている」と言い換えたとしても、この文が理解できたとは言えないでしょう。そこで、一旦その答えを保留し、「多様な文化が混在している」の

CC BY NC ND

例を本文から 2 つ探すところから始めます。これは「内容確認のための質問」の問 2 と同じです。この作業もペアで行います。「新幹線の通り過ぎる線路のすぐそばに･･･」「東京スカイツリー観光から帰ってきた一家が･･･」という例を探すこと自体はすぐにできるでしょう。

さて、ここからが理解を深めるための活動です。まず、本文から探した 2 つの例について、写真などを使って、そのイメージを共有します（図 19 左・中）。このとき、すぐに写真を見せるのではなく、「この文を読んでどんな風景をイメージしますか」と聞いてみると、意外に情景がイメージできていないことに気づくでしょう。次に、「新幹線」と「のどかな田園風景」、「スカイツリー（観光）」と「焼き魚に味噌汁」というコントラストは、いったい何と何のコントラストなのかという問いかけをします（図 19 右）。ここでは、一旦、抽象化させることで、これらの例が何を説明するためのものなのかということをペアで考えさせます。学習者からは、「現代（今）と昔」「新しいものと古いもの」「ハイテクノロジーとローテクノロジー」「都市と田舎」といった答えが出てくるでしょう。ここまで段階的に確認した後で、他の事例を考えさせます。すると、「スカイツリーと浅草寺の五重塔が同時に写真に撮れる」「着物を着て歩きスマホをしている」など、自分自身の経験から「多様な文化が混在している」風景の例が出てきます。このように、学習者自身の経験に引きつけて教科書にはない例を考えさせることで、本文の内容がより実感を伴って理解できるのではないかと思います。

図 19　授業で使用しているスライド： L1 トピック１ 第３段落

以上、「読んでみよう」の授業で実践している活動について、ごく一部ですが、ご紹介しました。一見、バラバラな活動に思えるかもしれませんが、いずれも、①目的を持って本文を読むための問いかけをする、②協働で問題を解決する、③理解したことをアウトプットする、という点において共通しています。おそらく、従来型の教師主導の読解授業に比べると、学習者一人ひとりの発話量も圧倒的に多く、授業中の活気も感じられるのではないかと思います。また、段階的に理解を確認していくので、学習者がどこでどう理解につまずいているかも把握しやすいはずです。

CC BY NC ND

●内容確認のための質問

「内容確認のための質問」は、本文の内容について、最低限の理解を確認するためのもので、上述の「読んでみよう」での読解活動後に各自で完成させることを想定しています。「読んでみよう」では、「内容確認のための質問」を念頭において本文の要点を整理していきますが、クラスでの読解活動はペアやグループで内容を確認したり論点について話し合ったりすることが中心です。また、「内容確認のための質問」に答えられたからと言って、深い理解に達しているとは言えません。なお、書くスピードは学習者によって差が大きいため、「内容確認のための質問」は宿題にすると、授業時間が有効に使えるはずです。

「内容確認のための質問」の中には、下の例のように、本文中の抽象的な概念を自分の言葉で説明したり、本文の内容について意見を述べたりするという問いもあります。これらの問いについては、読解活動の中で話し合いの時間を設けるか、宿題のフィードバックの際に意見を共有する時間を設けるなどすると、多様な考え方を通してさらに理解が深まることでしょう。

- 「自文化を再考することは、自分がだれなのかを知るのに最良の方法である。」とあるが、それはなぜか。自分の言葉で説明しなさい。　—第１課（p.21）
- 「里山は、昔も今も、自然と人間の共生の場なのである。」とあるが、それはなぜか。自分の言葉で説明しなさい。　—第４課（p.117）
- 「フェアトレードは買い物を通して投票するのと同じ」とは、どのような意味か。また、この考え方についてどう思うか。　—第５課（p.161）

「内容確認のための質問」のフィードバックは、ペアで答えを確認させたり、クラスで要点だけを確認したりするなど、あまり時間をかけずに 10 分程度で終わらせるのがよいでしょう。

「内容確認のための質問」の解答（PDF）が入手できます。入手方法については、巻末の「お知らせ（その 1)」をご覧ください。

●話し合ってみよう

「話し合ってみよう」では、本文の内容について意見を出し合ったり、具体的な事例を持ち寄って紹介し合ったりすることで、自分自身に引きつけながらテーマへの理解を深めることを目的としています。具体的な進め方については、第４章の「話し合いの進

CC BY NC ND

め方のポイントと実践例」で詳しく述べますが、ここでは、「話し合ってみよう」の基本的な考え方について述べたいと思います。

前述の通り、本書は、「考えてみよう」→「読んでみよう」→「話し合ってみよう」という流れの中で、少しずつ理解が深まっていくよう設計してあります。本当に理解が深まっているかどうかは、「考えてみよう」での話し合いの内容と「話し合ってみよう」の話し合いの内容を比較してみるとわかります。例えば、第 3 課トピック 1（「商店街でみんな元気に」）では、「商店街の特徴や魅力」が理解できるかどうかが一つの鍵となっています。「考えてみよう」では「商店街の良さは何か」ということについて意見を出し合いますが、「話し合ってみよう」では、「商店街で見つかるかもしれない『お金では買えない何か』とは何か」という問いかけによって「商店街の良さ（魅力）」について再度話し合います。いずれもグループで話し合った後で結果を共有しますが、あるクラスで実際に出てきた意見を比較してみましょう（図 20 参照）。

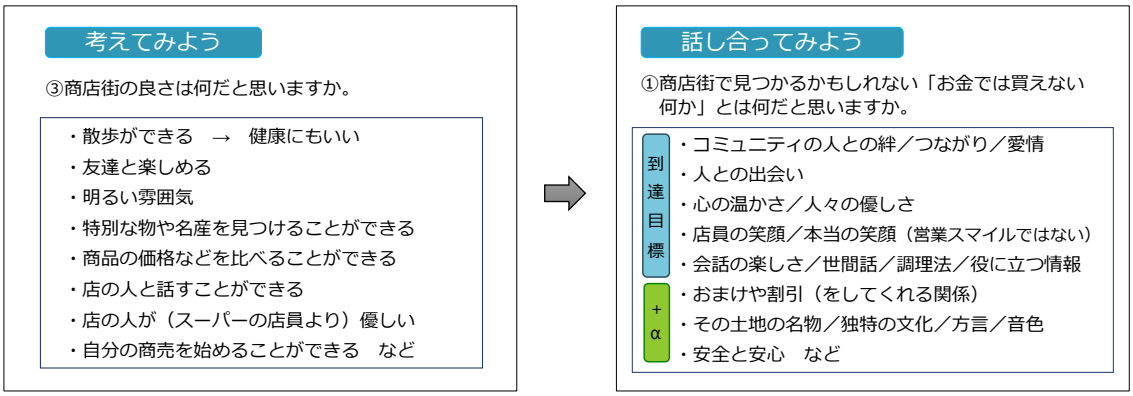


図 20　「考えてみよう」と「話し合ってみよう」の結果の比較： L3 トピック 1

「考えてみよう」では、「散歩ができる」「友達と楽しめる」「商品の価格などを比べることができる」「店の人が優しい」など、学習者の個人体験から「商店街の良さ」を捉えているのがわかります。しかし、「話し合ってみよう」では、「コミュニティの人との絆」「人との出会い」「心の温かさ」「おまけや割引をしてくれる関係」「安全と安心」など、商店街をコミュニティとして捉え、地元のコミュニティならではの人と人とのつながりの大切さが理解できていることがわかります。また、日本語自体の表現の幅も広がっています。

このように、「話し合ってみよう」の成果から学習者の理解度を把握することができます。同時に、「話し合ってみよう」の成果は、教師にとって、自分自身の授業の評価（アセスメント）にもつながるでしょう。したがって、予め、話し合いの目的・目標を念頭において「話し合ってみよう」を進めることが大切です。図 20 には、わかりやす

東京外国語大学留学生日本語教育センター

いように「到達目標（想定内）」と「＋α（想定外）」と示してありますが、「到達目標」としてある意見は、本文の内容が理解できていれば出てくるはずの意見です。もしこれらの意見が十分出てこない、または、本文と全く関係のない意見ばかり出てきたというような場合、学習者自身が本文をよく理解していない可能性があります。あるいは、授業の進め方そのものに問題があったということかもしれません。課題を与える以上、当たり前のことですが、教師の頭の中に「到達目標」を設定しておく必要があるでしょう。

なお、課によっては、「話し合ってみよう」に２つ課題がある場合があります。２つ目の課題は、自分自身の経験を述べ合ったり、自国の事例を紹介し合ったりする内容になっているので、時間的に余裕がない場合には、１つ目の課題だけでもかまいません。ただし、第４課トピック１（「里山」）の「話し合ってみよう」は、２つの課題をやることで学習者一人ひとりの「自然観」が相対化できるので、どちらもやってみることをお勧めします。ちなみに、授業では、「考えてみよう」の問１で「自然」と聞いてイメージする風景を一人ずつ絵に描かせ、「自然観」の違いを比較します。そして、「話し合ってみよう」の課題１で日本の「里山」における「自然と人間の関係」を図示させ、「里山」についての理解を確認します。その上で、課題２で、自分自身にとっての「自然と人間との関係」を里山との比較を通して相対化するという流れです（図 21）。例えば、ヨーロッパの学習者の多くは「人間＝自然の破壊者」「人間と自然の共生はあり得ない」と考えており、「里山」とは相容れない自然観を持っているのですが、そうした自然観を里山との比較を通して捉え直すことに、この課題の意義があります。実際の授業では、図示だけでなく、文章化するという課題を与えることもあります。「自然との共生」を通した異文化理解教育にもつながるかもしれません。

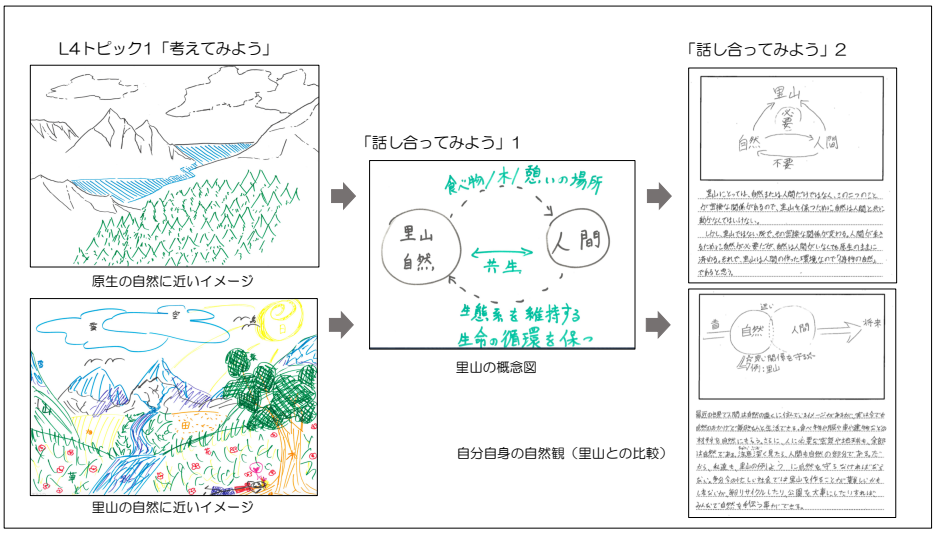


図２１　「考えてみよう」と「話し合ってみよう」成果物の例： L4 トピック１

BY NC ND

2. トピック２（聴解活動）

トピック 2（聴解活動）の説明にあたっては、次のような授業の流れを想定しています。「考えてみよう」「話し合ってみよう」の進め方については、トピック 1（読解活動）および第 4 章の「話し合いの進め方のポイントと実践例」が詳しいので、そちらをご参照ください。

各課の授業の流れ（例）

〈1 日目〉
①考えてみよう
②聴解に必要なことばの導入
③聞いてみよう
〈2 日目〉
④スクリプト読み
⑤ＣＤの再視聴　　＊時間がない時は宿題
⑥話し合ってみよう

●考えてみよう

トピック 2 の「考えてみよう」は、トピック 1 の「考えてみよう」と同様に、テーマに関する学習者の既有知識の活性化を図り、テーマへの興味・関心を促すことを主な目的としています。トピック 2 にも 3 つの問いがあります。「考えてみよう」の進め方は、トピック 1（読解活動）と基本的に同じです。「考えてみよう」→「聞いてみよう」→「話し合ってみよう」という流れの中でテーマに関する理解を徐々に深めていくことを念頭において、具体的な活動を考えるとよいでしょう。トピック 2 の場合、同日に「聞いてみよう」まで終わらせることを想定しているので、「考えてみよう」の時間配分は 15～20 分を目安としています。

●聴解に必要なことば

「聴解に必要なことば」には、トピックのタイトルに含まれるキーワードの他、聴解をスムーズに進める上で最低限知っておいたほうがよいと思われる語を挙げてあります。「聴解に必要なことば」は、「聞いてみよう」の聴解活動の直前に導入すると、記憶も新しく、より効果的です。

導入の際には、音を聞いてその語が認識できるよう、意味だけでなく発音もしっかり確認することが大切です。漢字語彙はもちろん、「チームリーダー」「ボランティア」「ト

BY NC ND

ン・キロメートル」などのカタカナ語や「IT（アイ・ティー）」「NPO（エヌ・ピー・オー）」「CO_2（シー・オー・ツー）」などのアルファベットの発音は、原語の発音と違うので、日本語らしい発音を意識させるとよいでしょう。

また、単語レベルだけでなく、文単位でその単語を聞き取れるような練習も効果的です。例えば、第 2 課トピック 2（「留学生の先輩に聞く日本の職場」）では、「職場」「雰囲気」という語を導入した後で、「職場の雰囲気がいいと、仕事が楽しいです。」といった短い文の音声を聞かせ、リピートさせます（図 22 左）。ほとんどの学習者が聞き取れたところで文字を見せ、再度音声を聞かせます。同様に、「上司」「部下」「人間関係」の導入の後で「職場には、上司と部下という人間関係があります。」という文を聞かせてリピートさせます（図 22 右）。実際の授業で使っている音声は声優による録音ですが、教師が文を読み上げるだけで十分です。短文は、目の前の学習者に合わせて作るとよいでしょう。

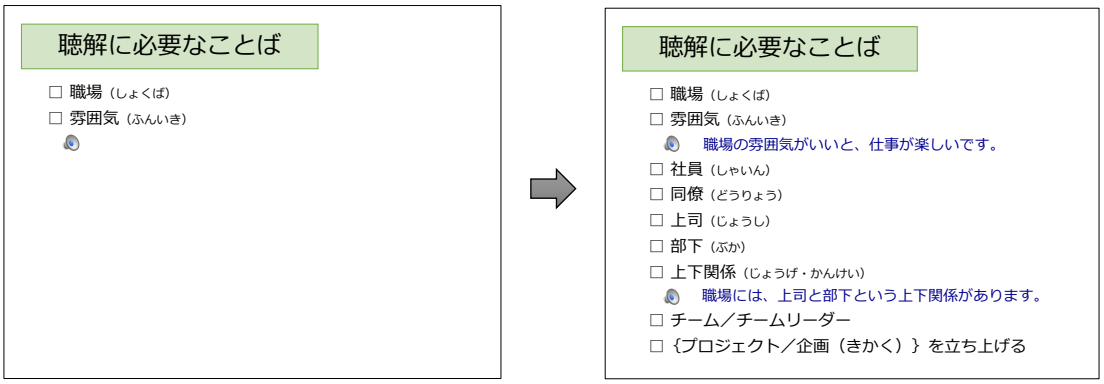


図 22　「聴解に必要なことば」導入で使用しているスライド（例）： 第２課トピック２

●聞いてみよう

本書の「聞いてみよう」の聴解素材はテーマ学習を目的としているため、ある程度、情報量のある内容となっています。そのため、中級レベルの学習者にとっては、未知語も多く、かなり長いものになっています。したがって、一度聞いて細かい所まで理解できるというようなことは想定していません。2 度、3 度と繰り返して聞き、聞き取った情報をペアやグループでつなぎ合わせて話の要点が理解できることが目標です。目安としては、「聞いてみよう」の聴解活動で 6〜7 割の理解、「スクリプト」を読んで 9 割以上の理解ができればよいと考えています。

「聞いてみよう」には STEP1 から STEP3 までのステップがあります。以下、STEP 毎にご説明します。

東京外国語大学留学生日本語教育センター

STEP 1：メモを取りながら一通り CD を聞く

STEP1 では、メモを取りながら、CD 音声を最初から最後まで一通り聞くことが目標です。第 1 課のスピーチで約 4 分、第 6 課のインタビューだと 6 分以上と、かなりの長さがあります。これだけの長さの話を途中で投げ出さずに最後まで聞くためには、予め話の展開や聞き取りのポイントを理解しておく必要があります。長さの目安も伝えておくとよいでしょう。

まず、各課のトピック 2 には「場面」の説明があります。どこでだれが何について話をしているのか、最初に場面をイメージさせることが大切です。第 2 課・第 3 課・第 5 課・第 6 課はインタビューですので、話している場所だけでなく、話し手の年齢や性別なども予測できるよう、イラストがつけてあります。イラストで場面のイメージを持たせるとよいでしょう。また、第 3 課・第 5 課・第 6 課のインタビュー相手は実在の人物や企業ですので、「解説」欄にその紹介があります。背景的知識として学習しておくと、場面がイメージしやすくなるでしょう。

次に、STEP1 の「メモ」の欄には、話の展開や聞き取りのポイントを示す見出しや質問があります。どのような話の展開で、どんなことを聞き取ればよいのかといったことを予め確認してから CD を聞かせます。聞いている途中で、どの部分について話しているのか見失ってしまう学習者が多いので、「今ここについて話している」ということがわかるよう、「メモ」のページを実物投影機などで映し、該当する見出しや質問を指し示すとよいかもしれません（図 23）。特に、第 1 課（「街で見つけたおもしろいもの」）は、「メモ」（p. 25）の横に色々な表札の写真がありますので、写真を見せながら話を聞かせてください。

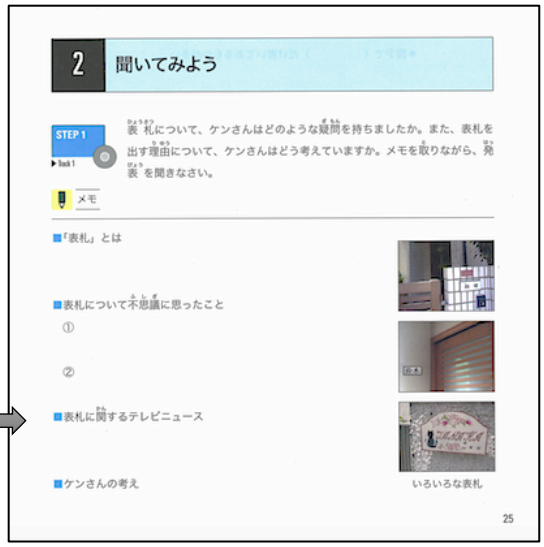


図 23　メモ欄の活用：第 1 課トピック 2

メモを取る際には、日本語でメモを取ることを奨励していますが、母語でメモを取ってもよいと思います。実際、学習者が取ったメモを見ると、日本語でもひらがな表記やローマ字表記のものが多く、母語もかなり混じっています。しかし、メモの取り方と理解度は必ずしも一致しませんので、それぞれの学習者のスタイルを尊重してよいと思います。

BY NC ND

第 4 課（「自然と共生する町」）は、音声再生の際に使用するスライド資料があります。スライド資料の入手方法は、巻末の「お知らせ（その 1）」をご覧ください。

STEP 2：グループで聞き取った情報を整理する

STEP2 では、STEP1 で各自が取ったメモをもとに、2～3 人 1 組で、発表のレジュメ（第 1 課・第 4 課）またはノート（第 2 課・第 3 課・第 5 課・第 6 課）に情報を整理します。一回聞いただけでは、レジュメやノートの穴埋めしていくのは難しいので、全ての（　　）が埋まらなくても大丈夫です。グループで 3～5 割程度埋められれば十分です。おそらく、話の前半の部分はかなり埋められると思いますが、後半になるにしたがって書けない部分が多くなるでしょう。

もしスクリプトを見て穴埋めをしようとしている学習者がいたら、スクリプトは見ないように注意する必要があります。また、答えは意味が同じであれば音声の通りでなくても問題ありませんが、できるだけ漢字で書かせたほうがよいでしょう。

STEP 3：もう一度 CD を聞いてレジュメやノートを完成させる

STEP3 では、STEP2 で聞き取れなかったところを意識させながら、もう一度 CD を聞きます。これが 2 回目の音声再生になります。2 回目に CD を聞く際には、全体を通して聞くよりも、内容のまとまりで区切りながら CD を聞き、レジュメやノートをまとまり毎に完成させていったほうがよいでしょう。2回聞いても聞き取れない箇所については、その部分だけ取り出して、何度か聞かせます。その際、部分的にでも聞き取れた語を学習者に言わせ、聞き取れなかった部分を再度聞いて埋めていくといった活動が効果的です。例えば、第 5 課トピック 2 の「ノート」（p. 168）に、「冬に（エアコンの温度を 1 度下げる）のと同じぐらい、CO_2 が減らせる」という文を完成させる箇所があります。2 回聞いただけではなかなか全て聞き取ることが難しい文ですが、「エアコン」「温度」「下げる」などの語は聞き取れている学習者が多いので、「エアコン____温度を_____下げる」のように板書してから再度聞かせると、文として聞き取れるようになるでしょう。

「レジュメ」や「ノート」の答えは、板書して確認しても図 24（左）のようにスライドを使って確認しても、どちらでもかまいません。また、聞いて穴埋めをするという作業だけを繰り返していると、学習者の集中力も途切れてくるかもしれません。聞き取っキーワードについて具体例を挙げて考えさせたり（図 24 左）、内容に関係のある写真を

CC BY NC ND

見せて何の写真か考えさせたり（図 24 右）するなど、聴解以外の活動を適宜取り入れながら理解を確認していくとよいでしょう。

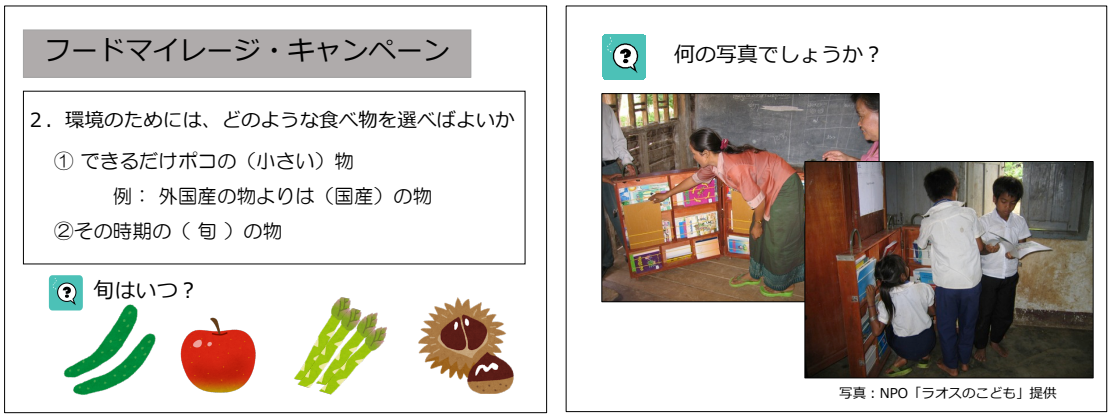


図 24　理解確認のためのスライド（例）：第５課トピック２（左）／第６課トピック２（右）

以上、「聞いてみよう」の STEP1～STEP3 の進め方について、順にご説明しました。従来の語学教育においては、このように聴解活動をペアやグループで行うことはあまりなかったかもしれません。しかし、我々の実生活を振り返ってみると、会議などで話を聞き逃したり聞き取れなかったりしたら、隣の人に確認したりメモを見せてもらったりということがしばしばあるのではないでしょうか。母語話者同士でもそうなのですから、非母語話者が協力しても問題ないはずです。むしろ、互いに協力し合うことで、1 回目の聴解で自分が聞き取れていなかったことが 2 回目以降の聴解で聞き取れるようになり、聞き取った内容を的確に文字化することもできるはずです。聞き取れた時にペアで「やったあ！」と喜ぶ姿をしばしば目にしますが、このように達成感を分かち合うこともできるでしょう。こうしたピア・リスニングは、教室だからこそできる体験だと考えています。

トピック 2 の STEP2 の解答が入手できます。入手方法は、巻末の「お知らせ（その 1)」をご覧ください。

●スクリプト

「聞いてみよう」だけでは、まだ聞き取れていない内容もあるので、「スクリプト」を読んで、細かいところまで確認することをお勧めします。「スクリプト」読みの進め方は、トピック 1 の「読んでみよう」のように、「ペアで音読してわからないことを探す」という活動から始めます。内容のまとまりで少しずつ区切って読ませるとよいでしょう。やり方は「トピック 1」の「読んでみよう」の項（p. 24）をご参照ください。

BY NC ND

トピック 2 はトピック 1 のような抽象的な内容ではありませんので、ペア音読だけで、ほとんど理解できるはずです。ペア音読の後は、言語形式に着目させ、助詞の使い方やコロケーションなどの確認や、縮約形や敬語、発表の際の定型表現、相づちなど、話し言葉の特徴を確認させるとよいでしょう。中級以降になると、話し言葉から書き言葉へのシフトに重点が置かれることが多いのですが、本書では、話し言葉と書き言葉が場面に応じて適切に使い分けられるようになることを目指しています。そうした意味でも、話し言葉の特徴をしっかり理解しておくことが大切です。以下に、授業で実際に行っている活動をいくつかご紹介します。

◆スクリプトを塗りつぶして助詞やコロケーションを確認する

ペア読みが終わったところで、図 25 のようにスクリプトを部分的に黒く塗りつぶしたものを実物投影機で見せ、教科書を見ずに、塗りつぶした箇所に入る助詞や動詞などを言わせます。例えば、第 1 課トピック 2（「街で見つけたおもしろいもの」）の第 3 段落（p. 30:10-19）の場合、この課の表現練習（別冊）で取り上げた疑問の表現「～んだろうと不思議に思う」や「韓国やカナダでは、家の前に表札がありません。家の前を通っても、そこにだれが住んでいるか･･･」などの助詞、「郵便が届く」「あまり役に立たない」などの動詞の使い方が確認できます。特に、タスク 1 の発表で学習者がよく間違える「～では、～に～がある」「不思議に思う」「どうして～かわかりません」といった助詞については、スクリプトを読む際に意識化させておくとよいでしょう。どこを塗りつぶすかは、タスクでの産出を見越して決めるといいかもしれません。なお、スクリプト全てについてこの活動をする必要はありません。学習項目にもよりますが、1～2 段落で十分です。

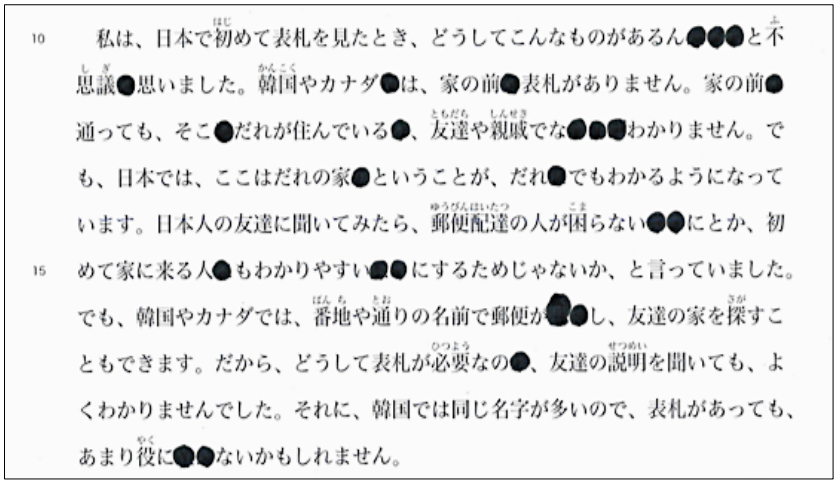

10　私は、日本で初めて表札を見たとき、どうしてこんなものがあるん●●●と不思議●思いました。韓国やカナダ●は、家の前●表札がありません。家の前●通っても、そこ●だれが住んでいる●、友達や親戚でな●●●わかりません。でも、日本では、ここはだれの家●ということが、だれ●でもわかるようになっています。日本人の友達に聞いてみたら、郵便配達の人が困らない●●にとか、初
15　めて家に来る人●もわかりやすい●●にするためじゃないか、と言っていました。でも、韓国やカナダでは、番地や通りの名前で郵便が●●し、友達の家を探すこともできます。だから、どうして表札が必要なの●、友達の説明を聞いても、よくわかりませんでした。それに、韓国では同じ名字が多いので、表札があっても、あまり役に●●ないかもしれません。

図 25　スクリプトの塗りつぶし（例）：第 1 課トピック 2 第 3 段落

CC BY NC ND

◆発表やインタビューで用いる定型表現を探す

スクリプトの中から発表やインタビューのときによく使う定型表現を探すという活動もタスクの産出に役立ちます。例えば、第 1 課トピック 2 の第 1 段落～第 2 段落（p. 30:1-9）から「発表のときによく使う表現や使ってみたい表現をペアで探してください。」という指示を与えると、「今日は、～について発表します」といった定型表現はもちろん、「この写真を見てください」「なにかわかりますか」「かわいいですよね」などの聞き手に働きかける表現、「これは、～といいます」のような定義の表現など、教師が説明する必要がないほど、学習者自身で様々な表現を見つけることができます。この方法は、第 2 課では縮約形を探す、第 3 課では敬語表現を探すといった活動にも応用できるでしょう。

◆調べたことの報告と感想・コメントを探して下線を引く

これは、第 4 課トピック 2（「自然と共生する町」）のスクリプト読みで実践している活動です。この課のスクリプトには、松代について「調べたり他の人から聞いたりしてわかったこと」を報告する文と「自分の感想やコメント」を述べる文が交互に出てきます。「～そうです」「～ということです」といった引用・伝聞の表現形式については、第 1 課の表現練習（別冊）をはじめ、タスク 1・タスク 2 の学習項目になっていますが、第 4 課の表現練習では「～だなあって思う」「～ですよね」などの感想・コメントの表現形式を新たに学習します。スクリプトを分析的に読むことで、こうした学習項目が発表の中でどのように用いられているか理解できることでしょう。

実際の授業では、まず、スクリプトを内容的なまとまりによって 2～3 段落毎に 3 つの部分に区切り、各ペアが担当する箇所を割り振ります。スクリプト全体を読んでこの作業を行うのは時間がかかるので、分担して進めたほうが効率的です。担当が決まったら、「本を調べたり他の人に聞いたりしてわかったことについて話している文」と「自分の感想やコメントを述べている文」をそれぞれ見つけ、教科書に線を引くよう指示します。その際、「報告の文は青」「感想・コメントの文は赤」のように色分けして線を引かせます（図 26）。色分けできない場合には、「下線」と「波線」のように線の引き方を変えてもよいでしょう。線が引き終わったら、スクリプトをホワイトボードに投影し、ペアで色分けして線を引かせ、クラスで共有します。

この活動によって、報告の際には引用・伝聞の表現を使うということだけでなく、報告の後には短くても自分の感想やコメントを述べると生き生きとした発表になるということが可視化され、タスク 3 の発表の産出にも有効なのではないかと思います。

東京外国語大学留学生日本語教育センター

てわき出ているんです。で、その泉の水を町に取り込むために、水路がつくられたんだそうです。町の中にたくさん水路がありますよね。

この泉の水なんですが、本で調べてみたら、300年ぐらい前からいろいろなことに利用されてきたということがわかりました。

松代は、江戸時代には城下町として栄えていたので、町にはたくさんの武士が住んでいました。武士の家って、どんな家だったと思いますか。この写真を見てください（写真①②）。これが一般的な武士の家なんですが、こんなふうに庭に池があるんです。池の周りには様々な木が植えられていて、池には魚がいます。きれいですよね。昔はこの池の水を使って顔を洗ったり食器を洗ったり…。あ、池で育てた魚を食べたりもしたそうです。

実は、この池には泉の水が流れてきているんです。そして、池は、こんなふうに、「泉水路」っていう、池と池をつなぐ水路で、隣の家の池につながっているんです（図２）。泉水路には、ちゃんと水をきれいにする浄水装置があったので（写真③）、汚れた水をきれいにしてから隣の家の池に流すことができたんだそうです。環境にやさしいですよね。

図 26　スクリプトの活用例：　第４課トピック２

●話し合ってみよう

トピック２の「話し合ってみよう」の基本的な考え方はトピック１と同じですので省略します。また、具体的な進め方については、次章をご参照ください。

CC BY NC ND

３．タスク

本書のタスクは、教科書の STEP にしたがって進めれば、課題が遂行できるようになっています。そこで、本章では、教科書には書かれていない、タスクをより円滑に遂行するためのポイントについてタスク毎にご説明します。また、タスクの評価法についても少し触れたいと思います。本書のタスクがどのような考え方に基づき設計されているかについては、第 1 章「『出会い』のコンセプトについて」をご参照ください。

●タスク１：発表「街で見つけたおもしろいもの」

このタスクは、「自分がおもしろいと思ったものの写真を撮って説明する」というものですが、内容的に充実した発表、聞き手に届く発表をするのは、意外に難しいものです。そこで、ここでは、①テーマ（題材）選び、②内容の深め方、③適切な語や表現の選択、④発音練習、という 4 つの側面からの働きかけについて説明したいと思います。

◆テーマ（題材）選び

タスク 1 では、日本文化や自文化について考察を深められるテーマ（写真の題材）が選べるかどうかが重要です。タスク 1 の STEP1 に「おもしろいもの」の見つけ方のポイントが示してあるので、タスクの目的が理解できていれば、大半の学習者はこのタスクに相応しいテーマが選べると思います。しかし、中にはこのタスクの趣旨から外れたテーマを選ぶ場合もあるかもしれません。これまで実際にあった例を挙げると、珍しい魚やきれいな鳥といった「生物学的におもしろい」という類のものや、「渋谷でアヒルを散歩させている人」のように、あまりにも特殊で一般化できないものなどです。このようなテーマが候補として出てきた場合には、タスクの目的を再度説明し、日本文化の特徴を示すことができそうなテーマを選ぶよう促す必要があります。ちなみに、東京外国語大学で過去に出てきたテーマのトップ 5 は表 7 のようなものです。これらのテーマであれば、学習者はそれぞれの感性や切り口で内容を深めていくことが可能だと思います。もしテーマ選びに困っている学習者がいた場合には、テーマ例としてアドバイスしてみてもよいでしょう。

表７　タスク１のテーマとして選ばれた題材トップ５

第 1 位	マンホールの蓋
第 2 位	自動販売機
第 3 位	駐輪のし方／ごみの分別
第 4 位	自転車の乗り方／食品サンプル／点字ブロック
第 5 位	ウォシュレット／桜・花見

BY NC ND

◆内容の深め方

テーマが決まったら、STEP2 で発表の内容を考えます。内容を考える際のポイントは、①テーマについての疑問点（問い）を設定し、②自分自身が調べたこと（根拠材料）に基づき、③自分なりの主張（問いに対する答え）を導き出す、という論理的思考の流れに沿って内容が組み立てられるかどうかです。このタスクでは、第 1 課のトピック 2 の「表札」の発表をモデルとして、発表内容を考えるようになっていますが、実は「表札」の発表では、①～③は図 27 のように組み立てられています。STEP2 を説明する際には、このような思考の流れを意識させるとよいでしょう。ご参考まで、「マンホールの蓋」をテーマに選んだ学習者の発表全体の構成例をご紹介します（図 28）。もちろん、なかなかこの事例のようには内容が深まらないかもしれませんが、少なくとも、「疑問点が明確か」「それに対する答えはあるか」といったことを確認しながら内容を考えさせてみるとよいでしょう。

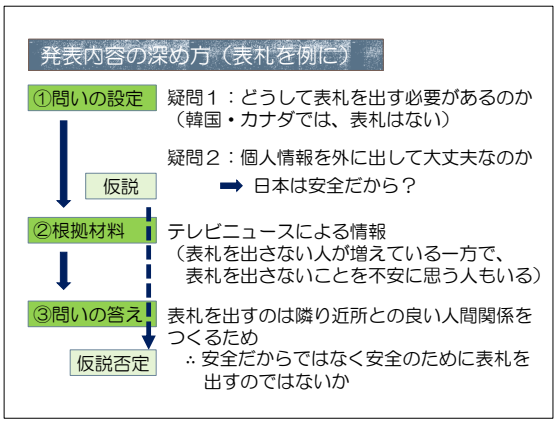


図 27　発表内容の深め方（表札）

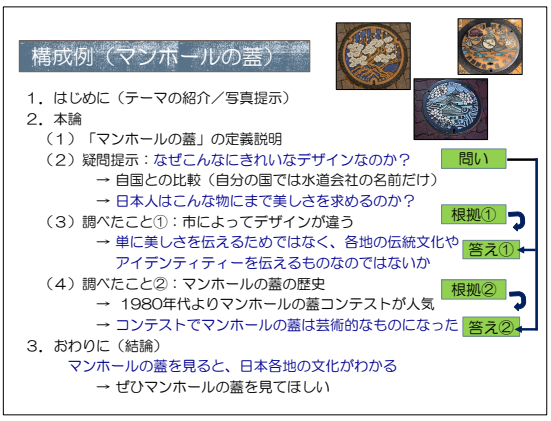


図 28　発表の構成例（マンホールの蓋）

◆適切な語や表現の選択

このタスクに特化したことではありませんが、発表原稿を作成する際に学習者にとって最も難しいのは、自分が言いたいことを的確な日本語で表現することだと思います。発表原稿の作成は宿題にすることも多いと思いますが、教師のサポートのもと、できるだけクラス内で原稿を書かせたほうが、内容的にも表現的にも良いものが仕上がるはずです。クラス内で原稿を書く場合、おそらくスマートフォンなどの辞書ツールを使って言葉を探す学習者が多いと思いますが、自分が使ったことがない言葉を使ってみたいときや、どの言葉を選べばよいか迷ったときには、すぐに手を挙げて教師に聞くように習慣づけるとよいでしょう。ほんの小さな働きかけではありますが、過去には、「コンビニ」の発表で「midnight」を「丑三つ時」、「マスク」の発表で「epidemic」を「疫病」

BY NC ND

と訳そうとしているのを未然に防ぐことができました。その言葉を知っているかどうかクラスメートに確認するというのも効果的です。

◆発音練習

どんなに素晴らしい発表原稿が書けたとしても、わかりやすく聞き手に伝えることができなければ、タスクを遂行できたとは言えません。タスク 1 の STEP5 には、学習者が発表のリハーサルをする際のポイントが示してありますが、これだけでは発音を意識した練習を促すのは難しいでしょう。時間的な余裕があれば、効果的なポーズの入れ方や複合語のアクセント、キーワードやキーフレーズの明瞭化など、口頭発表の際に役立つ発音のポイントについて、クラスで練習するとよいでしょう。こうした発音練習をタスク 1 で一度やっておくと、それ以降のタスクでも応用できます。

●タスク２：インタビュー「私のキャリアプラン」

タスク 2 は、グループで日本人学生のキャリアプランについてインタビューし、その結果を報告するというものです。インタビューシートの作り方やインタビューの際の話の進め方などについては教科書に一通りポイントが示してありますので、ここでは、①インタビュー相手の選び方、②インタビュー相手のことが伝わる発表の作り方、③グループでの作業の進め方、の 3 つについてご説明します。

◆インタビュー相手の選び方

「キャリアプラン」というテーマでのインタビューなので、インタビューの相手は、学部の 3～4 年生など、卒業後の進路について具体的に考えている学生のほうが適任です。就活はもちろん、インターンシップや部活、アルバイトなど、様々な経験について話を聞くことができるので、内容的に充実したインタビューになるはずです。もちろん、インタビュー相手は留学生でもよいでしょう。授業外でインタビューを行う場合には、インタビュー相手を選ぶ際のポイントを伝えておく必要があります。

インタビュー協力者をクラスにゲストとして招いてインタビューを行う場合には、募集の段階で「就活経験のある方、大歓迎！」といった条件をつけたり、予めプロフィールを聞いておいたりすると、学習者とのマッチングがスムーズにいきます。インタビューシートを作成する段階で、就活に興味のあるグループ、アルバイトなど学生生活に興味のあるグループなど、それぞれの興味・関心が見えてくるはずですので、インタビュー相手はできるだけグループの興味・関心と合うようにマッチングするとよいでしょう。

BY NC ND

◆インタビュー相手のことが伝わる発表の作り方

このタスクでは、インタビュー自体がスムーズにできるかということに加え、インタビューで聞き取った情報をもとに、インタビュー相手のことが鮮明に伝わるような発表をしなければなりません。しかし、インタビューシートにメモした情報だけでは、相手のことがイメージできるような具体的な発表内容を組み立てるのは難しいでしょう。教科書の STEP5 には、発表原稿の例がありますが、「･･･（略）･･･」としてある箇所が多いのは、そこにどのような情報を入れて、もっと話を膨らませればよいかを考えさせるためです。クラスで発表例を読む際には、この「･･･（略）･･･」の部分にどんなことを入れれば、インタビュー相手についてもっと詳しく説明できるか考えさせるとよいでしょう。その際、STEP6 のスライド例にある情報を使って、内容を考えさせるというのも 1 つの方法です。特に、感想の部分は、オリジナルで深い感想になるよう、グループで十分話し合う時間を与える必要があります。

実際のクラスでは、インタビュー協力者に発表を聞きに来てもらったり、発表スライドを送ったりしています。そうすることで、インタビュー相手の立場に立って発表内容を考えられるのではないかと思います。

なお、インタビューの際に、相手の許可を得て録音しておくと、後でどんな話をしたか思い出したり、発表内容の肉づけをしたりするのに役立ちます。また、了承を得て、インタビュー相手の写真を撮っておくと、スライドに写真を入れて、その人のイメージを視覚的にも伝えることができるでしょう。

◆グループでの作業の進め方

このタスクでは、インタビューシートの作成から発表まで、グループで協力して作業を進めなければいけません。寮に住んでいる、同じ授業を取っているなど、授業外でも連絡が取りやすい人とグループを組ませるとスムーズにいくことが多いようです。グループのメンバーが決まったら、グループ名を考えることからグループワークがスタートします。グループ名を一緒に考えることで、グループの結束力を高めることを狙っています。

インタビューシートやスライドの作成など、すべて「きょうどう」で進めますが、グループ作業を見ていると、いわゆる「協働」型と「協同」型のグループがあるようです。「協働」型のグループは、グループ全員で相談しながら 1 つずつの作業を一緒に進めていきます。そのため作業に時間がかかりますが、インタビューも協力的で発表内容も充実したものになり、スライドにも統一感と工夫が感じられることが多いです。一方、「協同」型のグループは、作業を分担して効率的に進めていきます。しかし、担当者の技量

BY NC ND

が成果に反映されるので、発表やスライドを見ると、「部分的にいいけど部分的に残念」ということが多いような気がします。「協同」が悪いということではありませんが、「協同」型のグループには、各自が作ったものをグループで検討する時間を設けるなど、「グループとしてのまとまり」を意識して成果物を作り上げるようアドバイスする必要があります。特に、インタビューの「感想」の部分をだれか一人に任せることのないよう注意が必要です。

タスク 2 の STEP3「インタビューの練習をする」（p. 76）のスクリプトと、STEP6「発表のスライドと原稿を作る」のスライド資料（pp. 81-82）が入手できます。入手方法については、巻末の「お知らせ（その 1)」をご覧ください。

●タスク３：発表「地域の名所を紹介する」

タスク 3 は、大学の近くや自分が住んでいる地域の名所を 1 つ選び、その場所の歴史や地域との関わりについて調べたことを発表するというものです。実際にその場所に行って人に話を聞いたりする「フィールドワーク」的な活動です。

ここでは、①紹介する場所の選び方、②現地での情報収集のし方、③モデル文の活用のし方、④発表を楽しむための一工夫、の 4 つについてご説明します。

◆紹介する場所の選び方

「地域の名所を紹介する」というタスクですが、「地域の名所」は、ガイドブックに載っているような有名な場所である必要はありません。地元の人がよく行く公園や神社、お店といった近くの穴場や、自分のお気に入りの場所、インターネットで検索していて気になった場所などでかまいません。ただし、このタスクでは、「その場所の歴史や地域との関わりについて説明する」「その場所の特徴や魅力を聞き手に伝える」ということが目的ですので、こうした目的に合った場所を選ぶ必要があります。しかし、自力で適当な場所が探せない場合もあるので、予めタスクの題材として相応しいと思われる地域の名所をいくつか紹介しながら、どんな場所を選べばいいか説明するとよいでしょう。

幸いなことに、東京外国語大学（東京都府中市朝日町）の近くには多磨霊園や味の素スタジアム、野川公園など、徒歩圏内にタスクの題材となる場所がたくさんあります。また、自転車やバス・電車を使って 30 分圏内まで広げると、深大寺や井の頭公園など全国的にもよく知られた名所をはじめ、古い商店街や老舗のお店も多いので、選択肢が豊富です。しかし、中には、お台場や浅草などの東京の観光地や、京都や倉敷といった以前訪れた遠くの観光地を紹介したいという学生もいるので、できるだけクラスメート

BY NC ND

がいつでも行ける身近な場所を選ぶようアドバイスしています。それでもテーマを変えたくないという場合には、①どこか１つの場所に絞って紹介する、②自分で撮った写真がある、③その場所についてだれかに話を聞くことができる、という条件を満たせば遠くの名所も認めています。それは、「その場所の魅力を伝える」ためには、そこを紹介したい、その場所が好きだという気持ちが大切だからです。このタスクは、他のタスクよりも時間をかけて準備するだけに、楽しいと思える場所を選ぶことがモチベーションを維持する上でも大事だと思っています。

◆現地での情報収集のし方

紹介する場所が決まったら、インターネットで情報を収集します（STEP2）。インターネットでの情報収集では、主に、その場所の正式名称や所在地、施設案内などの基本情報やその場所の歴史について調べ、ワークシート（pp. 132-133）に情報を整理します。この作業では、おそらく、「歴史の説明が難しくてよくわからない」「地域との関わりについて情報がない」といった問題が出てくることでしょう。実は、そこが狙いです。インターネットでの情報収集だけではわからないことが何かを明らかにした上で、現地での情報収集を行うところにフィールドワークの意義があるからです。ワークシートの最後に「⑦質問（その場所について聞いてみたいこと）」を書く欄がありますので、自分が知りたいことが何か、ここでしっかり考えさせてから、現地での情報収集の準備（STEP3）に進むのが理想的です。そして、インタビューの質問を考える際には、できるだけ複数の観点から質問を用意しておくと、多角的な情報収集ができます。

現地での情報収集は、観察とインタビューが中心となります。実際にその場所に行って、自分の目で見たことや自分の耳で聞いたこと、そして五感を通して感じたこと、つまりオリジナルの情報を収集します。ここでは、テーマとしてよく選ばれる多磨霊園を例に取って説明しましょう。「霊園」と聞くと、暗くて怖い場所という印象を持つ学生が多いのですが、実際に行ってみると、花や緑が多く、開放的で明るい公園のような場所だということがわかり、「墓地」ではなく「霊園」である理由が理解できます。また、散歩をしている人や通勤のために霊園を通る人なども観察できるので、決して怖い場所や排他的な場所ではないということも実感できるようです。学生たちが写真として切り取ってくる風景には、そうした発見や驚きが表れています。このように、現地では、単に有名なものや珍しいものだけに目を向けるのではなく、自分にとって印象的な風景を写真に撮り、そこで感じたことや考えたことをメモしておくとよいでしょう。

さて、多磨霊園に行った彼らがどんな人に話を聞いているかというと、霊園の事務所の人、参拝に来ている人、近くの商店街にある石材店や生花店の店員など、実に様々で

BY NC ND

す。霊園の事務所の人には霊園の歴史や有名人のお墓の場所について聞くことが多いようです。また、参拝に来ている人や商店街の人には、霊園は自分自身や地域の人にとってどんな場所だと思うか、幽霊を見たというような怖い経験はないか、といった質問をしています。霊園の所在地や歴史はだれが調べても同じだと思いますが、こうした現地での情報収集によってはじめて、他の人とは一味違うオリジナルの発表を作ることができるのだと思います。

なお、フィールドワークは学外活動ですので、安全に活動が行えることも大切です。例えば、夜は一人で出かけない、不用意に連絡先を教えないなどの注意事項を伝えておく必要があります。ペアでタスクを行うことを奨励しているのはそのためです。また、どんな人に声をかけるとよいかについても事前に考えさせますが、「優しそうな人」「忙しくなさそうな人」という答えが多く、実際の取材相手も「家族連れ」「ボランティアの人」「おじいさん・おばあさん」など、話しかけやすそうな人が多いようです。私たち教師も、テーマとしてよく取り上げられる場所に実際に行ってみたり、関係者にインタビューへの協力をお願いしたりするなどして、学生たちが安心してフィールドワークができるよう、地域社会との関わりを深めることを心がけています。

◆モデル文の活用のし方

このタスクの場合、STEP4 に発表原稿例の全文がモデル文として示されています（pp. 136-137）。これは、この発表の後でレポートを書くことを念頭に置いているためです。文体や表現の違いだけでなく、口頭での説明に必要な情報と文章での説明に必要な情報との違いといった観点からも、発表原稿とレポートの比較ができるようになっています。

こうしたモデル文があることで、日本語の運用力が不十分な学習者でも、モデル文の型や表現を踏襲して、なんとか発表を形にすることができるはずです。しかし、その一方で、モデル文をそのままコピーしたとしか思えない、オリジナリティに欠ける発表になってしまう場合もあるでしょう。そこで、クラスでモデル文を読む際には、モデル文を発表の「たたき台」として批判的に読むことをお勧めします。どうしたらもっといい内容になるか、自分のオリジナリティを出すためにはどうしたらよいか、といったことを考えさせるための材料としてモデル文を活用してほしいと思います。

具体的には、①「1. はじめに」の「その場所を選んだ理由」と「5. おわりに」の「感想」は自分の考えを自分の言葉で表現する（＝モデル文をそのまま使わない）、②「すごいですよね」のようなありきたりのコメントではないオリジナルのコメントを考える、③「2. 概要」や「4. 地域との関わり」では自分が実際に現地で見聞きして収集した情

BY NC ND

報を盛り込む、といったようなことがオリジナリティのある発表を作る際の鍵を握っているような気がします。

もちろん、実際に発表の内容を組み立てる際には、その場所の特徴・魅力として自分が伝えたいことは何かということを明確にした上で、インターネットやフィールドワークで収集した情報の中から、その根拠となる情報を取捨選択して効果的に活用することが大事です。モデル文を読む際にも、この発表で伝えたいことは何か、それを伝えるためにどのような情報が根拠として用いられているか、といったことを確認しながら読むとよいでしょう[5]。

◆発表を楽しむための一工夫

このタスクはフィールドワーク的な要素が多いので、発表の際には、教室の外の世界が少しでも身近に感じられるように、地域の名所を順に巡るバーチャルな「フィールドトリップ」の計画を立てて発表を行っています。

発表は 2 日かけて行うことが多いので、予め発表する日を決めておきます。そして、大学を起点・終点としてその日のフィールドトリップの計画を立て、その順番に発表をしてもらいます。

発表当日には、図 29 のように、その日のフィールドトリップの日程をスライドで説明し、拡大コピーした日程表をホワイトボードに貼って発表を進めていきます。実際のスライドには発表者の名前も入っています。この例の場合、「朝早く大学を出発して、パワースポットで有名な府中の大國魂神社（おおくにたま）に参拝してから、府中競馬場で競馬観戦をします。その後、大学の近くの野川公園でお昼ご飯を食べて、調布の神代植物公園（じんだい）で珍しい植物を見ます。今日は天気もいいので、吉祥寺の井の頭公園まで行ってのんびりします。そして、夕方、駅前の紅葉丘商店会（もみじがおか）でお弁当を買って寮に帰りましょう。」というプランです。実際の地図通りの配置ではありませんが、フィールドトリップをしているような感覚で発表できるので、ワクワクした気分が味わ

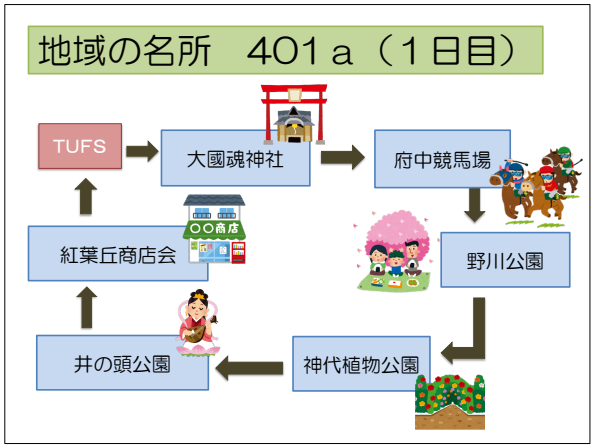


図 29　タスク３の発表順のスライド例

[5] タスク 3 の具体的事例については、工藤嘉名子・大津友美（2019a）「フィールドワーク型タスクにおける効果的な情報収集・活用のし方―内容の充実した口頭発表を実現させるために―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 第 45 号』（pp. 155-171）をご参照ください。

BY NC ND

えるかもしれません。

このような形で発表テーマを可視化しておくと、STEP8 の「発表を聞いて考えたことを話し合う」の時にも役に立ちます。発表は 2 日間かけて行うので、前日の発表内容を忘れていることが多いのですが、2 日間の「フィールドトリップの日程表」を使って全員の発表を思い出してから話し合いに進むと、話し合いもスムーズに進むでしょう。ちなみに、このスライドは、第 6 章で紹介するレポート集「地域の名所を紹介する」の目次にも活用しています。

タスク 3 の STEP6「発表のスライドを作る」のスライド資料（p. 143）が入手できます。入手方法については、巻末の「お知らせ（その 1)」をご覧ください。

●タスク４：インタビュー「私のボランティア経験」

タスク 4 は、地域の NPO やボランティア団体など、身近なところでボランティアに関わっている人をゲストに招き、ボランティア活動についてインタビューします。そして、インタビューの内容を報告書にまとめて、グループで報告し合うというものです。本書の中には NPO やボランティアの話があちこちに出てきます。このタスクには、ボランティア活動という切り口で、本書で扱ったテーマについて振り返るという狙いもあります。

タスク 2 のインタビューのポイントと共通する点も多いので、ここでは、①ゲストとの関係作り、②内容の濃い報告書にするための働きかけの 2 つについてご説明します。

◆ゲストとの関係作り

このタスクには、学内のボランティア団体に所属している学生から長年ボランティア活動に携わっている地域の方まで、幅広い年齢層の方にゲストとして参加していただいています。毎回参加してくださる地域の方が増えたこともあり、最近は年齢層の高い方の参加が多いです。ボランティアの活動内容も、本の読み聞かせや国際交流活動、震災後の復興支援、点字翻訳、次世代のための森づくりなど、多岐にわたっています。ゲストの募集は学内の掲示や HP などでも行っていますが、知り合いに声をかけて参加していただくことが多いです。

年上の人に敬語を使ってインタビューするということもあり、学生はタスク 2 のインタビューより緊張するようです。そこで、マッチングとアイスブレーキングとで、お互い気持ちがほぐれるような工夫をしています。ゲストとインタビューグループをマッチングするときには、絵札（動物や花などの絵が描いてある札）を使って、同じ絵を引いたゲストとグループがペアになるようにします。こうしたマッチングだけでも歓声が上

BY NC ND

がり、場が和みます。また、アイスブレーキングでは、日本の遊びの紹介も兼ねて、ゲストと一緒にしりとりをしています。出てきた言葉は画用紙に書き、どのグループが一番言葉の数が多かったか競います。ゲーム性を持たせることで、たった５分程度のアイスブレーキングでも、ゲストと学生の距離がぐっと縮まり、その後のインタビューもあまり緊張せずに進められるようです。

さらに、ゲストの方にはボランティアで参加していただくので、互恵的な関係作りを心がけています。その一例として、インタビューセッションの最後に、ゲストの方からボランティア活動への協力を呼びかけていただく時間を設けています。そうした呼びかけに応じて、興味のある学生は、国際交流イベントに参加したり絵本の英訳を手伝ったりという形でボランティア活動に協力しているようです。また、私たち教師もインタビューのときの写真やインタビュー報告書をゲストの方に送って、感謝の気持ちを伝えています。参加したゲストの方からは、「自分が長年やってきたボランティア活動について振り返ることができた」「新たな目標を持つことができた」といった感想が届き、みなさん「ぜひまた参加したい」と言ってくださるので、本当にありがたいです。

◆内容の濃い報告書にするための働きかけ

このタスクでは、インタビューした内容を報告書にまとめます。報告書を書くのに必要な情報はインタビューシートの質問項目と対応させてあるので、インタビューシートを使ってインタビューすれば、必要最低限の情報が収集できるようになっています。しかし、内容が具体的でゲストの人柄やボランティア活動に対する思いが伝わるような内容の濃い報告書を書くためには、教科書には書かれていない工夫や働きかけが必要です。

まずは、ゲストへの協力依頼です。ボランティア活動について具体的なイメージが持てるよう、ボランティア団体のパンフレットや活動風景の写真などをご持参いただいています。パンフレットには正式な組織の名称や設立年、活動の目的などが書かれているので、報告書を作成する際に正確な情報が確認できます。また、パンフレットや写真があると会話も弾み、インタビューシートにはないことについても質問するきっかけになります。絵本の読み聞かせのボランティアの方には、実際に読み聞かせや手遊びを体験させていただいています。そして、これはタスク２でも同じですが、インタビューセッションでは、インタビュー内容の確認も兼ねて、ゲストの方にインタビューシートを完成するのにもお手伝いいただいています。こうしたゲストのご協力のおかげで、より正確で具体的な情報収集、具体的なイメージや実感を伴った情報収集が可能になり、報告書の内容も充実したものになると思います。

BY NC ND

次に、報告書の感想を深めるための働きかけをご紹介します。教科書のインタビュー報告書例の「6.インタビューの感想」(p.208) では、ゲストの印象や特に印象的だった言葉を引用して感想を締めくくっています。雑誌などの「インタビュー後記」でもよく用いられる手法です。インタビューシートにも「インタビューで印象に残った言葉」を書く欄がありますが、この欄は報告書を書くときに必要なので、インタビューの後で、必ず書いておくよう指示します。もし印象に残る言葉がないという場合には、ゲストの話し方や雰囲気などの印象を書かせるとよいでしょう。また、グループで報告書を書く場合でも、インタビューの感想は必ず一人ずつ書かせています。それによって、教科書のモデル文のコピーではない、オリジナルで等身大の感想が引き出せるような気がします。ゲストの方も一人ひとりの感想を楽しみにしているようです。なお、「インタビューの感想」に、「インタビューは難しかった」など、タスク自体の感想を書く学習者もいるので、「感想」にはゲストの話を聞いて考えたことを書くよう、念押しが必要です。

●タスクの評価法

タスクの評価法は、それぞれの機関のカリキュラムや各科目の成績評価法に応じて設定されていると思いますが、ここでは、一例として、第 2 章でご説明した、東京外国語大学の「中級 2 総合日本語 401」というクラスでの実践例を紹介します。

当該クラスの学生は、各タスクの発表とディスカッションが終わった後で、「Can-do チェックリスト」を提出します。この Can-do チェックリストは、各自がタスクの過程や成果を振り返り、自分自身の達成度を自己評価するためのものです。宿題の提出点にはなりますが、タスクの評点の対象にはしていません。教師の目から見ると、適正な評価をしていると思われる学生もいる反面、過大評価だと思われる学生が多いのが実情ですが、自信や自己受容の度合いなど、個々人の評価行動から見えてくることも多いので、チェックリストは学生を理解するための参考資料としています。なお、Can-do チェックリストの内容については、到達目標や学習項目の確認も含め、各タスクの 1 コマ目の導入のときに説明しています。

タスクの評価自体は、教師用の評価シートを用いて行っています。評価シートは、Can-do チェックリストの項目の中から、教師が観察可能な項目取り出し、全体で 5 項目になるよう作成しています。例えば、タスク 1 の評価シートは、次ページの図 30 のようなものです。評価項目の①②④⑤は、タスク 1 の Can-do チェックリスト（p.43）から取り出したものですが、評価項目③は独自に設定したものです。このクラスでは、タスク 1 の指導のポイントで述べたように、内容の深い発表作りを重視しており、学生にもそうした発表を目標にしてほしいので、評価項目に加えています。また、「他の人の発

BY NC ND

表を聞いて、質問やコメントをした」という項目も Can-do チェックリストから取り出したものですが、これは加算点の対象としています。その日の授業で 2 回以上質問・コメントしたら「＋1」としています。こうした加算点があることで、聞き手としての積極的な参加を促すことができると考えています。

各タスクの評点は 20 点満点ですが、図 30 の例のように、短いコメントも書いてフィードバックしています。ペアで発表した場合には、①～③は同じ評点をつけますが、④⑤の話し方の部分は個別に評価しています。こうした評価の観点や方針については、Can-do チェックリスト同様、予め説明し、学生にも了承してもらっています。

タスク１「街で見つけたおもしろいもの」　評価シート

テーマ：レジ袋	発表者：A さん
評価の項目	**良い ←　　→ 頑張って**
①写真を見せながら、物の定義や特徴をわかりやすく説明することができた。	[4] ・ 3 ・ 2 ・ 1
②自分が疑問や不思議に思った点について、わかりやすく話すことができた。	[4] ・ 3 ・ 2 ・ 1
③テーマについてよく考え、内容を深めることができた。	[4] ・ 3 ・ 2 ・ 1
④適切なスピードや声の大きさで話すことができた。	[4] ・ 3 ・ 2 ・ 1
⑤聞いている人の方を見ながら話すことができた。	4 ・ [3] ・ 2 ・ 1
★他の人の発表を聞いて、質問やコメントした。（＋１）	合計　１９＋１　／２０

■コメント：
・レジ袋と環境問題の関係について、とてもわかりやすく説明できました。他の人も共感していましたね。
・話し方もスムーズでよく準備してありました。クラス全体を見て話せるようにしましょう。

図 30　教師用評価シートの例（タスク 1）

以上、タスク 1 の評価シートを例に評価法についてご説明しましたが、タスク 2～4 も同じように、Can-do チェックリストの項目を取り出して、20 点満点（＋加算点）で評価しています。このような評価シートは、履修生が多い科目では、短時間で効率的に評価（得点化）できるというメリットがあります。もちろん、このような評価シートは、ピア評価に活用することもできるでしょう。

BY NC ND
東京外国語大学留学生日本語教育センター

■第４章　話し合いの進め方のポイントと実践例

『出会い』の中には、「考えてみよう」や「話し合ってみよう」など、グループで話し合う活動がたくさんありますが、話し合いの目的や求められる成果物など、課題の特性は様々です。そこで、本章ではまず、代表的な話し合い活動のパターンをいくつか取り上げ、それぞれの活動の進め方と成果の共有のし方についてご説明します。ここでは、本書に出てくる話し合い活動のうち、①ブレーンストーミングをする、②調べたことを報告し合う、③自分の考えを１文で表現する、という３つを取り上げ、それぞれの目的や話し合いの進め方、成果の共有のし方についてご紹介します。これらの活動を行う際のキーワードは「可視化」です。

1．ブレーンストーミングをする

「考えてみよう」の問いの中には、「『異文化』と聞いて、何をイメージしますか。（第1課トピック 1)」「商店街の良さはどんなところだと思いますか。（第３課トピック 1)」のようなブレーンストーミングのための質問がたくさんあります。ブレーンストーミングは各自が思いついたことを自由に出し合う活動なだけに、いかに話し合いのプロセスや成果を可視化するかが重要です。そこで、ごく一般的に用いられている手法だとは思いますが、「画用紙に書きながら話し合う」方法をご紹介します。この活動の目的や手順などの概要は図 31 の通りです。

■活動：各自の連想や意見を画用紙に書き込みながら、自由に話し合う。
■目的：〇多様な考えを出し合うことで、テーマについて多角的に理解する。
　　〇テーマに関する語彙の拡充とネットワーク化を促す。
■用意する物：画用紙（または A3 など大きめの紙）とサインペン
■手順：①画用紙の中心にキーワード（「異文化」「商店街の良さ」など）を書く。
　　②各自意見を出し合いながら、キーワードの周りに言葉や文を書く。
■成果の共有（例）：
　〇実物投影機で画用紙（成果物）を見せながらグループで発表する。
　〇各グループ１つずつ答えを言い、同じ答えなら✓をつけ、違う答えなら加筆する。
■ルール：〇声に出して言ったこと、話し合ったことだけを画用紙に書く。
　　〇できるだけたくさん書く。

図 31　ブレーンストーミング活動の進め方

CC BY NC ND

ここでは、第 1 課トピック 1 の「考えてみよう」の 3 つ目の問い「『異文化』と聞いて、何をイメージしますか。」を例に、実践例をご紹介します。3〜4 人のグループを作り、各グループに画用紙 1 枚とサインペンを 1 セットずつ配ります。画用紙の中心に「異文化」というキーワードを書いたら、自由に言葉や文、絵などを書き込んでいきます（図 32）。

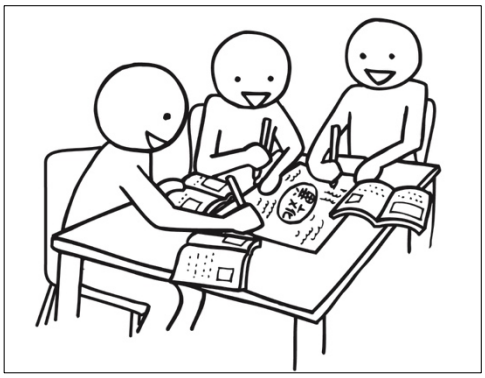
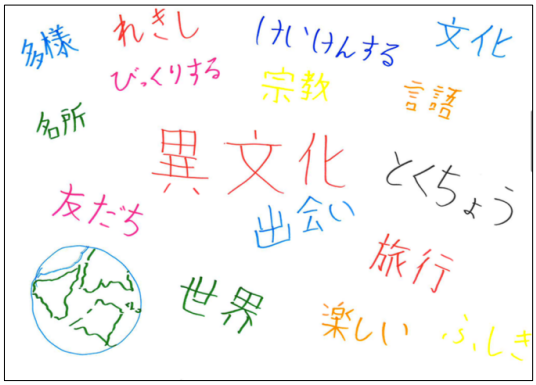


図 32　ブレーンストーミング活動のイメージ

このとき、「声に出して言ったことや話し合ったことだけを書く」「できるだけたくさん書く」といった、話し合いのルールを板書しておきます。また、画用紙に書かずに話しているグループには、何でもいいので出てきた言葉をたくさん書くよう促します。話し合いにかける時間は、この問いの場合、クラスで初めてのディスカッションなので、少し長めに設定し、10 分としています。時間も板書しておくとよいでしょう。

この話し合いでは、図 33 のような成果物が出てきます。左の図のように異文化で連想する言葉を自由に書き込むグループもあれば、右の図のようにカテゴリーに分けて言葉を分岐させていくグループあり、デザインは様々です。このように、成果物のデザイン自体に個性が表れる話し合いの場合には、実物投影機などで成果物を見せながら発表させるとよいでしょう。その際、「単語を読み上げるのではなく、できるだけ文にして発表する」「グループ全員が話す」といったルールを示す必要があります。初めの頃はまだ単語を並べるだけで、なかなか文にはならないかもしれませんが、学期末には、まとまりのある発話ができるようになるはずです。



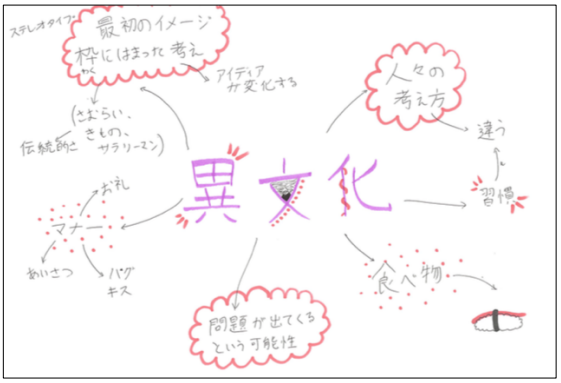


図 33　ブレーンストーミングの成果物の例（L1 トピック 1）

CC BY NC ND

ブレーンストーミングの成果の共有では、グループ発表以外の方法も有効です。例えば、「商店街の良さはどんなところだと思いますか。」のような話し合いの場合、各グループで 1 つずつ順番に答えを言わせるという共有のし方もあります。答えを言う際には、「他のグループと同じ答えは言わない」というルールを示します。また、他のグループの答えを聞いて、「同じような答えなら✓をつける」「違う答えなら、別の色のペンでその答えを書き足す」という作業をさせています。こうした活動によって、他のグループの答えに積極的に耳を傾けたり、新しい考えや言葉を互いに学んだりすることができると思います。だいたい 2 巡くらいすると、クラス全体の話し合いの成果が各グループの画用紙にまとまることが多いです。ちなみに、最終成果物の画用紙は、各自写真に撮って記録として残すよう促しています。

ブレーンストーミングは、本書では最も頻繁に行われる活動なので、成果の共有のし方にバラエティを持たせることで、話し合い活動もマンネリ化せず、メリハリの利いた授業になるのではないかと思います。

ただし、書きながら話すことによって、話し合いよりも書くことを優先させてしまい、実りある話し合いにならない場合もあるでしょう。問いの性質や話し合いの目的にもよりますが、そのような場合には、話し合いの最中はメモを取るだけにし、十分話し合った後で紙を渡して話し合いの内容を整理させるという方法も有効かもしれません[6]。

[6] 話し合いの際に「書く」という行為を行うことの問題点については、参考文献の大津・工藤（2018a）、大津・工藤・熊田（2019）をご参照ください。

東京外国語大学留学生日本語教育センター

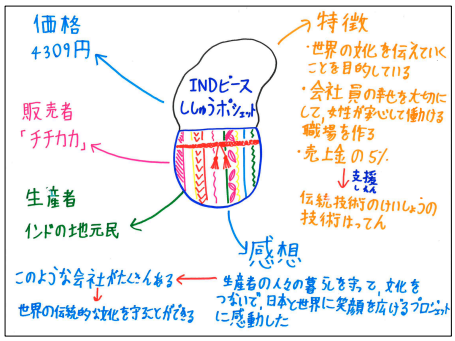
2. 調べたことを報告し合う

「話し合ってみよう」の中には、各自が調べてきたことをグループで報告し合う活動がいくつかあります。「地域と関わりの深い会社や店を紹介する（第 3 課トピック 2)」「フェアトレード商品を紹介する（第 5 課トピック 1)」などです。それぞれ教科書にワークシートがあり、調べたことが整理できるようになっています。実際の授業では、宿題として各自調べてきてあることを前提に「話し合ってみよう」をやっています。ここでは、「調べてきたことを画用紙（パネル）に書いて報告し合う」という方法をご紹介します。この活動の目的や手順などの概要は図 34 の通りです。

■活動：各自調べてきたことを画用紙（パネル）に書いて報告し合う。
■目的：〇多様な事例を共有することで、本文で扱った内容について具体化する。
　　〇書き言葉から話し言葉への変換練習をする。
　　〇パネルを見せながら話すことで、聞き手の理解を促進する。
■用意する物：画用紙（または A3 など大きめの紙）とサインペン
■手順・成果の共有：
　①各自下調べしてきた内容を画用紙にまとめ、報告用のパネルを作る。
　②パネルを見せながらグループで順に報告し合い、質疑応答をする。
■ルール：自分の報告の持ち時間が終わるまでは、次の人の報告に移らない。

図 34　調べてきたことを報告する活動の進め方

例えば、第 5 課トピック 1「話し合ってみよう」の「フェアトレード商品を紹介する」という活動では、まず、各自が下調べしてきたフェアトレード商品について、画用紙を使ってパネルを作ります。商品の絵のほか、ワークシートの項目にしたがって、商品名や価格、販売者、生産者などの必要事項を好きなようにレイアウトして、パネルを完成させます。図 35 は、実際に学生たちが作成したパネルの例です。パネル作成は 15 分程度を目安にしています。



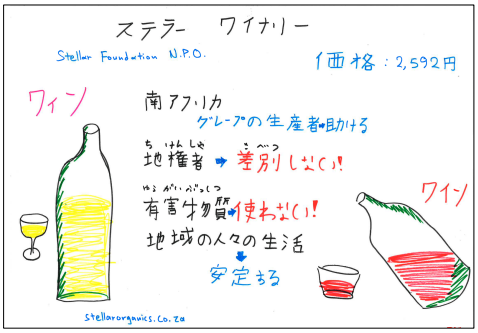


図 35　報告用パネルの例（L5 トピック 1）

BY NC ND

パネルの準備ができたら、3〜4 人のグループで、一人ずつ順番に報告をしていきます（図 36 参照）。パネルを見せながら説明することで、単に書いてあることを読み上げるのではなく、聞き手に伝えようという話し方になると思います。また、聞き手も絵や文字情報があるので、話の内容が理解しやすくなります。もちろん教科書のワークシートの内容を読み上げるだけでも情報を伝えることはできますが、パネルを用いることで、よりインタラクティブな報告になるはずです。これを私たちは「パネル効果」と呼んでいます。このような活動は、書き言葉から話し言葉への変換練習にもなるだけでなく、クラス全員の前で発表するよりもリラックスして話せるので、タスクの発表に向けた良い練習の機会にもなると思います。

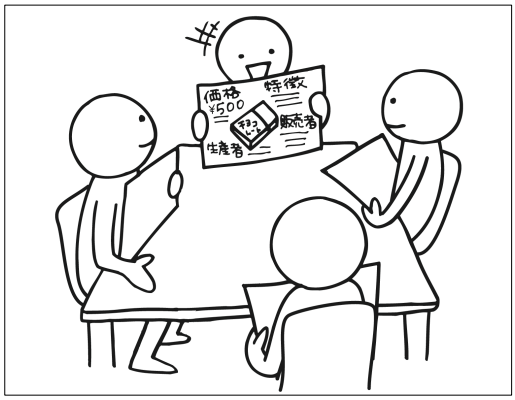


図 36　パネルを用いた報告のイメージ

なお、このような活動では、グループ全員の報告が終わるまでの時間に差がついてしまうことがあります。1 人の持ち時間を 5〜7 分に設定し、「持ち時間が終わるまでは次の人の報告に移らない」といったルールを示すなどして、時間をコントロールするとよいでしょう。

BY NC ND

3. 自分の考えを１文で表現する

本書の第１課トピック１と第６課トピック２、つまり最初と最後の「話し合ってみよう」は、テーマについて自分が考えたことを１文で端的に表現するという活動になっています。第１課では「留学することの意義は、･･･である。」、第６課では「子どもにとって、本は･･･である。」という文のパターンを使って、各自の１文をグループで協力しながら作ります。この活動の目的や手順などの概要は図 37 の通りです。

■活動：グループで協力しながら、各自の考えを端的で魅力的な１文で表現する。
■目的：〇表現の精緻化を図り、表現の幅を広げる。
　　〇多様な考え方や表現の比較・分類を通して、自身の考え方を相対化する。
■用意する物：清書用の紙（A3 用紙を横長に半分に切ったもの）とサインペン
■手順・成果の共有：
　①3～4 人のグループで協力して各自の「1 文」を作り、清書用の紙に書く。
　②紙を見せながらクラスで一人ずつ「1 文」を発表する。
　③自分と似た考え方の人を探してグループを作る。
　④自分たちのグループに共通するキーワードを考える。
　⑤グループのキーワードを説明する１分スピーチを考え、発表する。
■ルール：〇他の人が「いいね！」と思えるような魅力的で印象的な文を作る。
　　〇お互いに協力し合って、各自が表現したいことを文にする。

図 37　自分の考えを１文で表現する活動の進め方

ここでは、第６課トピック２の「話し合ってみよう」の「子どもにとって、本は･･･である。」を例にご説明します。トピック２の「話し合ってみよう」では、まず「子どものころに好きだった本」について各自紹介し合い、その後で「子どもにとって、本は･･･である。」という文を作る活動に移ります。子どものころに好きだった本について語ることで、自らの実体験を伴った１文を作ることができるはずです。

この活動では、3～4 人のグループになり、互いに協力し合いながら各自の 1 文を作ります。このとき、「子どもにとって、本は大切なものである。」や「子どもにとって、本は眠くなるものである。」といった「つまらない文」ではなく、他の人が「いいね！」と思えるような魅力的で印象的なオリジナルの文を作る、というルールを示しています。そうすることで、積極的にこの活動に取り組もうという意欲を高めるだけでなく、グループでのインタラクションも増えるはずです。もちろん、学習者だけでは限界がありますので、教師の助けが必要なときには手を挙げて助けを求めるように言っています。ま

BY NC ND

た、この文を作る際には、「(本は) ～てくれるものである」と「V てくれる」を使ったほうが自然な日本語になる場合が多いので、「～てくれる」が使える人は使ってみるよう、言語形式面でのアドバイスもしています。各自の「1 文」ができたら、図 38 のような清書用の大きな紙にサインペンで清書して、成果の共有を行います。

子どもにとって、本は

である。

図 38　「1 文」の清書用の紙（L6 トピック２）

さて、成果の共有のし方ですが、ここでは、東京外国語大学で実践している少し変わった方法をご紹介したいと思います。まず、一人ひとり順番に自分の「1 文」を読み上げます。このとき、聞いている人は自分と似たような考えの人を覚えておくよう言います。全員の発表が終わったら、学生は席を立ち、「1 文」の紙を見せながら、似たような考えの人同士でグループを作ります（図 39)。実際には、「新しい世界」や「想像力」といった共通する言葉を手がかりにグループを作っていくことが多いようです。

グループができたら、自分たちのグループに共通する考え方を表す「キーワード」を考えて別の紙に書きます。その後、自分たちのキーワードを説明する 1 分スピーチを考えてもらい、代表の学生に発表してもらいます（図 40)。スピーチでは、そのキーワードをつけた理由のほか、具体例や具体的なエピソードを交えて話すように指示します。グループ作りの段階では、まだ感覚的に「1 文」の共通点を捉えているだけですが、キーワードをもとにスピーチをすることではじめて、「1 文」の背景にある共通の価値観を言語化することができます。同時に、このように多様な考えや表現を比較・分類することによって、自身の考え方を相対化することもできるのではないかと考えています。

図 39　グループ作りのイメージ

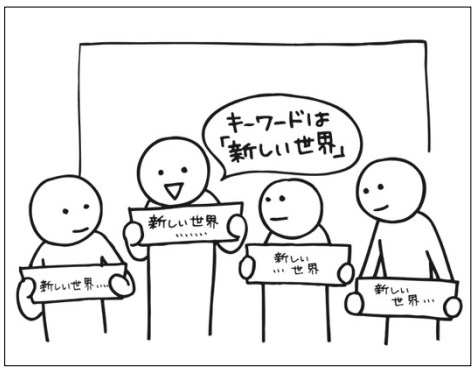


図 40　キーワードの発表のイメージ

BY NC ND

この活動のように、たった１文で自らの考えや価値観を表現するのは、非母語話者にとってはハードルの高い作業かもしれません。しかし、あえて工夫を凝らした１文を考えさせることにより、表現の精緻化を図り、表現力の幅を広げることができるのではないかと考えています。実際に、学生たちは、「(子どもにとって、本は) 想像力を駆り立ててくれるものである」「今まで知らなかった世界への入口である」「奇跡を信じることを教えてくれるものである」「世界を理解するための第一歩である」「現実から逃避するための手段である」「新しい友達と出会って一緒に冒険するための手段である」といった、とても素敵なオリジナルの「1 文」を作り上げることができます。発表のときにも、それぞれの「1 文」に感嘆や共感の声が上がり、拍手が送られることが多いです。まさに「言葉の力」を実感できる活動だと言えるでしょう。

ちなみに、各自の「1 文」はそれぞれキーワードごとにクラスの最終成果物としてまとめ、学生に配布しています (図 41)。「1 文」の紙を回収するときには、「キーワード」を書いた紙をつけてグループごとに提出させているので、とりまとめの作業も楽です。

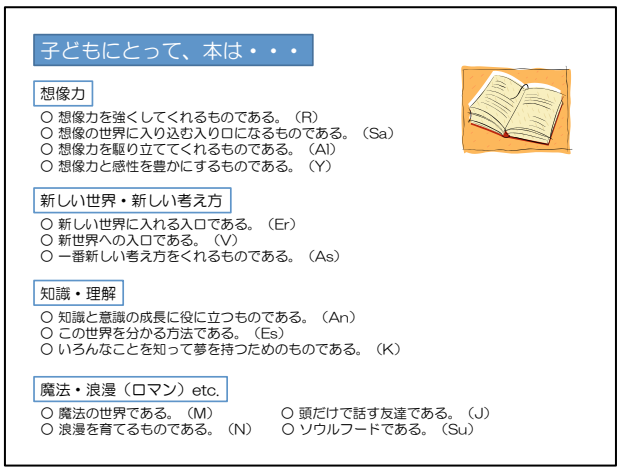


図 41　最終成果物の例（L6 トピック２）

以上、3 つの話し合い活動を取り上げて、それぞれの進め方や留意点についてご説明しました。成果物はもちろん、話し合いや成果発表の手順やルール、時間設定などを可視化することで、話し合いの目的やゴールも共有でき、話し合いも円滑で有意義なものになるでしょう。また、「話し合い」というと、「話す」という技能だけが重視されているような印象を受けるかもしれませんが、上述の実践例でご紹介したように、成果物を仕上げるだけでも「読む」「書く」「話す」「聞く」という 4 技能が総合的に用いられています。成果の共有のし方についても、学習者個々人に 4 技能の運用が求められるような手法を工夫すると、言語習得という観点から見ても効果的な活動になるのではないかと思います。

BY NC ND

■第５章　別冊の使い方のポイントと実践例

本章では、『出会い【別冊：文型・表現練習編】』を使った授業の進め方のポイントについて、①文型練習→②表現練習の順にご説明します。また、東京外国語大学での実践を中心に、それぞれの実践例についてもご紹介します。

1．文型練習

文型練習では、本冊のトピック１の読解活動で必要とされる文型や接続表現などを８項目取り上げています。文型練習は、本冊のトピック１でのテーマ学習が円滑に進められるようにするためのものです。できるだけテーマ学習に時間がかけられるように、ここでは、短い時間でどう文型練習を進めるかについてご説明します。説明にあたっては、次のような授業の流れを想定しています。８つの文型を２日に分けて扱い、例文読みと【練習 1】は宿題にして授業で答えを確認するというやり方です。１つの文型に使う時間は、例文の確認と【練習１】を合わせて 10 分程度を目安としています。【練習 2】は宿題にして、クラスでフィードバックをしています。もちろん、８つの文型を１日で扱ってもかまいません。

文型練習の授業の流れ（例）

〈1 日目〉　文型 5～6 項目
　①例文および文型の留意点の確認　※ 例文読み・【練習 1】は宿題
　②【練習 1】の答えの確認
　　◆ 宿題：残りの文型 2～3 項目の【練習 1】
〈2 日目〉　文型 2～3 項目
　同　上
　　◆ 宿題：【練習 2】　→　後日クラスでフィードバック

●例文と文型の説明

学習者には授業前に予習をしてくるように指示します。学習者は自分で例文を読み、その下の文型説明を確認したうえで、【練習１】をしてから教室に来ます。教室では、意味・形・用法について教師が時間を取って教えることはせず、例文を皆で一緒に読む中で、注意点を伝えています。例えば、第１課文型練習の文型１は「S（の）だろうか」

BY NC ND

という文型ですが、学生 A に例文①「日本は安全な国だと聞いたが、本当だろうか。」を読ませたあと、他の学生に、「A さんは、日本は安全な国だと思っていますか。」と質問し、「話者が疑問に思っている」というポイントがわかっているかどうかを確認します。形や方法についても、例文③まで読んだあとで、「だろうか」と「のだろうか」が混在していることに注意を引き、どんな場合に「のだろうか」が使われているかを考えさせ、疑問語があるときは「のだろうか」が使われることを確認します。

●練習１（穴埋め式短文完成問題）

【練習 1】は穴埋め式の短文完成問題で、例文や文型説明の要点が理解できたかどうかを確認するためのものです。宿題として学習者が作ってきた文は、クラス全体で共有するまえに、まずはペアや小グループで答えを確認し合います。学習者同士でも、十分互いの問題点を指摘し、適切な答えを導き出すことができます。

そのあとで、どんな答えがあったかクラス全体で共有しますが、学習者の答えはできるだけ板書します。実物投影機などで【練習１】のページをホワイトボードに映し出すことができるなら、その上に、学習者の答えをどんどん書き足していくと良いでしょう。そうすることで、学習者は、クラスメイトから、自分が考えもしなかった意見が聞けたり、新しい表現を習うことができたりします。例えば第１課【練習１】の①「東京の電車は、どうしてこんなに（　　）のだろうか。」では、「ごみが少ないのだろうか」や「静かなのだろうか」など、さまざまな角度から意見が出てきます。「時間に正確なのだろうか」と言いたくて「時間が正しいのだろうか」と言ってしまう学生もいますが、クラス全体でどう直したら良いのか考えることで、学習者にとっては「時間に正確」という新しい表現を知るきっかけになります。そしてもちろん、「静か（な）のだろうか」と「な」を忘れたりする学生もいますので、基本的な形や用法の理解確認にもなります。

●練習２（短文作成問題）

学習者は新しい文型を習ったからといって、すぐにその知識を運用に結びつけられるわけではありません。新しい文型を習っても、それを使って正確な文を作ることは、まだ難しいでしょう。そこで、その前段階の練習として、与えられた語を順番に使って文を作成する練習を行います。この練習では、基本的な文構造や動詞・形容詞の活用形、助詞の使い方、テンス・アスペクトなど、既有の言語知識を総合的に運用することが求められます。

BY NC ND

【練習 2】のような形式の練習に馴染みのない学習者も多いと思いますので、やり方を説明する際には、次のようなことを留意点として確認するとよいでしょう。

①語の順番を変えてはいけない。
②会話文以外は、「だ・である」体（普通体）を使う。
③文の主語と述語が何か、現在形の文か過去形の文か、その動詞はどんな助詞と一緒に使うか、といったことをよく考えて文を作る。

【練習 2】は、8 つの文型全ての【練習 1】が終わった後の宿題としています。ペアまたは小グループで【練習 2】の答えを確認しあったあとで、クラス全体でその答えを共有するとよいでしょう。実際の授業では、解答例（解答冊子と同じ内容）を実物投影機で見せながら短文作成の留意点を確認することもありますが、その場合は、図 42 のように、学生がよく間違える箇所は赤字で示しています。なお、答えは 1 つではありませんので、適宜クラスで他の解答例も共有してください。

■文型８

【練習２】p. 90

①昔（むかし）の日本では、{貝（かい）をお金として使っていた／貝がお金として使われていた}という。

②専門家（せんもんか）の話によると、都会（とかい）{では／の} ミツバチの数（かず）が減（へ）っているという。

図 42　【練習 2】のフィードバックで使用している解答例（第４課文型８）

東京外国語大学留学生日本語教育センター

２．表現練習

表現練習では、本冊のトピック２の聴解教材から抽出した話し言葉の表現やストラテジーなどを、各課につき３項目ずつ取り上げます。口頭発表、インタビュー、日常会話などで使用されるフォーマルな表現、カジュアルな表現、話し言葉特有の表現を学び、学習者自身が場面に応じて、それらの表現が使えるようになることを目指します。また、学習者が会話に積極的に参加し、他者との友好な関係を構築できるようになるために、相手の話を聞いて適切なコメントを述べる、相手の話の続きを予測するといったストラテジーも学びます。１つの項目に使う時間は項目によっても違いますが、会話・スピーチ例の確認と練習、「聞いてみよう」、「話してみよう」を合わせて、20～30 分程度です。

●会話・スピーチ例の活用

表現練習では、表現形式だけでなく、語のアクセントや文のイントネーション、ポーズといったパラ言語的な特徴を理解することが重要です。クラス全体で例文を読み、意味や形を確認すると同時に、学習者の発話のし方にも注意します。例えば、第１課の表現練習２は自分の考えを述べるときの「～んじゃないかと思う」ですが、「な↴いんじゃないかと思う」のときは、冒頭の「な」の後に下降するアクセントになっているかどうか学習者に注意喚起します。そのあとで、できるだけ自然な発話になるように、ペアで会話・スピーチ例を読みます。代表２組くらいに発表してもらい、他の学生にどうだったかコメントしてもらっても良いでしょう。

●練習

ここでの練習は、習った表現を適切な形式で発話できるかを確認するための変換練習です。教科書を見ながらでもできますが、パソコンのスライドソフトを用いると、フラッシュカードのように使えます。例えば第１課表現練習２の「～んじゃないかと思う」であれば、図 43 のように、「①日本の物価は高すぎる」をスクリーンに映し、学習者はそれを見て「日本の物価は高すぎるんじゃないかと思います」のように変換します。こうすることで、書いて形の確認をするのではなく、習った表現がスムーズに発話できるまで練習することができます。また、学習者全員が前を向いて練習することになるので、しっかり口を開いているかどうか、自信のなさそうな人はいないかなど観察することもできます。

東京外国語大学留学生日本語教育センター

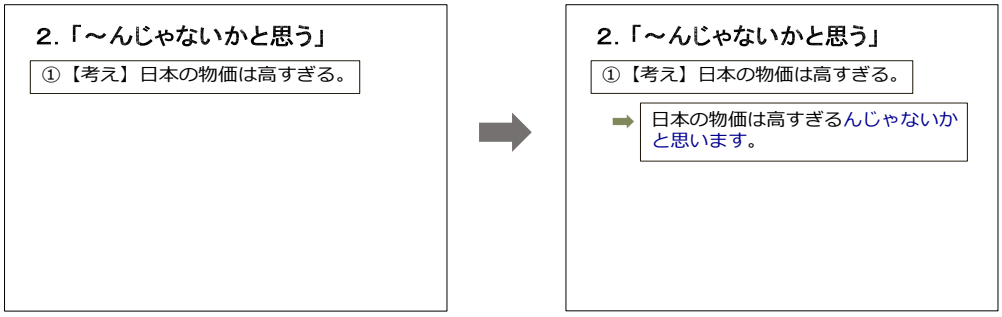


図 43　表現練習のスライド例　L1 表現練習２

●聞いてみよう

「聞いてみよう」の目的は項目によってさまざまです。例えば、第 1 課の表現練習 2「～んじゃないかと思う」のような話し言葉特有の表現や、敬語など場面のフォーマルさや会話相手に合わせて変える表現などの場合は、特定のコンテクストの中で習った表現が聞き取れるようにすることを目指します。第 5 課の表現練習 3「相手の話から答えを予測する」のような会話ストラテジーの場合は、実際に音声を聞く中で、そのストラテジーが使えるようになるよう練習を行います。

CD の音声を聞いて学生が答えを書いたあと、実物投影機などで聞いてみようのページをホワイトボードに映し出します。そして、学習者に答えを言ってもらい、書き足していきます。複数の答えが出された箇所については、最後にもう一度 CD を聞いて、正しい答えを確認します。そのあと、できあがった談話を使って会話の練習をする際には、ペアで、できるだけ音声的特徴に注意し、感情を込めて演じるように練習するよう指示します。道聞きなどの会話では、ジェスチャーをつけて実際に演じてもらうなどすると、場面や非言語行動の理解の確認にもなります（図 44 左）。また、第 4 課の表現練習 3「感想やコメントを交えながら話す」のようなスピーチの表現なら、教科書の松本城の写真をホワイドボードに投影し、それを指差しながら話させると、後の「話してみよう」やタスクのための良い準備になります（図 44 右）。

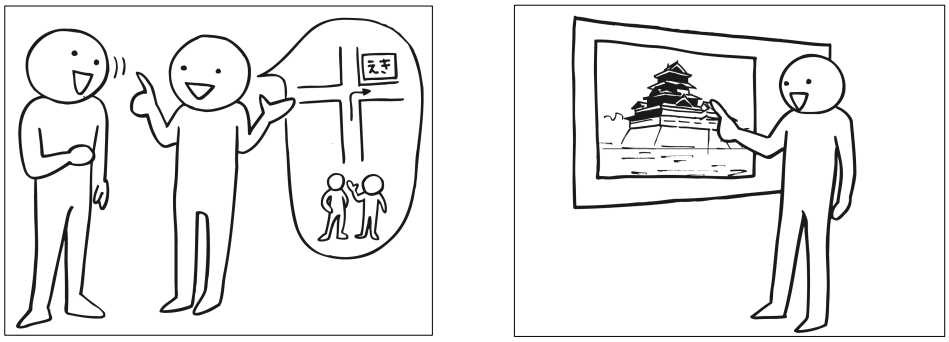


図 44　ジェスチャーを使った表現練習

東京外国語大学留学生日本語教育センター

●話してみよう

「話してみよう」の目的は、習った表現を実際の場面で使えるようになることです。場面の特徴、会話の相手との関係性を確認したあとで、ペアや小グループで練習を行います。このとき、できるだけ音声的特徴に注意し、感情を込めて演じるように練習するよう学習者を励まします。立って、相手と向かい合って話すようにすると、やりやすくなるかもしれません。

BY NC ND

■第６章　本書を用いた発展的活動の事例

本章では、『出会い』を用いた発展的な活動として、①体験型学習・フィールドワーク・フィールドトリップ、②レポート集作成の事例をそれぞれご紹介します。

1．体験型学習・フィールドワーク・フィールドトリップ

本書は、教室の外での実体験を通してテーマへの理解を深めることを狙った教科書です。そうした本書の特徴をそれぞれの学習環境やカリキュラムに合わせ、体験型学習やフィールドトリップとして展開している実践例として、①お豆腐教室体験（愛知県立大学）、②フィールドワーク＠地域の野菜店（京進ランゲージアカデミー大阪校）、③市内小学校訪問（浜松情報専門学校）、④秋の遠足（浜松情報専門学校）の 4 つの取り組みをご紹介します。

●お豆腐教室体験（愛知県立大学）

第 2 章の技能別日本語科目のシラバス例でも書いたように、第 3 課トピック 2 で取り上げられている「おとうふ工房いしかわ」は県内の企業であり、豆腐作り体験教室や工場見学を行っているので、第 3 課トピック 2 の授業に合わせ、豆腐作りの体験教室に参加しています。以下、簡単に概要をご紹介します。

◆体験の目的

〇教科書で紹介されている会社を訪問し、実際の様子を知る。会社について、より理解を深める。
〇教科書を通した学びの中で疑問に思ったこと、より詳しく知りたいことを直接聞く機会をもつ。会社の人の生の声を聞く機会をもつ。
〇豆腐作りを楽しむ。

◆授業全体の流れ

授業全体の流れは図 45 の通りです。第 3 課の学習は「考えてみよう」「聞いてみよう」は教科書の問いに合わせて進みますが、「話し合ってみよう」は内容を変更し、会社の人への質問を考える時間に当てています。ホームページなどにある会社に関する情報を視聴・閲覧し、グループでいくつか質問を考え、その後全員で話し合います。参加する体験教室は「簡単！竹ざるお豆腐作り体験教室」です。通常 1 時間程度ですが、予約の際に、大学で使っている教科書にこの会社が掲載されていることや授業の一環として訪問したいことなどを伝え、レクチャーや質疑応答の時間を多めに取ってもらってい

BY NC ND

ます。体験教室に参加した翌週の授業でふりかえりの時間を取ります。

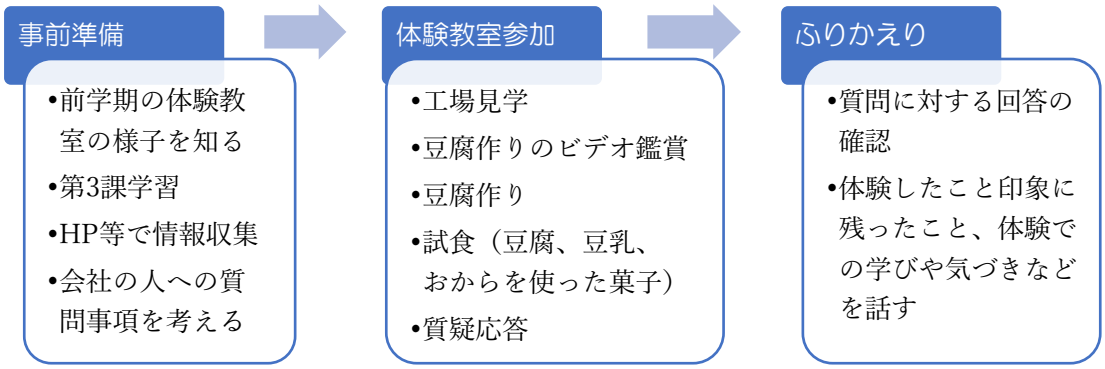


図 45　お豆腐教室体験の授業の流れ

◆学生の感想・学び

体験教室終了時やふりかえりの時間に出てきた学生の感想は、以下のようなものがあります。

〇豆腐の食べ方がこんなにたくさんあるとは思いませんでした。いつもみそ汁に入れるだけだったので、いろいろな料理を作ってみたいです。

〇できたての豆腐はおいしかったです。何もつけないでもおいしくてびっくりしました。

〇豆腐を作るのは特別な時間でした。思ったよりも簡単でとてもおもしろかったです。アジアでは、豆腐は重要な材料だから、作るのをやってみるのはいい機会でした。スタッフの手伝いと説明のおかげで、おいしい豆腐を作ることができました。

〇豆腐って割りと作り安かったんですが、やっぱり簡単に作る物と専門家が作った物は差があると感じました。このことが何事も簡単にはできますが、工夫して遣り熟すとより良い結果に通じると思いました。

◆所感

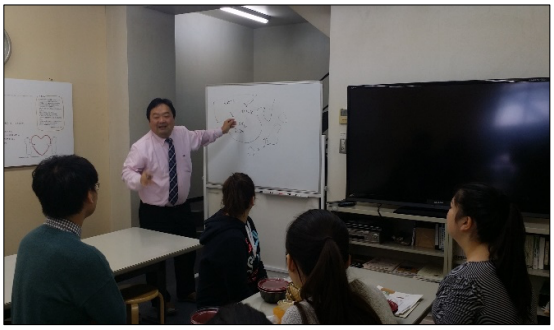
これまで 4 回（4 学期）体験教室に参加しましたが、学生たちにはとても好評ですし、私自身も楽しみながら参加しています。豆腐作りの体験やレクチャーを通して、教科書で学んだことをより詳しく知ることができるいい機会になっていると思います。

ただ、会社のある場所が大学からは遠く、移動時間の都合などで、参加できるのは土曜日しかありません。また、地元ではとても人気のある会社で、早くに予約が埋まってしまいます。第 3 課が終わったタイミングで体験に参加できるよう日程を確保するのが大変です。学生も慣れない場所への移動で大変そうではありますが、大学周辺の地域とは違う街並みを見て楽しんだりもしているので、可能な限り、体験教室への参加は続けていきたいと思います。

鎌田　美保（愛知県立大学）

BY NC ND

「お豆腐教室体験」の風景♪



石川社長のご説明に熱心に耳を傾ける学生たち

豆乳とにがりを入れて混ぜます♪

みんな真剣に作業しています

寄せ豆腐の完成！

注）写真の掲載については、学生および「おとうふ工房いしかわ」の許諾を得ています。

BY NC ND

●フィールドワーク@地域の野菜店（京進ランゲージアカデミー大阪校）

第 5 課「食からみる世界」のまとめの活動として、学校付近にあるオーガニック野菜の店「FUjiYA」にご協力いただき、フィールドワークを行いました。こちらのお店ではオーガニック製品だけでなくフェアトレードの商品も扱われているため、第 5 課トピック 1「1 杯のコーヒーから世界を考える」の内容ともつながっています。以下に、その概要をご紹介します。

◆体験の目的

〇教科書の中のテーマをより身近に、「自分ごと」として感じる。

〇テーマについて調べ、現場に出向いて調査をし、その成果を報告するというフィールドワークの流れを体験する。

〇他の学生たちの成果報告を聞き、テーマについての知識をさらに深める。

〇地元にある店について知り、お店の人との交流を楽しむ。

◆授業全体の流れ

授業の大まかな流れは、図 46 に示した通りです。

事前準備では、インタビューの質問や成果発表の内容がグループ間で重ならないよう、いくつかサブテーマを用意し学生たちに選んでもらいました。今回設定したサブテーマは「オーガニック」「フェアトレード」「FUjiYA というお店」「FUjiYA の店長さん」です。それぞれのサブテーマについてインターネットで簡単なリサーチを行った後、インタビューの質問と発表のイメージを考えてもらいました。

フィールドワーク当日は、お店訪問や声掛けのマナーを再確認し、教師をインタビュー相手に見立ててリハーサルを行いました。訪問はお店に迷惑がかからないよう、グループごとに時間をずらして行いましたが、これはお店が学校から徒歩 5 分の場所にあるため可能でした。

成果発表の構成はこちらから指定せず、学生たちに考えてもらいましたが、どのグループもこれまでの発表経験をもとに「導入→内容→まとめ」という分かりやすい構成ができていました。発表は成績評価の対象とし、学生たちにも評価とコメントを書いてもらいました。発表の様子は学生に許可を取った上でビデオ撮影をし、ご協力いただいたお店の店長さんに見ていただき感想をもらいました。このことで、学生たちはより緊張感を持って発表に臨むことができたと思います。

東京外国語大学留学生日本語教育センター

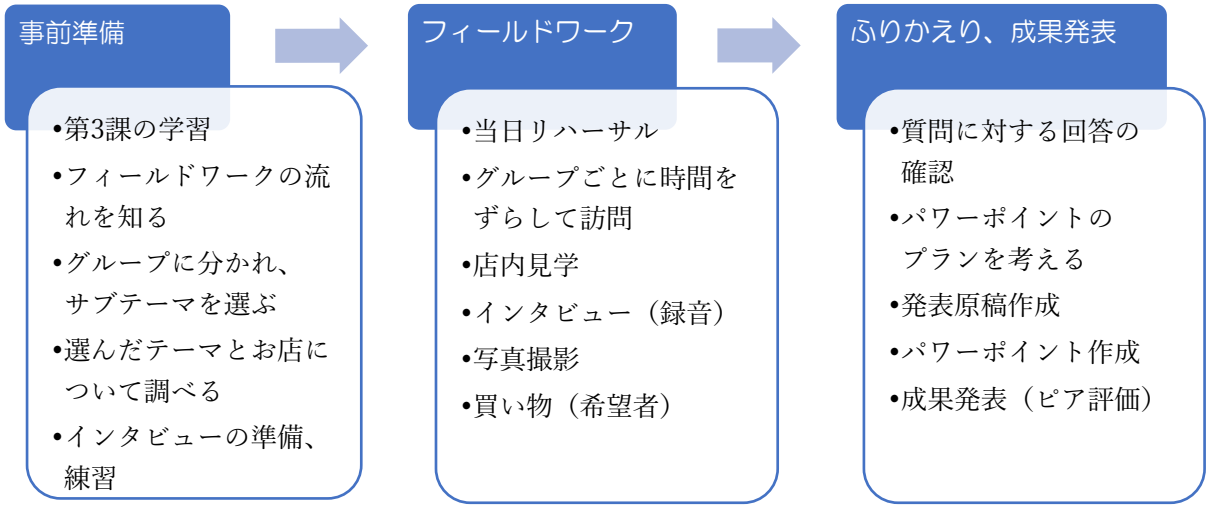


図 46　フィールドワークの流れ

◆学生の感想・学び（成果発表より）

〇オーガニック野菜はもっと高いと思っていたが、予想に反して高くなかった。

〇スーパーの野菜は農薬がかかっているので、長期的に食べると健康に良くないかもしれない。健康のためにはオーガニックはとても良いことが分かった。

〇フェアトレード商品は普通の商品より少し高いけど、生産者の現在と未来の生活のために、役立っている。毎日買うのは難しいけど、ときどきなら私たちも買えると思う。

〇実際にお店に行って、いろいろなことが勉強できたしいい経験になった。

〇店長さんは自分の仕事や生き方を自分で決めている。都市と田舎がつながった生活はとても健康的で情熱に満ちている。これが本当の幸せだと思う。

◆所感

当校では、1 つの学期中（3 か月）に必ず 1 回は教室の外とのつながりを作るように心がけており、ビジターセッションや校内／外でのインタビュー活動などを積極的に授業に取り入れています。今回のフィールドワークもそのような取り組みの 1 つですが、毎回学生たちが生き生きと学ぶ姿を見ることができ、教師にとっても大きな喜びになっています。

こうした活動を定期的に実施する上で難しいのは、前回の活動からどのように変化をつけるか（学生たちを飽きさせない工夫）、またタスクの難易度をどのように段階的に上げていくか、といった点です。今回のフィールドワークでは、①事前にテーマについて「リサーチする」というステップを入れたこと、②発表の中身の構成を学生自身に考

BY NC ND

えさせたこと、③それぞれのグループに別々のサブテーマを与え、成果発表の際に「他の学生から学ぶ」ことの意義を実感してもらうようにしたことなどが、工夫した点、また指導の際に意識した点でした。

次の活動はどんなものにしようか、いつも悩んでいますが、同時にそれが楽しみでもあります。『出会い』は、そのような活動のヒントをくれ、教師にも学生にも新たな経験と学びをもたらしてくれる教科書だと思います。

竹田　奈緒子（京進ランゲージアカデミー大阪校）

フィールドワークの様子

思ったより高くない！
オーガニック野菜、購入した人もいました

緊張しつつ、店長さんにインタビュー

成果発表に使用したパワーポイント　みんな丁寧に作っています

注）写真の掲載については、学生および「FUjiYA」の許諾を得ています。

BY NC ND

●市内小学校訪問（浜松情報専門学校）

第 6 課「子どもと教育」の学習後、発展的な活動として、浜松市内にある小学校を見学に行きました。この活動を行った理由は主に 3 つあります。1 つ目は、学習を進めて母国と日本の小学校の違いを聞いても「日本と同じです」という答えしか返って来なかったこと。2 つ目は、母国で異なる国の人と接した経験がある学生が少ないこと。3 つ目は、卒業後に定住を考えている学生が多いこと。浜松市は全国でも有数の外国人集住都市であるため、多くの小学校で外国人児童が在籍しています。実際の小学校を見学することによって、学習内容の理解を深め、さらに自分の将来まで考えるよい機会になればと思い、小学校見学を実施しました。以下に、その概要をご紹介します。

◆体験の目的

〇母国と日本の違いを発見する。

〇時間厳守、整理整頓、思いやり等、日本人にとって大切な習慣やマナーの教育が行われている現場を見学することにより、日本文化への理解をさらに深める。

〇小学校の教員、児童と交流する。

〇将来、自身の子どもを通わせることになるかもしれない小学校を見て、日本の初等教育を理解する。

◆授業全体の流れ

事前準備から活動終了までの流れは、図 47 の通りです。

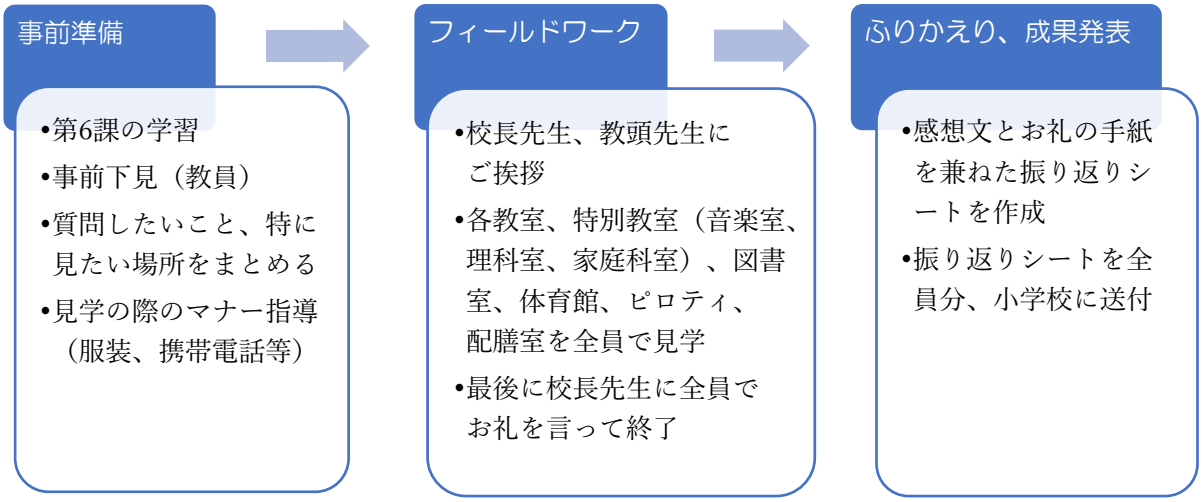
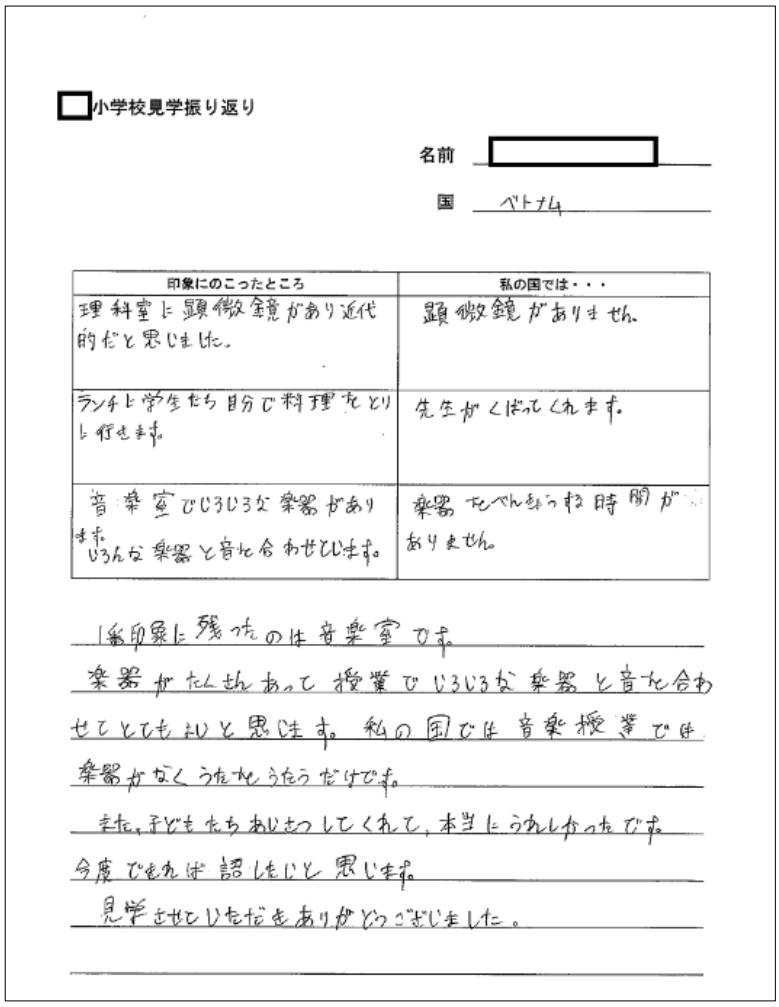


図 47　小学校見学の流れ

東京外国語大学留学生日本語教育センター

小学校に見学に行くと学生に伝えると、非常にうれしそうな反応が返ってきました。充実した見学ができるように、学習内容を再度見直し、質問したいことや、特に見たい場所をグループごとにまとめました。また、実際に授業を行っているところを見学させていただくため、ご迷惑にならないよう、事前に教員が小学校を訪問し、小学校の先生と打ち合わせをし、校内の下見も行いました。携帯電話の電源を切ること、写真撮影はしないこと、肌が見える服装（タンクトップ、短パン、ミニスカート等）で来ないこと、母語で話さないこと等を事前に指導しました。

見学後、感想文とお礼の手紙を兼ねた振り返りシートを書きました。「おもしろかった」「楽しかった」で終わらないよう、振り返りシートは母国と日本を比べるようなものを準備しました（図 48）。普段、作文が苦手な学生も、思い思いに自分の国との比較を書いていました。また、丁寧に気持ちを伝えたいという思いから、敬語を何度も確認してきた学生もいました。



□小学校見学振り返り

名前 [redacted]

国 ベトナム

印象にのこったところ	私の国では・・・
理科室に顕微鏡があり近代的だと思いました。	顕微鏡がありません。
ランチに学生たち自分で料理をとりに行きます。	先生がくばってくれます。
音楽室でいろいろな楽器があります。いろんな楽器と音を合わせています。	楽器をべんきょうする時間がありません。

1番印象に残ったのは音楽室です。
楽器がたくさんあって授業でいろいろな楽器と音を合わせてとてもいいと思います。私の国では音楽授業では楽器がなくうたをうたうだけです。
また、子どもたちあいさつしてくれて、本当にうれしかったです。
今度できれば話したいと思います。
見学させていただきありがとうございました。

図 48　振り返りシートの例

BY NC ND

◆学生の感想・学び（感想文および授業での聞き取りより）

〇まだ小さい１年生でも給食を自分で準備していることに驚いた。

〇日本の小学生は楽器ができてすごい！

〇料理を作る授業（家庭科）や体育など、日本の小学校は生きて行くために必要なことを身につけている。

〇小学校の先生や児童があいさつをしてくれてとてもうれしかった。

◆所感

見学当日はトラブルもなく、とても楽しく見学することができました。小学生を見ている学生たちは非常に楽しそうでした。彼らにもっとも大きな印象を与えたのは給食で、小学生が一列に並んで配膳に向かったり、お皿を落としたら自分で洗いに行ったりする姿などを見て感心していました。また、もっと話してみたい、一緒に給食を食べたいという感想も多く見られました。特に印象に残ったのが、英語を教えてあげたいという感想で、日本に来てから「誰かにサポートされる」生活を送ってきたであろう留学生が、英語を教えて「サポートしたい」という気持ちになったことをうれしく思いました。また、見学後の感想文では、それぞれが母国と日本の違いをすぐに書くことができ、活動の目的の１つであった「母国と日本の違いを発見する」を達成することもできました。

留学生は、昼間に学校、夜は学費のためにアルバイトという生活を送っており、時間的にも気持ち的にも余裕がもてないことがあります。『出会い』での学習とこういった活動を通して、楽しみながら日本社会を知り、そして、日本社会で生きていってほしいと思います。

三浦　千尋（浜松情報専門学校）

BY NC ND

●秋の遠足（浜松情報専門学校）

浜松情報専門学校（以下、浜情）では、国際 IT ビジネス科の 1 年生を対象に『出会い』を使用しています。国際 IT ビジネス科は留学生対象の学科で、1 学年約 50 名、1 クラス約 25 名と多く、その大部分をベトナム人が占めています。アルバイトをして学費を稼ぐ学生が多く、非常に生活力が高い学生が多いのが特徴で、『出会い』で取り上げられていることと、実際の自分たちの生活とをすぐにリンクさせることができます。

タスク 3 では、「地域の名所を紹介する」をアレンジし、「秋の遠足に行きたい場所を紹介する」というものに変更しました。プレゼンテーションは学年全員で行い、そのプレゼンテーションを聞いたうえで、自分が行きたいと思った場所に投票し、もっとも投票数が多かった場所に、秋の遠足で実際に行くようにしました。テキストでは、1 人または 2 人で地域の名所をめぐり、調査する活動となっていましたが、浜情では 1 クラスが約 25 人と多く、学生が個々に好きな場所に調査に出かけることが管理上難しかったため、教室内で調査が行えるものにしました。また、「遠足の場所を決める」という目的を 1 つ加えることによって、学生のモチベーションがあがり、さらに、プレゼンテーションを聞く学生も自分たちの発表が気になってそわそわするということもなく、他の人の発表にも耳を傾けるのではないかという狙いもありました。

タスク 3 に費やしたのは 8 コマ＋発表当日 4 コマの計 12 コマです（1 コマ：90 分）。タスク 1、2 の様子から、実際に発表をしてみてはじめて、学生自身が自分たちの発表の改善点に気がつくことが多いということがわかったので、本番の前に、クラス内でのリハーサルを実施しました。授業の進め方は図 49 の通りです。

コマ数（90分/コマ）	1	2	3		4―5	6	7	8	9―12
テキスト	STEP1・2	STEP3	STEP4	STEP5・6			STEP7		STEP7
内 容	①活動説明 ②グループ分け ③場所の決定	情報収集	学習	原稿作成 PPT作成		発表練習	①クラス内 リハーサル ②レビュー	PPT 原稿修正	プレゼンテーション 本番
備 考	・発表する場所が重ならないように留意 ・場所が何も思いつかない場合に備え、教師側でも候補地をいくつか用意しておいた。			・「原稿を書く人」「PPTを作成する人」にグループ内で役割分担し、同時進行で作業を進めた。		・グループ毎に練習	・リハーサルを行うことで、自分たちの発表の足りないところが明確になった。 ・取り組みが積極的ではなかったグループは、他のグループの発表を聞くことで「このままじゃいけない！」と焦り出し、前向きに作業をするようになった。		・司会進行は教師 ・プログラムを用意し、発表を聞いている学生は、それに評価を書いた。 ・投票用紙、投票BOXも準備した。

図 49　タスク３のスケジュール

BY NC ND

自分たちが行きたい場所を調べて発表し、最多票を獲得すれば遠足でその場所に行けるということで、活動に対する学生のモチベーションは終始非常に高かったです。グループで原稿担当、PPT 担当と分担しながらも、日本語で話し合い、助け合う姿が多くみられたことが印象的でした。せっかくの遠足だからと、日本の象徴でもある富士山の周辺や日本有数の観光地である伊豆など、浜松からは遠方の名所を選んだグループが多かったのですが、移動時間がもったいないと、学校からバスで 30 分ほどの浜松市内の観光地を選んだグループもありました。学習した文型を使い、場所の詳細と行きたい理由をしっかりと発表できたことで、学生たちは、自分たちが住む静岡県の魅力を再発見できたと思います。

全 14 グループ発表後、学生全員で投票を行いました。「富士サファリパーク」と「山中湖」が最多票で並び、最後の一票で遠足の行き先が決まるというドラマチックな展開に、学生からはどよめきがおこり、大盛り上がりの発表会となりました。1 位になった「山中湖」の発表は、PPT に美しい富士山と紅葉の写真を使ってインパクトを与えたこと、水陸両用のバスで学生の興味を引いたこと、発表も慌てずにできたことがポイントだったと思います。

晴天に恵まれた 2017 年 10 月 27 日、バスで山中湖へ向かいました。忍野八海を散策、昼食は名物のほうとう、山中湖の水陸両用バス「カババス」での遊覧と、富士山の麓からその美しさと迫力を存分に楽しむことができました。授業内の活動で学生の意見を聞き、学校側がそれを採用し、遠足として実行に移すことができたことで、学生の満足度が高い活動となりました。今回、遠足の行き先として選ばれなかった場所も、学生が友達同士で行ったと話してくれました。学校とアルバイトとその周辺だけでなく、もう少し広い範囲に関心を持ち、目を向けてくれるきっかけにもなったと思います。

青嶋 晶子・三浦 千尋（浜松情報専門学校）

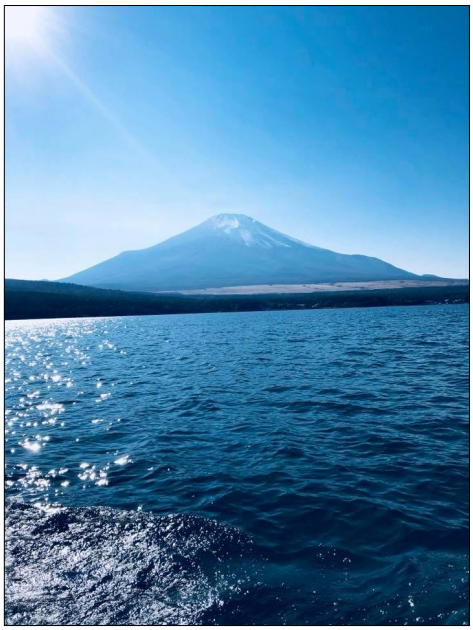
BY NC ND

「秋の遠足」の風景♪

美しい富士山を近距離で撮影

忍野八海の湧水も透明で美しく

これが山中湖の水陸両用バス「カババス」



湖上からの富士も美しく

野菜たっぷりで
美味しかったです！

昼食はやっぱり山梨名物「ほうとう」

BY NC ND

2. レポート集作成

ここでは、本書での学習成果をレポート集としてまとめている実践例として、「地域の名所」の冊子作成（東京外国語大学）の事例をご紹介します。

●「地域の名所」冊子作成（東京外国語大学）

東京外国語大学の「地域言語Ａ（日本語総合-4)」では、タスク 3 の「地域の名所を紹介する」での発表をもとにレポートを作成し、学期末に「地域の名所」を紹介する冊子にまとめています（図 50)。この冊子は、学生にとっては自分たちだけの地域の名所ガイドブックで、記念品として学期の最後に配付しています。

図 50　レポート集の表紙

レポートの作成は「レポートを書いてみよう」（pp. 147-151）に従い、①書き言葉の学習、②レポート作成（初稿)、③添削・フィードバック、④修正、⑤完成という流れで行っています。まず、①書き言葉の学習として、発表のときの話し言葉と書き言葉の表現を比較し、違いに注目させ、さらに、レポートの例（pp. 149-150）を見て、どのような表現が用いられているかを確認し、書き言葉の表現を学習します。②学生たちは発表のペア毎に、発表資料をもとにレポートを作成し、初稿を提出します。③教師は初稿を添削し、学生にフィードバックを行います。④学生は指摘を受けた点に対して、修正をします。⑤最後に、修正した最終原稿を再提出して、完成です。しかし、フィードバックしたことが反映されていなかったり、内容が不十分だったりした場合は、もう一度添削・フィードバックを行い、再提出してもらいます。これらのステップを経て、原稿の最終的なレイアウトの調整などを行い、表紙や目次をつけ、クラス毎に冊子を作成します（図 51・図 52)。

学生への指導のポイントとしては、大きく 3 点あります。まず、書式に関して、希望者にはレポートのテンプレートを配付していますが、段落のはじめは一文字空ける、文字のフォントやサイズを揃えるといった基本的なルールを守っていない原稿が多くみられます。レポート例を確認する際に、書式にも意識を向けさせる必要があります。また、内容に関して、説明が不十分な場合には、質問形式をとり、記述すべきことを引き出す工夫をしています。たとえば、由来について、「それはいつからどのようなきっかけで行われるようになりましたか」というような問いかけをしています。漢字や仮名の

BY NC ND

変換ミスに関しては、正解を示すのではなく、マーカーを引くなどして学生自身に気づかせるようにしています。そして、文法の誤りや書き言葉表現の不適切な使用については、添削の際にしっかりとチェックし、学生に丁寧にフィードバックを行っています。

この活動の意義として、「地域の名所を紹介する」というタスクに対し、自ら調査やインタビューを行い、その内容について、口頭で発表し、レポートとしてまとめるという多様なプロセスを経験することで、学生自身が「日本語で出来る」という自信を得られることが挙げられると思います。レポート冊子を嬉しそうに眺めている学生たちの表情から、その自信が感じられます。

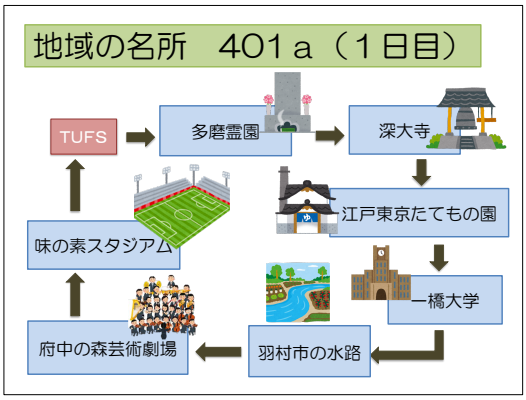


図 51　レポート集の目次の例

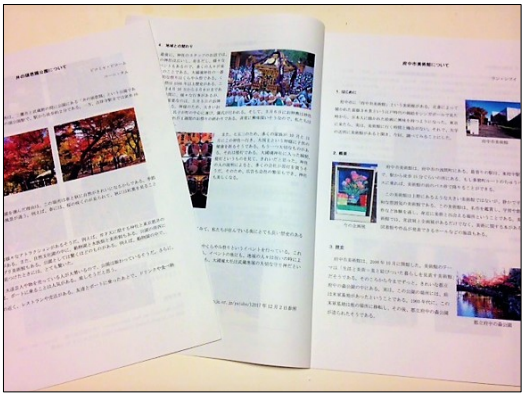


図 52　学生が書いたレポートの例

安高　紀子（東京外国語大学）

BY NC ND

■第７章　私のくふう

ここでは『出会い』を使ってくださっているユーザーの皆さんからお寄せいただいた授業実践の「くふう」をご紹介したいと思います。ご投稿いただいた皆さま、本当にありがとうございました。なお、このコーナーでは、今後もさらに皆さんのアイデアを掲載していきたいと思っています。ぜひご投稿ください。

第１課トピック１「留学することの意義」

この文章は新学期がスタートしてすぐに読む「プロローグ」としての役割を持っていますが、授業の最終日に「エピローグ」として読むこともできます。はじめに読んだときは、来日して日が浅い学生にはもしかするとイメージしにくい部分があったかもしれませんが、最後にもう一度この文章を味わうと、自身の体験と関連させて理解することができます。

まず順番に一人一文ずつ音読したあと、自分たち自身がこの数ヶ月の間に出会った日本の文化・他の国の文化・自国や自身の文化について振り返ってもらいます。小グループで語り合い、クラス全体でも共有します。クラスメイトを通して知った文化、日本人学生や地域の人々との交流から学んだ文化、などが出てきます。個々の体験や気づきを共有することで、自分たちがこの留学で何を得たのかを明確に捉えることができます。教師からは「三つの異文化」という視点をこれからの人生にも持ち続けていこう、と伝えています。

最後はお互いのがんばりをたたえ合ったり集合写真を撮ったりして、短くも濃い時間を共有した仲間との別れを惜しみます。

石田 恵里子（東京外国語大学）

第１課トピック２「街で見つけたおもしろいもの」

「話し合ってみよう」の「2. 日本の生活の中で、何か不思議に思うこと」をグループで話し合う前に、例として日本在住の外国人が不思議に思っていることをスライドにイラストや写真と語彙で提示します。Q&A を通して彼らが不思議に思っている理由をクラスの仲間と一緒に考えます。Q&A は教師から日本語学習者、日本語学習者同士、日本語学習者から教師など

東京外国語大学留学生日本語教育センター

様々なパターンで行います。このQ&Aは日本語学習者に他人の考えを知る機会を与え、理由を短絡的ではなく深く考え、一枚のイラストや写真から洞察力を養うことを目的としています。日本語学習者からは、「他人の意見を聞くことは役に立つ」、「話し合う前のウォーミングアップとして良い」などの感想をもらっています。Q&A は単純な活動であり、一枚のイラストや写真は凝った教材ではありませんが、繰り返しにより習慣化することで、日本語学習者は考える力や洞察力を養えるのではないかと思います。

鹿目　葉子（東京国際大学）

第２課トピック１「『就活』を考える」

私の担当するクラスでは、第２課トピック１の「話し合ってみよう」をアレンジし、学生が専攻している社会福祉分野への就職について考える時間を設けています。導入時に福祉についてのイメージを話してもらいます。次に、福祉施設内の案内とそこで働く人の仕事のルーティンをわかりやすくまとめたオリジナル映像を見せます。その後、質疑応答の時間を設け、自国の介護の現状と比較して考えてもらいます。私の担当した留学生たちのうち約９割が「(自国では) 子どもが親の老後を自宅で看るのは当たり前」ですが「なぜ日本ではお年寄りが福祉施設で老後を過ごすのか理解できない」という意見でした。授業後、「福祉関係の仕事をしてもいいと思った」学生が約６割いました。その理由は「お年寄りを助ける仕事だから」「仕事をしながら日本語が上手になるから」などでした。このような活動が、専攻を活かした就活について考えるきっかけになると思っています。

工藤　昭子（東京福祉大学）

（写真は映像の一部です。）

東京外国語大学留学生日本語教育センター

タスク２「私のキャリアプラン」

「自分の将来について考える」というトピック２のゴールに到達できない学生が現れることがあります。特に若い学年の学生にとってはインタビューの結果はどこか他人事になってしまいがちなようです。そこで、第２課の総まとめとして「わたしのキャリアプラン」という年表（図 53）を作成させました。インタビューの内容を見返したり、トピック１の「『就活』を考える」を読み直したり、クラスメイトと相談したりしながら、年表を埋めていきます。すらすら書ける学生もいれば、最後までほとんど何も書けない学生もいます。しかし、大切なのは年表を埋めることや立派なキャリアプランをたてることではなく、第２課で学んだことを活かしながら、キャリアや今後の日本語学習について考えることです。学生も楽しそうに取り組んでくれました。

山岸　愛美（東京国際大学）

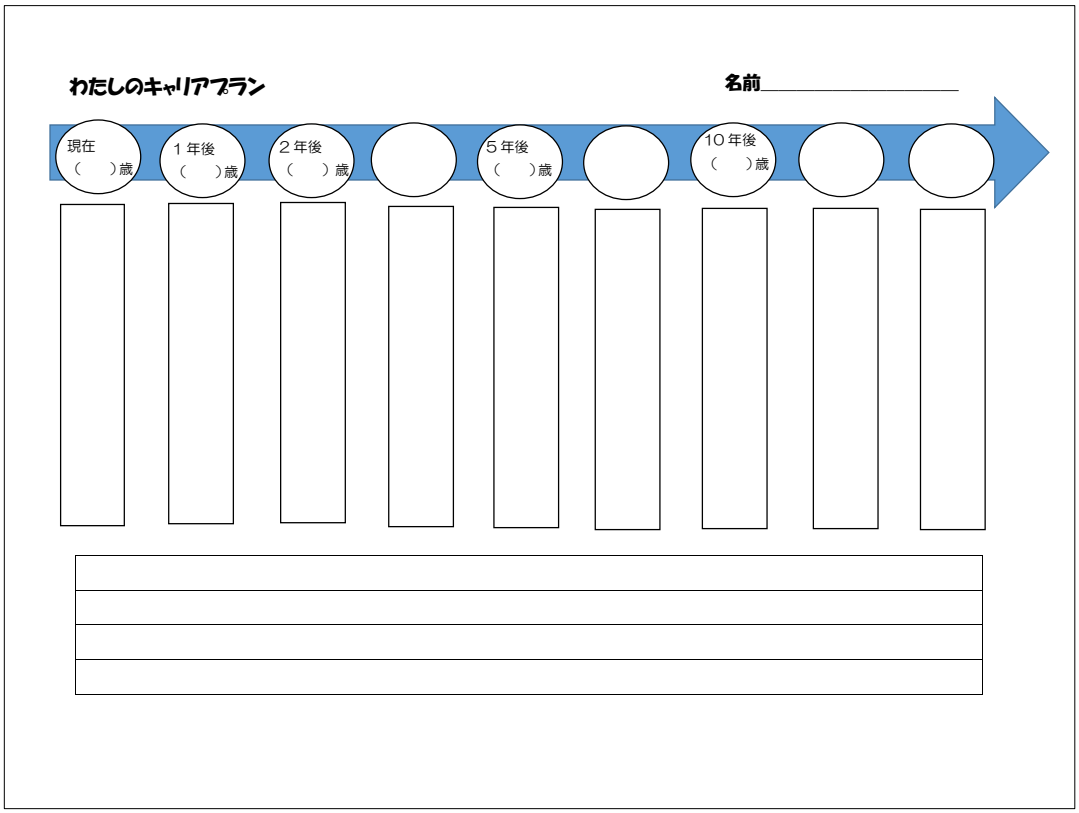


図 53　タスク２で使用している教材（年表「私のキャリアプラン」）

東京外国語大学留学生日本語教育センター

タスク２「私のキャリアプラン」 ＆
第６課トピック２「子どもたちに本を読む喜びをあげたい」

「テーマとタスクの融合」は『出会い』の素晴らしいコンセプトの一つですが、私が勤務する日本語学校という現場に合わせ、タスクの内容を少しアレンジしています。第2課では、日本人学生へのインタビューの代わりに、「先生に就活の経験を聞く」というタスクに変えて実施しました。100 近い数の会社に応募した話、異業種での勤務経験、学生へのアドバイスなどをインタビューしていく中で、学生たちは自分がこれからどうしたいのか、何をすべきかを否応なしに考えされられたのではないかと思います。

他にも、第6課トピック2「話し合ってみよう」をまとめの活動として拡大し、「人を通して本を知る、本を通して人を知る」がコンセプトの「ビブリオバトル」[7]を実施する予定です。おすすめの本を紹介し合う活動にゲーム性を持たせたものですが、新たな本との出会い、クラスメイトの新たな一面の発見を楽しんでもらえればと思っています。

竹田 奈緒子（京進ランゲージアカデミー大阪校）

第４課トピック１「里山―自然と人間が共生する場所―」

私が担当するクラスでは、各課の授業の冒頭で、映像資料を学生に見てもらい、ウォーミングアップを行っています（表 8 参照）。映像を見て、その課のテーマについての関心を活性化し、クラス内で共有してから読解作業に入ることで、理解がより深まると考えるからです。第 4 課では、日本の里山を撮影したドキュメンタリーDVD「里山～人と自然がともに生きる」（NHK エンタープライズ 2001 年）を視聴します。都心では見かけない水田やホタルの映像に、留学生たちが見入り、「わぁ」「きれい」と声が上がります。ベトナムやネパールなど、彼らの母国では、今でも耕作に牛を使っていて、ホタルが珍しくない地域もあるようですが、映像を視聴することで、自然の美しさ・大切さに改めて気づくようです。そこから、これらの自然の風景が失われつつある日本の現状に目を向けてもらい、「自然との共生」というテーマについて洞察を進めていくよう、指導を行っております。

大谷 崇（東京福祉大学）

---

7 「ビブリオバトル」については、公式 HP（http://www.bibliobattle.jp/）をご参照ください。

BY NC ND

表８　授業で使用している各課の映像資料リスト（東京福祉大学）

第１課
「トツゲキ！！となりの外国人」テレビ朝日，2017 年 12 月 30 日放送，90 分
第２課
「専門学校生のための就職活動ガイド 1～4」日本経済新聞社，2014 年，各巻 20～30 分
第３課
「上野アメ横・多国籍地下マーケット」NHK 総合，2014 年 10 月 17 日放送，30 分
第４課
「里山～人と自然がともに生きる」NHK エンタープライズ，2001 年，50 分
第５課
「もっと！フェアトレード」アジア太平洋資料センター，2014 年，33 分
第６課
「10 カ国の児童が学ぶ驚きの多国籍小学校」（「news every」の一部）日本テレビ，2014 年 5 月 13 日放送，27 分

タスク３「地域の名所を紹介する」

私のクラスでは、「地域の名所を紹介する」のタスク活動の中で、「発表の原稿を書く」（STEP5）と「発表をする」（STEP7）の間に、グループワークの時間を設けています。まず、5 名程度のグループで原稿を読みあい、「発表の原稿」の基本的な情報（紹介したい場所、所在地や簡単な特徴、選んだ理由など）をワークシートに集約してもらいます（図 54 参照）。次に、グループのメンバー同士で、それぞれの発表原稿をシートにまとめる中で、どの場所に行きたいと思ったのか、どうしてそう思ったのかを考えて、各自シートに記入してもらいます。さらに、シートにまとめた内容について、クラス全体にむけて発表してもらいます。この活動を通して、受講人数が多く、教員によるチェックがなかなか行き届かない状況でも、原稿に必要なポイントやそれぞれの項目の書き方などに改めて気づいているようです。さらに、魅力を伝えるための表現を意識する機会となっているように思います。

古田　高史（東京福祉大学）

東京外国語大学留学生日本語教育センター

タスク３　グループ・ディスカッション

１．グループ名、メンバーを書いてください。

グループ名：
メンバー：

２．作文の内容をまとめてください。発表を聞いて、表に書く

名前 学籍番号					
名所の名前					
所在地 アクセス 特徴など					
おすすめの 過ごし方					

３．グループの人の作文を聞いて、どの場所に行きたいと考えましたか。それぞれ書いてください。

名前	行きたい場所　（例）○○さんの紹介したスカイツリー	理由

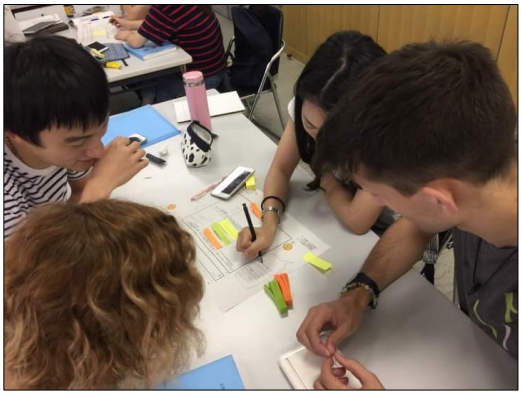
４．板書の内容（ホワイトボードに書くこと）と発表の役割を決めてください。１を発表（一人）、２を発表（二人）３を発表（二人）

発表分担：１．　　さん　２　　さん、　　さん　３　　さん　　さん

図 54　タスク３で使用しているワークシート

BY NC ND

第５課トピック１「1 杯のコーヒーから世界を考える」



私のクラスでは「話し合ってみよう」で「友だちに薦めたいフェアトレード商品」というプレゼンテーションを学生にしてもらっています。実際に友人や家族にフェアトレード商品に興味をもってもらったり、買ってもらうためにはどうしたらよいのか。プレゼンの資料作りには、「エンパシーライティング（共感文章術）」[8]というライティングメソッドを使います。エンパシーライティングでは、相手に共感してもらい、相手に自分が望む行動を取ってもらえ、その結果相手も自分もハッピーになれる文章術です。この文章術でプレゼンしてもらうと、日本語は未熟ながら、フェアトレードに対する「商品が高い」「本当に生産者の利益になっているのか」などの「ネガティブな気持ち」に寄り添う素晴らしいプレゼンができています。

馬場 典子（愛知県立大学）

第５課　発展課題「グローバル化に伴って起きるさまざまな問題」

『出会い』で日本と世界のつながりを考えてきた総まとめとしての活動です。

第 5 課トピック 1・2 で貿易不均衡や環境問題について考えたあと、フードマイレージのメリット、デメリットを考えてディベートをさせました。その後、グローバル化によってどのような問題が起きているか、小グループでブレインストーミングをさせ、そこで出てきた問題を全体でシェアして、問題を「教育問題」「環境問題」「経済問題」などのカテゴリーに分け、興味を持ったカテゴリーの問題についてさらに深くインターネットなどで調べて、それらの問題をなくすために自分たちにできることを考えてポスター発表してもらいました。ポスター発表が終わった後は大学内に掲示し、それを見た一般の学生が意見を書き込めるように付箋を用意しておきました（次ページの写真参照）。

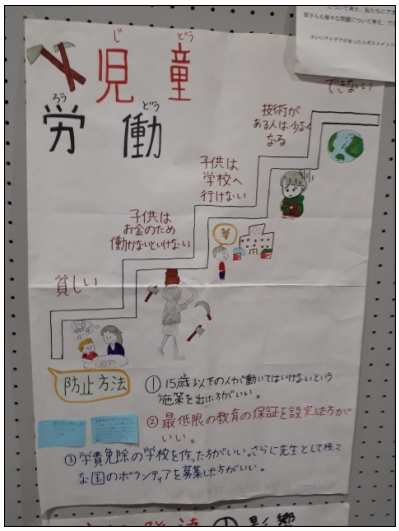
自分たちで見つけた問題点の背景や解決策を考えることで、能動的に活動に取り組め、ほかの学生の発表も問題意識を持ち、興味を持って聞くことができたと思います。

吉田 芙美（龍谷大学）

---

[8] 「エンパシーライティング」については、公式 HP（https://www.empathywriting.com）ほか、中野巧（2013）『6 分間文章術―想いを伝える教科書―』（ダイヤモンド社）をご参照ください。

東京外国語大学留学生日本語教育センター



第６課トピック１「教室の『お客様』」

外国人児童生徒が直面する「日本語の壁」「教科学習の難しさ」がどのようなものなのかを実感してもらうため、小学校の教科書をクラスに持って行って、学生たちに「日本の教科書、ここが難しい！」というテーマで、教科書を見ながら話し合ってもらう時間を取っています。学生からは、「文字（特に漢字）が難しい」「縦書きの読み方がわからない」「算数や理科は専門的な言葉が多い」「日本の習慣など文化的な知識がないと理解できない内容が多い」「方言や昔の言葉、オノマトペが難しい」など、日本語学習者ならではの意見が出てきます。こうした活動を取り入れることで、外国人児童生徒の抱える問題について、より実感を伴って理解してもらえるような気がします。

工藤　嘉名子（東京外国語大学）

●第６課トピック２「子どもたちに本を読む喜びをあげたい」

本を読む習慣のない子どもたちへの支援活動の意義について考えてもらうため、テキストに登場した支援活動について話し合う時間を設けています。具体的には「6 つの支援活動のうち、どれが支援として 1 番有効だと思うか」をグループで話し合ってもらいます。その際、ただ 1 番を選ぶだけでなく、一歩踏み込んで自分なりに根拠を考えて話ってみると、「誰でもすぐに始められるから」「長い時間で考えると…」などいろいろな観点から根拠が述べられます。そして、そこに「取り組みやすさ」、「経済性」、「持続可能性」など、さまざまな価値判断基準が反映されていることがわかってきます。さらに、優先されるべき価値を自分たちで選択することを通して、自分自身の価値観も見えてき

BY NC ND

ます。このように実際に話し合ってみることで、テキストを読んだときとはまた違う、それぞれの支援活動の意図や意義が浮かび上がってくるような気がします。

大平 幸（立命館大学）

●第６課・トピック２「子どもたちに本を読む喜びをあげたい」

このトピックは絵本がテーマになっています。子ども時代に感じた絵本を読む楽しさ、外国語で絵本を読む気持ちを感じてもらうため、クラス全員で一冊の本を読む機会を設けています。全員で読むのは、『出会い』の目的の一つが「協働」にあるからです。よく『となりのトトロ』[9]を読みます。

本を参加者の人数で分け、各参加者が自分の担当部分を読む練習をした後、教員がOHC（実物投影機）を使いプロジェクターに本のページを映し、参加者は順番に担当部分を音読していきます。OHC のイラストに見入る人、音読の声が小さいと「聞えませーん」と言う人、台詞や擬音語に笑う人、一緒に小声で音読する人、いろいろな反応があります。読み終わった時に皆が見せてくれる満足そうな顔が素敵です。

感想を求めると、「可愛い」「面白い」などに加え、「自然との共生」や「神としての自然」といった、『出会い』のキーワードに関わる発言もあり、教科書の内容が参加者の中に染み込んでいるのが感じられます。

熊田 道子（東京外国語大学）

[9] 実際に授業で使用した本は、宮崎駿（1988）『となりのトトロ〈徳間アニメ絵本〉』（徳間書房）です。

BY NC ND

お知らせ

その１　『出会い』（本冊）の解答・スライド資料などが入手できます！

トピック１の「予習シート」と「内容確認のための質問」の解答、トピック２の STEP2 の解答ほか、第４課トピック２「自然と共生する町―松代―」の音声再生時に使用するスライド資料、タスク２・タスク３のスライド資料などが出版社を通して入手できます。入手方法については、下記の HP でご確認ください。

http://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/758_support.html

その２　『出会い』（本冊・別冊）の CD 音声がダウンロードできます！

教科書を購入された方は、付属の CD に収録されている音声データがダウンロードできます。音声ダウンロードの方法については教科書（本冊、別冊とも４刷以降）に記載がありますので、そちらをご覧ください。

BY NC ND

参考文献

■第１章

✧大津友美・工藤嘉名子（2012）「アカデミックな日本語力養成を目的とした中級教材開発―基礎調査からテーマ選定までのプロセス―」『2012 年日本語教育国際研究大会予稿集第 1 分冊』，p. 289.

✧工藤嘉名子（2015）「中級教科書『出会い』におけるタスクの設計」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 41 号，pp. 201-215.

✧工藤嘉名子・大津友美（2011）「学部教養科目で求められる『知的活動』に関する調査―アカデミックな日本語力養成のための教材開発に向けて―』『日本語教育方法研究会誌』Vol. 18，No. 2，pp. 26-27.

✧工藤嘉名子・大津友美・菅長理恵・中井陽子（2015）「テーマとタスクを融合させた中級教科書の開発―開発のプロセスと教科書の概要について―」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 22，No. 1，pp. 26-27.

✧工藤嘉名子・山本富美子（2011）「『アカデミック・タスク』と下位タスク、言語スキルとの関係」『2011 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』，pp. 257-262.

✧坂本旬（2014）『メディア情報教育―異文化対話のリテラシー―』法政大学出版局

✧三宅なほみ・東京大学 CoREF・河合塾編著（2016）『協調学習とは―対話を通して理解を深めるアクティブラーニング型授業―』北大路書房

■第３章

✧池田玲子・館岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門―創造的な学びのデザインのために―』ひつじ書房

✧工藤嘉名子・大津友美（2019a）「フィールドワーク型タスクにおける効果的な情報収集・活用のし方―内容の充実した口頭発表を実現させるために―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』，第 45 号，pp. 155-171.

✧杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ編著（2004）『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部

✧館岡洋子（2005）『ひとりで読むことからピア・リーディングへ―日本語学習者の読解過程と対話的協働学習―』東海大学出版会

✧堀恵子・大隅紀子・世良時子（2018）「質問作りの手法を取り入れた読解授業」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 24，No. 2，pp. 58-59.

■第４章

✧工藤嘉名子（2015）「中級教科書『出会い』におけるタスクの設計」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 41 号，pp. 201-215.

✧大塚裕子・森本郁代編著（2011）『話し合いトレーニング―伝える力・聴く力・問う力を育てる自律型対話入門―』ナカニシヤ出版

✧工藤嘉名子・大津友美（2018a）「問題解決型のディスカッションにおける学習者間のやりとりと課題遂行の関係―問題のある提案内容に着目して―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 44 号，pp. 1-17.

✧工藤嘉名子・大津友美（2018b）「異なるディスカッション課題における日本語学習者間のやりとりの比較―賛否両論型と問題解決型のディスカッションの場合―」『日本語・日本学研究』第 8 号，pp. 51-65.

✧工藤嘉名子・大津友美（2019b）「『自己点検』を組み込んだ問題解決型ディスカッションの試み―具体的かつ説得力のある提案を促進するために―」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 24，No. 2，pp. 112-113.

CC BY NC ND

✧工藤嘉名子・大津友美・熊田道子（2019）「ブレーンストーミング型の話し合いにおける『書く』という行為の問題点」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.25, No.2, pp.92-93.
✧杉江修治（2011）『協同学習入門―基本の理解と 51 の工夫―』ナカニシヤ出版
✧杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ編著（2004）『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部

■第７章

✧「エンパシーライティング・メソッド」公式 HP〈https://www.empathywriting.com〉（2019 年 1 月 31 日）
✧中野巧（2013）『6 分間文章術―想いを伝える教科書―』ダイヤモンド社
✧「ビブリオバトル」公式 HP〈http://www.bibliobattle.jp/〉（2019 年 1 月 31 日）
✧宮崎駿（1988）『となりのトトロ〈徳間アニメ絵本〉』徳間書房

東京外国語大学留学生日本語教育センター

■編著者
東京外国語大学留学生日本語教育センター

■執筆者
工藤 嘉名子（くどう かなこ）　東京外国語大学 大学院国際日本学研究院　准教授
　担当：第 1 章、第 2 章第 1 節、第 3 章、第 4 章
大津 友美（おおつ ともみ）　東京外国語大学 大学院国際日本学研究院　准教授
　担当：第 5 章

■執筆協力者　＊2019 年 3 月末現在のご所属
青嶋 晶子（あおしま あきこ）　静岡理工科大学・浜松情報専門学校　非常勤講師
　担当：第 6 章第 1 節
安高 紀子（あたか のりこ）　東京外国語大学 留学生日本語教育センター　非常勤講師
　担当：第 6 章第 2 節
鎌田 美保（かまだ みほ）　愛知県立大学　非常勤講師
　担当：第 2 章第 2 節、第 6 章第 1 節
竹田 奈緒子（たけだ なおこ）　京進ランゲージアカデミー大阪校　教務主任
　担当：第 6 章第 1 節
田辺 淳子（たなべ じゅんこ）　愛知県立大学　非常勤講師
　担当：第 2 章第 2 節
馬場 典子（ばば のりこ）　愛知県立大学　非常勤講師
　担当：第 2 章第 2 節
三浦 千尋（みうら ちひろ）　静岡理工科大学 浜松情報専門学校　教員
　担当：第 6 章第 1 節

■「私のくふう」執筆者　＊2019 年 3 月末現在のご所属
石田 恵里子（いしだ えりこ）　東京藝術大学　特任講師
大谷 崇（おおたに たかし）　東京福祉大学・大学院 国際交流センター　特任講師
大平 幸（おおひら さき）　立命館大学　嘱託講師
鹿目 葉子（かのめ ようこ）　東京国際大学　専任講師
工藤 昭子（くどう あきこ）　東京福祉大学・大学院 国際交流センター　特任講師
工藤 嘉名子（くどう かなこ）　東京外国語大学 大学院国際日本学研究院　准教授
熊田 道子（くまだ みちこ）　東京外国語大学 留学生日本語教育センター　非常勤講師
竹田 奈緒子（たけだ なおこ）　京進ランゲージアカデミー大阪校　教務主任
馬場 典子（ばば のりこ）　愛知県立大学　非常勤講師
古田 高史（ふるた たかし）　東京福祉大学・大学院 国際交流センター　特任講師
山岸 愛美（やまぎし あみ）　東京国際大学　専任講師
吉田 芙美（よしだ ふみ）　龍谷大学　非常勤講師

■編集・統括
工藤 嘉名子

■イラスト
佐々木 博美（株式会社 日本職能開発振興会）

BY NC ND

日本で学ぶ留学生のための中級日本語教科書　出会い
実践のヒント集

発行　2019 年 3 月 25 日　初版 1 刷
編著者　©東京外国語大学 留学生日本語教育センター
お問い合わせ　東京外国語大学 留学生日本語教育センター
〒183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1
Tel. 042-330-5761

東京外国語大学留学生日本語教育センター